

自己愛は

「あなた」

じゃない

二〇二五年十月 九折空也

もくじ

自己愛はあなたじゃない	2
自己愛は「本当のわたし」という空想だ	13
空想のわたしに「じっくり」くる	19
毎夜、世界を修正している	23
自己愛の騒々しさが「陳腐」となる	26
Aくんは世界を嫌い、自己愛をやりたい	32
主題を自己愛に献上して肯定されたい	38
「違う」、いや違うわ	44
自己愛ならざるものを持っている人のほうが異常で稀有だ	49
人格が乗っ取られるほどキツい時代	55
「腐れ縁のアツいオレたち」	58
「よくわからない」のままが幼児、脳みそをしばらくしたのが大人だ	64
現実逃避、「永遠のゲスト」	67
令和回路は真ん中への配線がない	74
真ん中をぶち上げて出会うもの	82

自己愛はあなたじゃない

(本稿、インピーダンスが高いので、あなたもインピーダンスを高くしてグワーツと読め)

おれが書くと、文学になっちゃうからな。

(インピーダンスの意味はわからなくてよろしい)

あなたが、おれの書き話を読むという瞬間から、もう「誤解」が始まってしまふ。

あなたは、あなたが認識できる、この文字群・文章群を読むしかない。

それはそれでよくて、おれだって、出来ることと言えば、その文字群・文章群を書くということしかない。

ところが、おれが「何にもとづいて」「何にしたがつて」「何を見ながら」「その文字群・文章群を書いているか」というと、それはあなたが思っているところのものとは違うのだ。

あなたはここにある文字・文章を認識することができる。

それにしたがって湧いてくる感想や理解、あるいは自分の気持ちなども観測できるだろう。

あなたは読む側としてそんなことをしている。

じゃあ書く側は何をしていると思う。

何か、自分の言いたいこと、自分の感じたこと、自分の想ったこと、自分の知っていること、それらにもとづいて書くのか。

自分の企み、「こういうふうに組み立てようか」というプランにもとづいて書くのか。

そのようにして書いてもいい。

そのようにして書いてもいいけれど、それでは読めるものにならない。いや、読み手が労力を費やせば読むことはできるけれど、それはただの「情報」にかかわる行為だ。

おれが言っているところの「読める」とは異なる。

電化製品の取扱説明書や、役所の通達だって、労力を費やせば読めるけれど、それは「情報」を読み取り、理解しているだけだ。

読み物とは違う。

取扱説明書は読み物ではない。

学校で「歴史」の授業があったとして、歴史の授業で歴史が「語られる」わけではない。

情報が展示されるだけだ。

あとは、成績評価にかかわるので、みなさん労力を費やして理解し、記憶してくださいね、ということだ。

人は、自分の利益・不利益にかかわることなら、労力を費やしてでも、それを理解・記憶しようとする。

当たり前だ。

それは、費やす労力と得られる利益とのトレード、および、回避できる不利益とのトレードにすぎない。

「足もと注意！」と、段差のあるところに書いてくれてあったら、人はつまずかずに済む。

つまずいてコケるといふようなリスクやダメージと、トレードするものとして、われわれはその注意書き情報を読み取るのだ。

それは読み物ではないし、おれが言うところの「読む」という営為をしているのではない。

おれが書き話しているものを読むことは、どうしても、一般的な情報
摂取の行為に当てはまらない。

いいかげん、不気味だと思わないか？

そのように思わされる余地もなくなってしまうのが、おれの書き物だ
けれども。

あなたはあなたの知らない機能で、おれの書き物を読んでいるのだ。

あなたがおれの書き話を読むということは、もうその瞬間、どこか
へ「連れて行かれている」のであって、そこにあなたの「労力」が差し挟
まれる余地はない。

連れて行かれているだけなのだから。

あなたはへろへろになってしまいかもしれないが、それは、体験量が
あなたを打ちのめすというだけであって、あなたが労力を酷使したとい
うことではない。

だからあなたは、いまこれを、「読まなきゃいけないんだよね、労力的
にしんどい」とは思っていない。

あなたが「読まなきゃいけない」と、怯むとしたら、それは「こころの
準備」みたいなことで怯んでいるのであって、労力の消費にうんざりし
ているということではない。

読まなくていいですよと言われても、どうせあなたは次の行が気にな
ってしょうがないので、読むだろう。

おれのもたらすこの現象は、いちおう文学に根差してはいるが、むし
ろ文学というよりは一種の術、「文術」みたいなものかもしれない。

文武両道といい、武道には武術という捉え方があるのだから、文の道
にも文の術というものがあろうだろう。

おれには何も聞こえていない。

おれには何も「降りてきて」いない。

このあたりはとても説明がむづかしい。

説明がむづかしいというより、もうあてはまる概念がないのだ。

何も聞こえていなければ、まともな文章など書けようもなく、その
意味ではバチバチに聞こえているのだが、その聞こえ方が0デシベルな
のだ。

聞こえているのだけれど音響的にはゼロということ。

音響的・イメージ的には「何も聞こえていない」という状態にある。

(※環境音や生活音はフツツに聞こえています、何もうそっぱちの没我
を気取る必要はありません)

なぜバチバチに聞こえているのに0デシベルなのか。

それはもう、「こんなところにはいない」からだ。

とつくのむかしに、あなたを連れて飛び出していった。

あなたが連れて行かれているというのはそういうことだ。

書き話の道中で、あなたをどこかに連れて行きますよということでは
なく、初めから連れ去っている。

だからもう「こんなところにはいない」。

こんなところにはいないので、聞こえているといっても0デシベルだ。
自宅の目覚まし時計が鳴っていたとしても、エレベスタの頂上にいた
ら0デシベルだろう。

0リソースという言い方もできる。

おれはこうして文章を書くのに、何パーセントのエネルギーを向けて
いるか。

あるいは何パーセント「集中」しているか。

それはもちろん百パーセントだ。

百パーセントでないなら、それを「やっている」ということにはなら
ない。

百パーセントでないものは、すべて「済ませている」だけだ。

「済ませている」だけというは、社会人になったら誰もがする、日々の

「やつつけ仕事」のようなことだ。

それらは自分が「やった」ことにはならず、単に誰かが「済ませた」ということにしかならない。

だから、自分の業績にはならないし、かといって、ミスをすれば自分の責任になる。

おれの書き話しは、やつつけ仕事ではないし、そもそも誰かにやらされてるものではない。

書き話しにミスがあれば、それはおれの責任に違いないが、そもそもそれを責める立場の人が誰もいないので、まあいいかということになる。

(いや、あまりよくはない)

おれは、書き話しをするのであって、書き話しを「済ませている」のではないのだ。

それがお前の、やりたいことなのかと言われたら、たぶんそうなのだろうが、そこで安易にイエスというと、人々をますます深い誤解に陥れていくことになるだろう。

仮におれが「やりたい」と思っている、それはおれにとって0デシベルなのだ。

おれには聞こえていない。

百パーセント、もう「向こう」に行っている、おれには何も聞こえていない。

それでもあなたは、さしあたり目の前の文字・文章を認識するしかない。

本当に作用しているのは、あなたにとって観測不能の何かなのだが。

その観測不能の何かは、おれにとっても観測不能だ。

しかし、観測不能でも、結果や影響はもたらされる。

観測不能のハンマーで頭を殴られたら、何をされたのかさっぱりわからないが、それでもやはりタンコブはできるだろう。

おれはどんな文章を書いているか。

あなたはどんな文章を読んでいるか。

仮にあなたが書くとしたら、あなたはどんな文章が書きたいか。

どんな内容が書きたいか。

あるいは書かずに、実声で話すとしたら、あなたはどんな声で話したか。

どんな文体で、どんな顔つきで……

それらのすべてが、Xデシベルの音量を持っている。

それらのすべては、当たり前だが「こだわり」なのだ。

どんな文章を読んでいるか、どんな文章が書きたいか、どんな顔つき体つきの、どんな人、どんな声でありたいか、どういうふうに思われたいか、それらはすべて「こだわり」だ。

わかりづらい文章に、ヨレヨレの声、自信なさげにゾンビみたいな顔、そういうのはイヤだ、と思っている。

「こだわり」だ。

わかりやすく、それでいて個性の漂っている文章に、シルキーな声、透き通ってまっすぐな顔、そういうのがいい、と思っている。

「こだわり」だ。

それら観測可能なすべてはつまり「こだわり」で、それぞれこだわりの強さによってXデシベルという音量を持っている。

(注：本当はデシベル／dBは常用対数で表した比(基準との比)であって音量の単位ではありませんが、ここではわかりやすさのためイメージ的に借用しています。正しく言うならわたしがいま言っている0デシベルというのは0dB SPLです)

おれが書き話していると、あなたはどこかへ連れて行かれるし、書き話しでなくても、おれが目の前にいてあれこれ話したりメシを食ったりしていると、あなたは連れて行かれるのだ。

連れて行かれている先を観測することはできない。

観測できるのは、結果とか影響とかだけだ。

どういう結果や影響が現れるのか。

あなたは自分の「こだわり」がなくなるのだ。

あなたの、そんなに美人ではない顔、そんなに美声ではない声、そんなに洗練されていない話、そんなに豊かではなかった人生、人や物に対する好き嫌い、それらに対するこだわりがなくなる。

それであなたはいきいきする。

冗談じゃなく生き返ったここになる。

生まれて初めて自分の命に気づいたという人も少なくない。

けれども、そんなもの、何が起こっているかなんて、あなた本人にわかるわけではない。

単純に言って、現象が高度過ぎ、何かを感得するなんてことは不可能だ。

こだわりがなくなるといって、冷静な評価が失われるわけではない。

不美人は不美人のままだし、ダミ声はダミ声のままだ。

ヘタクソな話はヘタクソな話のまま、モテない野郎はモテない野郎のままだ。

けれども、ふだんわれわれは、それらのマイナスをこだわりにしているだろう。

そのこだわりという束縛力がなくなるといっただけだ。

マイナスはマイナスのままだ。

マイナスが、マイナスのまま、こだわりだけ消えるというような現象は、あなたがどうイメージしても捉えきれない。

じっさい、消えてしまうといっただけだ。

消えてしまうと、なぜこだわっていたのかわからなくなる。

そして、こだわりが復活すると、こんなもの消えようがない、なぜあ

のときはこれが消えていたのかわからない、ということになる。

美人は美人だし、美声は美声だし、洗練されている人は洗練されている。どこまでいってもおれの話は上手なままだ。

が、美人は美人のまま、プラスだったとして、こだわりだけが抜けるということ。

じっさい、山から見下ろした景色がうつくしかったとして、そのことにわれわれは「こだわり」を持てない。

写真を撮ったりしたら、こだわりを持つかもしれないが。

アンドロメダ大星雲が、巨大でスゴかったとして、そんなものにわれわれはこだわりを持てない。

なぜこだわりを持てないかというと、それは「わたし」ではないからだ。

わたしが美人とか、わたしの友人が不美人とか、おれの弟がスゴいか、おれの会社がダメとか、それらのこだわりは、すべて「わたし」ということにかかわっているからこそ発生している。

納豆菌が大豆をどうこうする、ということにはこだわりの持ちようがないし、麴菌が山田錦をどうこうする、ということにもこだわりの持ちようはない。

ペニシリンがブドウ球菌を殺すということについて「許せない」とこだわる人はいない。

「わたし」ではないからだ。

「わたし」にかかわってのみ、われわれは「こだわり」を持つことができ、またそれを手放すこともなかなかできない。

この現象の根幹を「自己愛」という。

美人は自分が美人ということにこだわりを持ち、不美人は自分が不美人というこだわりを持つ。

前者はプラスのこだわりで、後者はマイナスのこだわりだ。

この双方ともが、自己愛によって起こっている。

おれがここで、おれの文章は宇宙の叡智で、過去に自殺した文豪はただの失敗六歳児だった、彼らは来世ニガウリにでも転生したでしょうねというようなことを言い放つても、なぜかそのことは鼻につかない。なぜか。

おれは言いたいことを言っているだけであって、自己愛から言っているのではないからだ。

どれだけおれ自身にプラスをしても、あるいはマイナスをしても、先ほどから述べているように「聞こえていない」。

0デシベルだ。

あなたの知人の誰かが、

「まあ、わたし一応、それなりに美人ではあるし」

と言えば、その声とことばは0デシベルではない。

こだわりの音量がある。

だから鼻につく。

「わたしはそんなに美人じゃないから」

というのも、0デシベルではないので、こだわりの音量がある。

だから鼻につく。

それに比べて、偉大なるおれさまは、毎日黄金のリムジンで出迎えられないと世の中がおかしいと言えるが、世の中はそんなこともできないぐらい忙しいようなので、まあ赦してやっているとすると、こんなことはまったく鼻につかない。

0デシベルだからだ。

おれの書き話は自己愛から生じていない、だからおれは「何も聞かえていない」と述べている。

あなたはここに書かれている文字・ことば・文章を認識するしかひとまず方法はないのだが、ここに書かれている文章はすべて0リソースで

書かれている。

リソースを0.1でも向けてしまえば、とうぜん0.1デシベルの音量が発生してしまうだろう。

だからリソース0で書かねばならない。

読んでいればわかるだろう。

こいつは、「全力で書いている」のに、同時に「何の労力もなしに書いている」だろう。

おれがやっているのはそういう術なのだ。

やり方があるわけではない。

やり方があるとしたら、そういう術域へ到達する訓練や稽古のやり方があるかもしれないということであって、これじたいのやり方があるわけではない。

それでおれがあなたにもたらしめているのは何なのか。

おれがあなたにもたらしめているのは、あなた自身に起こる「うずうずした何か」だ。

何かをやっていきたくなくなるだろう。

いつものネガティブな自分、限界ばかり覚えている限界ギツネの自分と矛盾して、なぜか「なんでもできる」「なんでもやっていこう」という気がしているだろう。

それはなぜなのか。

あなたにも、あなたが聞こえないようにしているからだ。

あなたは連れて行かれているから。

あなたは本当は、上等なものになりたいのではないのだ。

プラスの人になりたいわけではなく、マイナスを相殺した人になりたいのではない。

こだわりから離れたいのだ。

あなたは、あなたの声を良くしたいのではない。

あなたは、あなたがあなたの声をしているというこだわりを消し去りたく、また、誰かが誰かの声をしているというこだわりから解放されたいのだ。

もちろんそんなことを、あなた当人は知らない。

あなたはそんなことまで勉強してきていないし、そんなことまで追究してきていない。

あなたはそんな次元の分化にまで至っていない。

ただ結果的に、「うずうず」させられているだけだ。

あなたは、美人な自分が0デシベルになり、不美人な自分も0デシベルになり、自分の洗練ぶりも0デシベルになり、自分のダサさも0デシベルになり、自分のダミ声も美声も0デシベル、年齢も実績も0デシベルになって、何もかもを赦されて大暴れしたいと思っているのだ。

それが「遊ぶ」ということから。

0デシベルのロケットランチャーをぶっ放しても、誰も傷つかない。

どんな大騒動も、0デシベルなら、静かなものだ、何の騒動にもならない。

音楽は静かになるのだ。

大騒ぎのアンサンブルは、0デシベルの大騒ぎだ。

そんなもの「うずうず」するに決まっているだろう。

そういう事象へあなたは引き込まれているのだ。

あなたは、観測不能のどこかへ連れて行かれ、得られる結果と影響として、0デシベルの「うずうず」へ引き込まれているのだ。

0デシベルの大騒ぎはどこへ響いていくか。

0デシベルのまま響きわたり、何にもぶつからず、果てしなく届いて、それは魂を呼び込む。

向こう側で何かとガチに出会う。

そのことの中にいるとき、あなたは何らの不満も持たない。

だからあなたは、その中で何かを得、その中で何かを学んでいけばいいのだが、現在のところ文化環境やあなたに養われた素地がよろしくなく、あなたは与えられたそれについてとんでもなく誤った解釈をする。

「これが、わたし」

「わたしは、これの中にいい」

「わたしは、このようでありたかったんです」

ことば尻はそれでかまわない。

けれども、こんにちの文化環境において、また社会的教育の結果として、あなたは与えられたそれを「自己愛」の掴んだものとして解釈するのだ。

違えよ。

説明はなかなかむづかしい。

なかなかむづかしいからこんな長つたらしい書き物にせねばならないのだ。

99の大騒ぎが与えられたとする。

あなたはそれを、あなた単体としては、自己愛の掴んだものとして解釈するのだ。

その解釈にもとづき、あなたは何をするかというと、99デシベルの騒動を起こす。

99デシベルの騒動。

う、うるせえ。

99のリソースをぶち込み、ほぼ「全力」。

ほぼ完全な「集中」。

99デシベル。

う、うるせえ。

「これが、何もかもを赦されて大暴れするということですよね？」
ち、違う。

違うに決まっている。

0・1デシベルでも鼻につくものが、99デシベルも出力して暴れたらどうなるか。

それはもう、聞いている人の鼻がもげるだろう。

あなたが全力でスネアドラムを叩くとどうなるか。

ひたすら「うるさい」になる。

往年の名医、バディ・リッチが全力でスネアを叩くとどうなるか。

奇蹟のグループが現れる。

奇蹟のグループが現れるのは、集中が百でも、リソースは0だからだ。

爆裂するスネアが、0デシベルで鳴り響いている。

鼻につくわけがない。

魂が呼び込まれる。

ワンショットごとにわれわれは「うずうず」させられる。

あなたは誤解をしているし、これまで誤解をしてきたし、これからも誤解をしていくのだ。

99のリソースをぶちこみ、ほぼ全力、ほぼ全集中、そして99デシベルの出力というのは、

「自己愛のほぼ全量をぶっ放しました」

ということなのだ。

それは自己愛のバクダンであって、B_Nが唄ったものとはまったく性質を異にしている。

愛のバクタンは自己愛のバクタンではない。

ここに書き話してあるおれの文章は、目の前の実物だからいちばんわかりやすく、例に採るけれど、これは0デシベルで好き放題に書いてあるのであって、これを誤解しているあなたが真似をすると、あなたは「好き放題」を自己愛99デシベルでぶっ放すことになる。

そんな酸鼻な騒音のるつぼに、魂なんか呼び込まれるわけがない。

おれは、見ればわかるとおり、あきらかに「おれ」として、好き放題に書き話している。

これを見てあなたは、「わたしも」と思い、「あなた」として好き放題に何かをやろうとする。

そのことじたいは、文脈としては誤りではないのだ。

あなたが誤解していることはもつと根本的なことだ。

ことは「本質」に根差している。

あなたは自己愛を「わたし」と思っているのだ。

自己愛は「あなた」ではないのだが、あなたはそれが自分だと思っている。

あなたは本当の自分がどこにあるのか・どこにいるのかを知らない。

もう何十年間も、自分の「真ん中」がどこにあるか、そのことを教わらずに、目撃もせずに来た。

だからあなたは、百パーセント、何の狂いもなく、確実なこととして、自己愛を「わたし」だと思っている。

自己愛、という表札が掛かっている家のドアを、毎日ガンガンノックしているのだ。

そうではなく、「あなた」のいる家、あなたという街の「真ん中」に帰れよということなのだ、じっくり聞いていくと、あなたは、

「そんな家知らないです」

と言うのだ。

マジな話。

あなたは怯えて言う。

「真ん中の家は、たぶん留守だと思います」

「というより、もともと空き家です」

「真ん中の家に、行ったことがそもそもそないです」

「何十年も、知らないままですから、いまだうなっているのかぜんぜん

わからないです」

おれは先日、ナルシズムについてのコラムを書いた、その中で、「九十年代に逆戻りかよ」という嘆きを記した。

それと同じように、ここにもやはり、九十年代に逆戻りかよ、という嘆きを記さねばならない。

こんなことは、もう三十年も前に、とつくに通過してきたことなのに……

というボヤきも、すでに先日のコラムに書いたことなので、もう省略しよう。

そんななたつぷり気分を出さなくても、つまり「真ん中が空っぽそうで怖い」んだろ。

真ん中が空っぽ、そのとおりだと思うよ。

何をいまさら、とおれは言いたい。

あなたがそんなことに怯えだすより前に、三十年もむかしに、そんなことはすでに追究され尽くしている。

これはおれが前時代的なことを言っているのではなく、現代の人々が、逆に時代遅れになっているのだ。

九十年代に片付いた問題を未解決のまま令和に入ってくるな。

といっても、若年層にはどうしようもないことというか、若年層が未解決のまま新世代になってしまったのは、どう見ても年長者側の責任だ。

テクノロジーの進化と共に、差し止めようのないムーブメントが起っていったのを、おれは三十年間も見てきた。

けっ、まるで話がジジイみたいだな。

まあ、この先に日本が戦争になったら、まともに日本人が生きていくためには、けっきよく明治から昭和初期の魂に帰らなくてはならないだろうので、その意味ではいくらでも時代の逆行というのは必要なのかもしれない。

ともあれ、三十年も前にすでに直接の肌身で解明されているところ、
^^自己愛は「あなた」ではないvvのだ。

あなたというのはあなたの真ん中だ。

そのあなたの「真ん中」だけが、どこかに連れて行かれる・連れて行くという機能を持っている。

おれはおれの真ん中で、あなたの真ん中を連れて行き、その結果としての、書き物を示している。

あなたの真ん中は、そうして連れて行かれたあと、どうするかというと、表札に「自己愛」と書かれたマンションに帰宅していくのだ。

真ん中に帰らないのだ。

だから何もかもが自己愛によって誤解されていく。

「うずうず」は自己愛に注入されて、やがて99デシベルの大騒動へ行きつく。

真ん中の家は空っぽのままだ。

この「真ん中」のこと、街の中心のことを、本来は「心(こころ)」と呼ぶ。

真ん中・中心にだけ何か特別な事象があるので、それをわざわざ「心(こころ)」と呼んだのだ。

あなたはそのことを知らず、あなたは自分の自己愛を自分のところだと思っている。

自己愛に湧いてくる、デシベルのデカいさまざまな「気持ち」を、自分のところだと思っている。

なぜそんなことになったかという、あなたのところが弱かったからだ。

人は誰しも、初めからこころが強くない。

本来は、徐々に、その真ん中を鍛えていかななくてはならなかった。
いま現代人は、自己愛をガチガチに強化して、自己愛としてはソルジ

ヤーあるいはバーサーカーになっているが、真ん中の「こころ」はまるで強くなっていない。

本来は、幼いころから、また思春期のうちに、さらに青年期に引き続き、真ん中のこころを鍛えてこなくてはならなかった。

それはかつて、涙、涙、涙ながらの日々だったのだ。

ところがある時期から、人はそうして己を真ん中から鍛えるということをやめ、あろうことか、検索とSNSと人工知能に、

「わたしが正しいですよね？」

と問い合わせたり主張したりする、というようになってしまった。

おれがいま言っているのは、誰が正しいとかいうような虚弱なことではない。

真ん中の「こころ」がゲロ弱だろ、と言っているのだ。

こころがゲロ弱。

そんなことを言われると、自己愛がカーツと加熱する。

自己愛が、メーターを振り切る大音量、極大デシベルをぶっ放してやろうかと画策しはじめる。

悲嘆でメーターを振り切つてやろうか、ため息でメーターを振り切つてやろうか。

憤怒で振り切つてやろうか、冷淡で振り切つてやろうか、憎悪で振り切つてやろうか。

「デシベルをMAXでいくぜ」

「いろいろ壊れちゃうよくん？」

現代人はそんなことを繰り返している。

それらのことがどう起こるのかは、すでに定番化・定型化しており、近いうちにもうAIが個々人のなりゆきを予言できるようになってしまいうだろう。

現代人は、真ん中・こころがゲロ弱のまま、自己愛でメンタルをカッ

チカチに強化した。

アホだ。

アホな上に、正直なところ醜いが、そこまで言うとかわいそうなので、アホだということに留めよう。

ただし、アホは本当にアホだ。

現代人は、自己愛によるメンタルマッチョ、あるいは自己愛によるメンタルゲトゲにすぎず、真ん中のこころはゲロ弱だと思え。

すべての機会を自己愛とメンタルに流し込んできただろう。

真ん中・こころで受け止めきくということせず、すべてのことを、街のあちこちにある、それぞれの分野の自己愛営業所に委託し、外注で処理してきただろう。

すべてのことを外注してきたならその真ん中は何もしてきていないアホのままに決まっている。

このことについて、あれこれ反論したくなる気持ちはわかるし、「自分だけは違いますよね」みたいなことを言いたくなってしまうというパターンもよくよく知っているが、それらのすべても前もってデッドエンドが待っているからやめておいたほうがいい。

どうせ、

「そこまで言うなら、どうぞ実作と実演と実物をお示しになられよ」と言われておしまいだ。

実作や実演や実物の提示はやっぱり引き受けられなくて、「真ん中・こころが弱いっすね」ということがわざわざあげつらわれてしまうだけになる。

そんな悪趣味なことに意味はないのだ。

真ん中・こころがゲロ弱のまま、自己愛でメンタルを強化し、何か一定のキャラクター性を作り上げた。

そのように知って、あらためて現代のYoutubeやSNSを見たら、わ

れわれが現代で目撃しているものがどういふものなのかを視認できるはずだ。

あまりにも明視されてしまうので、むしろおれが、この指摘を控えたくなってくるぐらいだ。

中には、自己愛が表面上良質なもので、能力も高く、いわば「ハイクラス自己愛」のような人もいる。

振る舞いはソツがなく、すごい知識や技術を持っていたりする。

でもそれは自己愛だ、こころじゃねえ。

現代人はもはや、ほぼすべての人が、そうした「ハイクラス自己愛」に自分を至らしめれば、自己実現されて自分は幸せOKになると考えている。

それはもう、こころの弱さが逆に極まったということださえるだろう。

あなたがここで知り、ここで学ぶのは、自己愛は「あなた」ではないということだ。

「あなた」というのは、あなたの「真ん中」だ。

それを本来ここらと言う。

そしてあなたは、そのこころがゲロ弱だ。

あなたは、現代の文化環境にも影響されて、もはやゲロ弱のこころ、町の真ん中にあるその「わたし」という表札の家に、見向きさえしなくなった。

長年放置しつづけて、いまごろどうなっているものやら、もはや目を向けるにさえ堪えなくなったのだ。

あなたは、そして人々は、真ん中のゲロ弱を「なかったこと」「ないもの」にして、周辺にある自己愛営業所を強化し、営業所から「メンタル」と「一定のキャラクター性」を形成してもらい、それを「自分」ということにしよう、ということポリシーにした。

ポリシーというのは「政策」のことだ。

「これがボクなんだ」

「これがアタシなんだよね」

そういう政策を採ったということ。

ただ、それは自己愛営業所の産物なので、必ずリソースが割かれ、必ずデシベルが発生する。

真ん中ではないから、どこかへ連れて行く・連れて行かれるということがないし、デシベルが発生するから、どうごまかしてもわざとらしく、鼻につく。

いま人々は、その「鼻につく」という部分を、キャラクター性の演出や映像・音声の加工等を通して「いかにキャンセルするか」ということに腐心している。

アニメキャラの服を着て、無垢っぽいキャラクター性を演出し、おっぱいを露出して揺らし、さらに全体をネタっぽく寛容なテイストにしていたら、「鼻につく」の成分がごまかされるといふことだ。

「鼻につく」の成分をごまかすために、とにかく力づくでも何かしらの既成イメージへあてはめていくという作戦。

その作戦はたしかにそれなりの功を奏している。

とはいえ、じつさいに実物を目の前にすると、「真ん中の空っぽ感」がスゴい。

真ん中は空っぽなのに、全身から高めのデシベルが音圧となって漏れてきている。

おれが真ん中をどこかに連れて行けば、そのあいだは、おれの作用がえげつないのでなんとかなるが、おれの作用が抜けたらもう阿鼻叫喚だ。全員がそれを、己の自己愛でなんとかしようとしている。

そうではなく、その自己愛じたいがデシベルを発生させているのだが、そうは言われても、「真ん中」「こころ」「連れて行かれる」なんて知りよ

うがないのだからどうしようもない。

「こころの底からなんとかしようと思っています」

と、宣言するにしても、さしあたり自己愛ゾーンから宣言するしかない。

おれは意地悪を言っているのではない。

本当にしようがないのだ。

この書き話しには、キョーレツに「おれ」が出ていて、「おれ」の声が好き放題に響いているが、0デシベルだ。

あなたがキョーレツに「わたし」を出そうとしたら、それはもう、ものすごい高デシベルの出力になるだろう。

だから、マジなのだ。

あなたが「わたし」と思っているやつ、本気を出せばけっこうキョーレツにやれますとこっさり思っている自負のそれは、「あなた」ではなく「自己愛」なのだ。

このことを知らないとおれがいくらあなたの真ん中をどこかへ連れて行っても、あなたはそれを誤って持ち帰ってしまう。

あなたはあなたの真ん中の弱さのせいで、与えられたすべてを^^自己愛営業所に献上してしまうVVのだ。

すでに多くの人は、古から与えられたすべてのものを自己愛営業所に献上し尽くし、代わりに自分にメンタルやキャラクター性をハイクラスなものとして形成してもらおうと思っている。

ハイクラスなメンタル、ハイクラスなキャラクター性、ハイクラスな立ち位置、ハイクラスな技術、ハイクラスな美貌、ハイクラスな実績。ハイクラスなキャンセリングにより「鼻につく」という部分もない。

それが「ハイクラスなわたし」なので、そのことの努力を重ねようとしている。

違う、それは「ハイクラスなわたし」ではない。

それはただのハイクラスな自己愛だ。
あなたは「ゲロ弱なわたし」だ。

自己愛は「本当のわたし」という 空想だ

あなたは自己愛のことを知らない。

あなたは、自己愛「っぽいもの」のイメージしか知らない。

あなたは、自分に自己愛があるかどうか、ということを確認めたがつている。

現状、

「うーん、たぶん、自己愛は、あるのだと思います」

というぐらいにしかあなたには捉えられていない。

あなたは自己愛のことをぜんぜん知らないのだ。

自己愛という事象の中核を知らない。

自己愛は、平常時には現れず、あくまで「本質」において現れる。

あなたの「本質」において、それは現れるのだ。

じつは自己愛は空想・イメージにおいて現れる。

それもやはり、「本質」において現れる。

平常時には現れないし、外周的には現れない。

「本質」、つまり、「本当のわたし」「本当のおれ」みたいなこととして現れる。

自己愛。

様子が、変わる。

それとなく、人を寄せ付けない気配が出る。

それはあなたが本質に立ち返っているときだ。

自覚のない、「本当のわたし」「本当のおれ」に帰っているとき。

人は、いつ「本当のわたし」をイメージするだろうか。

必ずそれは、その「本当のわたし」とやらが実現されていないときだ。

空を飛んでいる最中に、空を飛んでいるわたしをイメージする人はいない。

大魚を釣りあげている最中に、大魚を釣りあげているわたしをイメージする人はいない。

実現されていないときに人はそれをイメージする。

「本当のわたし」をイメージする。

その空想・イメージに、自己愛の本質がある。

ある日、風が強くて、誰かのビニール傘が飛んでいった。

そんなことに自己愛は起こらない。

なぜならそこには、何ら「わたし」はないし、「本当のわたし」もないからだ。

高級な外車が通りすぎる。

フェラーリだった。

このとき、自己愛は、それなりに起こりだすのだが、このことは看取がむつかしいので、あとに回そう。

様子が変わるのだ。

服屋に立ち寄ると、十二万円の、高級なジャケットが売られていた。

この時点でも、自己愛はそこまでではない。

店内にいる客のうち、外国籍と思しき人が、それを試着していた。

なかなか似合っていたが、値段が値段なので、その人は購入まではしなかった。

このとき、まだそこまではつきりは、自己愛は立ち上がらない。まだ、「本当のわたし」は立ち上がらない。

その十二万円のジャケットを手に取り、自分も試着してみる。振り返って鏡を見る。

「あっ……」

様子が、変わる。

それとなく、人を寄せ付けない気配が発される。角度を変えて、鏡の前で自分の姿をチェックする。

「ふーん」

声が、顔つきが、いつもと少し違う。

本当はぜんぜん違うのだが、訓練しないとその差分をはっきりとは捉えられない。

高級な服を着ると、自分も見栄えがする。

おしゃれをして、文化的な中に立っている気がする。

自分が本当にいるべき場所。

自分が本当にはいるはずの場所。

見栄えがして、文化的な、本当のわたし。

人は実現されていないものをイメージする。

ここにすでに、自己愛の真相は展示された。

まだ説明されないとわからないと思うが、これが自己愛なのだ。

あなたは、店内にいる誰かがそれを試着したときに、様子を変えたわけではなかった。

あなたは、^^自分でない誰かがそれを試着したときには、空想・イメージを湧かせるということはしなかった！vv

あくまで、「自分」がそれを試着したときにのみ、あなたは様子を変え、何事かを空想・イメージしている。

「本当のわたし」をイメージしている。

イメージされる「本当のわたし」に帰っている。

だから様子が変わる。

見栄えがするわたし、文化的な中に立っているわたし。

豊かなわたし、オープンなわたし、活発なわたし。

わたしが本当にいるべき場所、わたしが本当にはいるはずの場所。

これが自己愛だ。

人は、「自分」に限定しては、その「本当のわたし」というようなものを空想する。

自分でない誰かについては、「本当のその人」などを空想はしない。

もちろん恣意的にするならば、自分でない誰かについても、「本当のその人」というようなことを空想はできる。

けれどもそのことには情動が伴わない。

本当のわたしに帰るといふときにある、キューンと来る、無敵で、ピュアで、ナチュラルで、何の罪もなく清らかな、あの無上の情動が伴わない。

「自分」に関してだけ、その空想は、そうした無上の情動体感を伴う。

自分のスカートが「ひらり」「ふわり」することにだけ情動があるのだ。

この現象を「自己愛」と言う。

自分に限ってのみ、その空想が起こり、そこに情動が伴うということ、を、「自己」に限定して発生している愛」という意味で自己愛という。

高級な外車が通りかかったときにもそのことは起こっている。

もちろん高級な外車を運転している所有者は、別の誰かであって、自分ではない。

けれども自己愛の本質は「空想」「イメージ」なのだ。

人はそのとき空想する。

人は実現していないものを空想・イメージする。

自分はいま、使い古したスニーカーで歩いているが、「本当のおれ」が

本来得ている移動手段は、そのフェラーリなのだ。

古いスニーカーで歩いている自分は、何かの誤り。

本当のおれは、ああやってフェラーリで移動している。

人は、「自分」に限っては、そういう空想・イメージを自動的にする。フェラーリの横に、何でもない中年男性が歩いていたとして、その中年男性について、「あの中年男性の本来の移動手段はフェラーリ」とは空想しないし、それを無理やりイメージしたとしても甘美な情動は湧かない。

あくまで、「自分」についてののみ、

「本来は、ああやって、ちゃんとオーダーメイドのシャツを着て、フェラーリで移動して、それでいて厭味がなくて、ちゃんと能力があり、人に好かれているし尊敬もされている、それが本当のオレなんだよね」

という空想・イメージを湧かせ、そのことに無上の甘美な情動を味わっている。

妙齢の女性が、知人の結婚式・披露宴に参席したとする。

帰宅してきた彼女に「結婚式、どうだった」と訊くと、

「すごい素敵だった！」

と言う。

それはごくふつうの感想だろう。

けれども、よく見ると、何か様子が変わっている。

どこことなく、人を寄せつけない気配が発されている。

「本当のわたし」に帰っているのだ。

ここで、

「そういえば、郵便局で書留出てきた？」

と訊いたとして、彼女はそのことでは様子を変えはしない。

なぜなら、郵便局で書留を出すというようなことは、彼女にとって「本当のわたし」うんぬんというような、「本質」におよぶことではないから

だ。

彼女は参席した結婚式・披露宴について、「すごい素敵だった！」と言、本当には何が言いたいのかという、

「本来の、本当のわたしは、ああやって人に祝福される中にいて、荘厳な営みの中にいて、静かで肅々として、誰から見てもわかるぐらい愛の実物で、貞淑で清楚だけれど、誰より明るくほほえんでいるのよね」と言いたいのだ。

そういう、「本当のわたし」を空想・イメージしている。

他の誰かがそういう存在だという空想・イメージはしない。

他の誰かについてはそういう空想・イメージはしないので、これを自己に限定した愛・自己愛と呼ぶ。

それが本当のわたし、という、強烈な甘美さ、強烈な快感物質。

本質においては、「ほかの誰かのことなどどうでもいい」のだ。

ほかの誰かのことを、空想・イメージしたりはしないし、ほかの誰かのことで、無上の情動など湧かない。

そうはいっても、腹が減ったので夜中にインスタント焼きそばを食べる。

あす月曜日には、出社して、先週の件で課長からダルい説教をされなくてはならない。

考えるだけで憂鬱だ。

ぐったりしてくる。

そうしたことすべては、彼女にとって、

「何かの誤り」

「間違っている」

「違う」

「そんなわけではない」

「ありえない」

そう、本質的に思われている。

本当のわたしは、讚美歌の中で純白のヴェールをかぶって微笑んでいたはず。

それで、おれが何を言っているかという、彼女が、
「それが本当のわたしなんです」

と言うのに対し、
「あなたは自己愛を『あなた』だと思っているのですね」
と言っているのだ。

「仕立てのシャツで、フェラーリで移動しているのが、本当のオレ、本来のオレ。現在のオレは、何かの誤り」

彼がそう言うのに対し、おれは、

「お前は自分の自己愛を自分だと思っているんだな」
と言っている。

十二万円のジャケットを試着して、見栄えがし、豊かで、文化的な中に立っている自分を、

「これが本当のわたしなんです」

と言う。

おれはそれについてやはり、

「自己愛を『わたし』だと思っているんだな」
と言うのだ。

風でビニール傘が飛んでいたり、郵便局で書留を出したり、夜中にインスタント焼きそばを食べたり、月曜の朝から課長に説教を垂れられたり、日々が鈍色でダルい、そういうことのすべては、「本質的に『わたし』ではない」と思っており、それらのことは「仮のわたし」と思っているのだ。

あなたは自己愛のことを知らない。

こうして説明されるまであなたは自己愛の確たる存在なんか知らな

ったはずだ。

自己愛とは、「自分のことに関わってのみ、空想・イメージをして無上の情動を味わう」という形質のことを指している。

そして無上の情動と遠いところにある現実的なわたしなどは、「仮のわたし」でしかなく、まったく本当のわたしではないのだ。

その考え方が、「いちばんしつくりくる」と、自己愛者は大真面目に思っている。

あなたにとっていちばん信じがたいことを話そう。

あなたにとって、いちばん理解不能なおれのことがある。

仮に、脳波を精密に計測してもらったとして、おれは、十二万円のジャケットを着て、フェラーリに乗り、誰かの荘厳な結婚式に参席したとしても、脳波がびくりとも動かない。

おれには何の空想もイメージも湧かないのだ。

何らの甘美な情動も起こらない。

郵便局で書留を出しているときと同じだし、夜中にインスタント焼きそばを食べているときと同じだ。

月曜から課長に説教を垂れられたら、別のダルい脳波は出ると思うけれど、それが「何かの誤り」とか「本質的にわたしじゃない」とか、そういう脳波は出ない。

風でビニール傘が飛んでいくというのは、むしろおれは好きだ。

フェラーリで移動しているときより、むしろハッピーな脳波が出てしまいかもしれない。

おれは、風でどこまでも飛んでいくビニール傘に、想像力をはたらかせ、その旅路に詩文を見出ししてしまうかもしれないけれど、十二万円のジャケットを着て見栄えがして豊かで文化的なおれというようなことに空想は起こらない。

あなたが詩文を書くとしたら、あなたは「本当のわたし」に基づいて

詩文を書くだろう。

だからあなたの詩文は、「人に祝福され、莊嚴で、静かで肅々として、愛の実物があり、貞淑で清楚で、誰よりまぶしくほほえんでいる」というイメージのものになる。

おれの詩文は、太平洋からの風にビニール傘が果てしなく飛び立ち誰にも知られぬ旅路を往く、という想像力のものになる。

あなたは「本当のわたし」というものを誤解している。

あなたは自己愛を「本当のわたし」と思っているのだ。

おれの場合は、風でビニール傘が果てしなく飛んでいくということ、その風も湿度も曇天も「たまんないね」というのが、むかしから変わらず「本当のおれ」だ。

平常時には、このことはあまり露出してこないが、「ちよつとしたとき」、ちよつとでもあなたの「本質」におよんだとき、このことは現れてくる。

様子が、変わる。

人を寄せつけない気配が発される。

何かが力強く気取られる。

始まってしまえばもう当人でコントロールはできない。

何が起きているのか。

本質におよぶことのすべてを、あなたは、あなたの真ん中で捉えられず、すべてをさまざまな自己愛営業所に流しこみ、自己愛に献上してしまっている。

十二万円のジャケットも、フェラーリも、知人の祝福すべき結婚式も、すべてあなたは自分の自己愛に献上した。

積み重なる献上物の末、自己愛営業所の権勢はすでにキョーレッツというほどになっており、そのデシベルは強大で、あなたの全体を支配している。

結果、あなたは自己愛の権化になってしまい、逆説的ながら、その叶

わぬ自己愛のデシベルこそが「本当のあなた」になってしまっている。

いや、本当のあなたというより、それは「リアルなあなた」か。

おれが言っていることは、自己を滅却しろというようなことではない。仮におれがフェラーリを所有していたとして、それをあなたのママチャリと交換してやる、というようなことではない。

そうではなく、おれは、おれの自転車と、あなたの所有するフェラーリを交換すると言われても、断るということだ。

おれのフェラーリは、そのときおれの愛車だろうし、おれの自転車だって、そのときおれの愛車だろう。

どんな宝物であれ、そうではないものであれ、おれは愛によってそれを大切にするので。

あなたは逆だ。

あなたは宝物によって自己愛を大切にするだろう。

^^宝物をすべて自己愛の足しにしているという致命的な行為VVに気づかなくてはならない。

フェラーリも、十二万円のジャケットも、高級な建物も、自己愛の足しにされるのであれば、すべてゴミじゃんということになってしまう。

あなたは、自己愛という現象をこれまで知らずに来たので、自己愛に好き放題にむしばまれてしまっている。

自己愛営業所にすべてを外注し、委託し、弱いままで立ち回ってこられたけれど、そのぶん自己愛に支配・蹂躪されているのだ。

あなたの自己決定はどうあれ、あなたがここで自己愛という現象について学ぶことは、あなたの損にはなるまい。

自己愛とは、人が自分のことに限っては「空想」「イメージ」をし、無上の情動を得るということだ。

自分でない誰かに対してはそのことが起こらない。

平常時はこのことは隠れているけれども、わずかでも「本質」におよ

ぶとき、あなたはその空想・イメージ・情動をやる。

大切なものを自己愛営業所に献上してその情動を得る、ということをする。

そのときあなたには、「様子が、変わる」ということが起こる。

真ん中が空っぽということで怯えていたあなたが、強くて無敵のあなたに切り替わるのだ。

空想のわたしに「しゅくり」くる

「本質」におよぶとき。

ここでの「本質」とは「こだわり」のことだ。

二字熟語で言えば「執着」となる。

多くの女性は、男性ほどには、格闘技の試合を観ていて盛り上がらない。

それは、多くの女性は、「わたしの」パンチ力や鋭いローキックに「こだわり」がないからだ。

同じように、たとえばファッション雑誌を観ていても、男性は女性ほどには盛り上がらない。

それは、多くの男性は、そこまで「わたしの」トップスやバッグに「こだわり」がないからだ。

多くの男性は、格闘技の試合を観ていて、先ほどから述べている「空想」「イメージ」をしているのだ。

試合に勝利する選手の、鍛え抜かれたパンチ力を観て、それを「自分のもの」として空想し、そこに鍛え抜かれて強い「本当のオレ」をイメージしている。

そこに無上の情動を起こしている。だから盛り上がる。

一方で女性は、ファッション雑誌や、ファッション番組、あるいは恋愛ドラマショーを観ていて、洗練された女性としての姿、美的・性的な

魅力で他を圧するもの、そこに起こってくるロマンスを観て、それを「自分のもの」として空想し、輝いて豊かな「本当のわたし」をイメージしている。

そこに無上の情動を起こしている。だから盛り上がる。

仮に、AくんとBくんが格闘技の試合を観ていて、Bくんが内心で「本当のおれの、鍛えられたパンチ力」みたいなことを空想をしているのが透視されたとしたら、AくんはBくんについて、

「わかるけど、こいつバカなんじゃないの」

と思うのではないだろうか。

また、C子さんとD子さんが、ファッションと恋愛ドラマのテレビ番組を観ていて、D子さんが内心で「本当のわたしの、蠱惑的な姿と、うらはらな女心」みたいな空想をしているのを透視したら、C子さんはD子さんについて、

「わかるけど、この子ちょっとキツイな」

と思うのではないだろうか。

自己愛というのは、あくまでそれぞれの「わたし」についてのみ無制限の許可を持っているのであって、わたしでない他の誰かについては、正直に「アホか」「たいがいにしとけよ」と思うものだ。

とはいえそのことは、われわれにとってありふれたことなので、われわれはいまさら目くじらを立てない。ただ、ていどを過ぎれば、それは性質として悪質なもので、「目に余る」「付き合いきれない」ということになってくるわけだ。

ここでの「本質」とは「こだわり」であり、「こだわり」において様子が変わること、およびそのことが^^自分においてだけは美化される^^ということ、そのことが自己愛と呼ばれる。

Aくんがあるとき「愚痴ばかり」だったとして、そのことをC子さんは「しんどい」と感じるが、C子さん自身が愚痴ばかりのとき、その

ことはC子さん自身においては——様子が、変わり——美化されるのだ。様子が、変わる。

「いや、そうじゃなくて。わたしの場合は、マジでわたしがかわいそうすぎるじゃん笑。そりゃ愚痴ばかりにもなるよ、だって現実そうなんだもん」

人は、「こだわり」において、「本当のわたし」と「仮のわたし」を持って生きている。

そしてもちろん、人は、実現していない自分のことのほうを「本当のわたし」としている。

「本当のわたし」と「仮のわたし」。

Aくんは、

「本当のおれは、〇〇大学に入っていたはずなんだけど、家庭の事情とか、試験日の体調とかがあって、結果的に△△大学卒になったんだよね。

まあ、学費のこともあったし、親に気をつかうところもあったって、けっきよく△△大学にしたかなってところも、自分であるんだけど」

学歴にこだわりがあり、△△大学卒の自分は「仮のわたし」になっている。

Bくんは、

「学生の頃、バンド組んでいて、けっこう人気もあったし才能もあったから、みんなでプロになろうって言っていたんだけどね。ベースの子が家業継がなきゃいけないことがあって、それで、メンバー入れ替えてまでやっていく気にもなれなかったから、じゃあおれもサラリーマンでいいやって、なっていったんだよね」

アーティスティックなことにこだわりがあり、サラリーマンの自分は「仮のわたし」になっている。

Cさんは、

「あのとき付き合っていた〇〇くと、結婚するのがふつうの流れだった

ただけどね。なんかきゆうにさ、彼のことそんなに縛ったら悪いかかなと思って笑。それで何もせずにいたら、向こうのほうから別れるって言うてきたんだよね。だから本来で言えば、いまごろわたしはちょうど子育てとかしている時期だったかな？ って思う」

婚姻や出産、女性性についてこだわりがあり、独り身の自分は「仮のわたし」になっている。

Dさんは、

「あのままやっていたら、水泳でオリンピック出られたかもなんだけど、部活のノリとはどうしても合わなくて。そうこうしていたら先輩とかとすごいケンカとかにもなっちゃって笑。生意気って思われたんだろうね。そういうのって面倒くさいじゃん？ それならもう、ふつうにアニオタとかしているほうが楽しいやーってなったんだよね」

栄光の到達点・実績にこだわりがあり、アニオタの自分は「仮のわたし」になっている。

人は多く、こだわりにおいて実現していない自分を空想しており、その空想に生じた自分のほうを、自分にとって「違和感がない」「本質的にしっくりくる」と感じている。それに比べると、ふだん生きている「仮の自分」のほうで、心理的根底において「違和感がある」「何か本質的に違うと思う」と感じているのだ。

「様子が変わる」というのは、当人には自覚のないところ、「仮の自分」から「本当の自分」へ回帰しようとしているときの変化のことを指している。まるで実体の伴わないメタモルフォーゼというふうにそれは起こる。

もちろん、彼らが言う「本当の自分」「本質的にしっくりくる自分」というのは、彼らの個々の空想内に生じているものでしかないで、外部のものがそれを見出したり、それに触れたりすることはできない。

よってA B C Dは、相互に交遊したとしても、全員が「仮の自分」でし

か交遊できず、そこに「本当の自分」は誰もいないことになるのだ。

AはBCDなどと付き合っていないし、BはACDなどと付き合っていないということになる。

ここで、Aが空想に創り出している「本当の自分」を、記号 α で表すとすると、AにとってBCDが本当の自分をわかつてくれるということは、交友関係「 αBCD 」という形で表されることになる。

けれどももちろん、 α なるAくんは空想の産物であって現実には存在していない。

Bは交遊関係「 $A\infty CD$ 」を期待しており、Cは「 $AB\prec D$ 」を期待、Dは「 $ABCD\infty$ 」を期待しているということになる。

「様子が、変わる」と、わざとらしくどくどくしきで描写しているのは、たとえばAくんについて、

「 $ABCD$ 」 \downarrow 「 αBCD 」

が起こるということなのだ。

Aくんは α くんになったということになる。

繰り返すが、 α くんは空想の産物でしかないの、 α くんというのはAくんによる「自己愛の提出物」にすぎない

これは、Aくん本人にとっては、「本質的にしっくりくる、本当のオレ」に立ち返ったということになるのだが、客観的な視点からは、まるで $\alpha\alpha$ Aくんが自己愛に乗っ取られた \forall ということになるのだ。

じつさい、その「様子が、変わる」は、そういう乗っ取りの現象というふうに外部からは見える。

自己愛が形成した「 α くん」がどこからともなく現れ、もとのAくんを乗っ取ってしまうのだ。

多くの場合、そのことはごく小規模に、あくまで一時的なこととして起こる。

様子が変わったことについて、本人もふと我に返り、

「やべえやべえ笑。いま、何かに取り憑かれていたわ」

と冗談口に済ませるに留まる。

けれども、自己愛が肥大してゆき、Aと α の乖離が巨大になりすぎると、やがて α はAに「何もさせない」というほどに権力を持つようになってくる。

そして場合によっては、 α によるAの「急激な」というほどの乗っ取りも起こるようになるのだ。

喫茶店を出て歩道に立ったとき、

(え、さっきの人とぜんぜん違うじゃん。何、その顔つき)

もう別の人格に乗っ取られてしまっている。

あるいは、乗っ取りとまではいなくても、内部に強烈な獣としてそれが潜み続け、特定の「こだわり」についてのみとつぜん牙をむいてくるということもあるし、とつぜんというよりは「定期的」にその憑き物のシーズンが現れるという場合もある。

AくんはAくんではないはずなのに、すべてを自己愛営業所へ献上するものだから、自分の真ん中でない α ばかりが肥大していくのだ。

一方で、自分の真ん中には何らの体験も持ち帰られていないので、

「自分の真ん中が空っぽなんです」

「真ん中の家は、たぶん留守だと思います」

「というより、もともと空き家です」

「真ん中の家に、行ったことがそもそもありません」

ということになる。

このことに対抗するには、自己愛の専横を許さない、という決断をするしかない。

Aくんにとって、自分が $\triangle\triangle$ 大学卒になったことは不本意なことだった。

その「不本意」ということが、「いやだ、いやだ」といってAくん本人

を許さない。

そうではないのだ。

Aくんはただ、第一志望に受からなかったただけだ。

受験と進学が最善には成功しなかったというだけだ。

望むような学歴の構築に失敗したというだけだ。

ただそれだけだ。

人は生きているうち失敗することもある。

成功に手が届かないことはある。

ただそれだけだ。

Aくんが、力及ばず入学した△△大学があり、そしてそこでの学生生活も華やかではなかったのかもしれないが、それがAくんの学生生活だった。

Aくんが、その母校と学生生活を、みじめだけれど自分のものとして愛せたとき、もう空想にも○○大学卒である必要はなくなる。

そうなれば、もう²が出てきて専横を振るうことはメカニズムごとくなる。

何が自己愛だ、ふざけていると思わないか。

ちゃんと生きているし、ちゃんと生きてきたんだし、これから生きるだろ。

失敗しながらでも生きるだろ、空想を味わうなんて必要がどこにある。本質におよんでこのことが起こるのだが、本質といえただそれだけじゃないか。うまくいかなかったこともあるし、無念だったこともある。でも生きてきたし、生きていくだろう。

本当には空想などが本質であるわけがない。

毎夜、世界を修正している

Aくんの、真の失敗は何かというと、受験失敗を認められず、それが認められないせいで、△△大学での学生生活をさらに貧しくしてしまったことだ。

Aくんは、受験失敗を認められなかったために、毎夜毎夜、「世界の修正」をしなくてはならなくなった。

「世界の修正」について説明する。

人は、自己愛を「わたし」だと思っているうち、毎夜毎夜、「世界の修正」ばかりをしているのだ。

そのことは自動的に起こっており、リソースは食うが、当人には自覚がない。

当人はただ、「やたら自分の性能が下がっていく」ということしか体感できない。

PCだって、裏側で不明のアプリケーションがリソースを食っていたら、本来のやりたい作業がまったく進まなくなるだろう。

自己愛による「世界の修正」が作動しつづけているのだ。

Aくんは△△大学に通い、授業に出て、家に帰ってくるたび、

「ま、違うんだけど」

と思わなくてはならない。

何しろ彼は、「本当のオレ」としては、○○大学に行っているはずだか

ら。

△△大学には、「仮に」行っているだけだ。

仮の学生生活。

仮のサークル活動。

仮の級友。

仮の恋愛。

仮のアルバイト。

本当のオレは○○大学のほうで充実しているんだけど。

彼は△△大学に行き、授業に出て、サークル活動をして、友人や恋人と食事などに行くたび、

「本当は違うけどね」

という修正作業をしていなくてはならない。

もちろん本当に修正しなくてはならないのは、「本当は○○大学なんだけどね」のほうだ。

彼は々くんではなくてAくんなのだから。

けれども失敗が認められない。

自分が○○大学に通う々でなく、△△大学に通うAだということが認められない。

もちろん、現実的なことは理解できているが、その現実的なことが「本当のオレ」とは認められないのだ。

Aくんが自分を修正できない以上、Aくんは「世界」のほうを修正しなくてはならない。

△△大学に通っているという、目の前の世界のことのほうを、毎夜毎夜、空想で修正しなくてはならない。

Bくんは、サラリーマンをしながら、

「ま、本当は違うっていうか、おれはサラリーマンってわけではないんだけど」

と、毎夜毎夜、世界を修正しなくてはならない。

C子さんは、

「こうして独り身でいるわたしが、本当のわたしってわけではないんだ
けどね」

と、毎夜毎夜、世界を修正しなくてはならない。

D子さんは、

「まあ、アニオタといっても、わたしの場合は仮にそうしているだけな
んだけどね」

と、毎夜毎夜、世界を修正しなくてはならない。

このことは、自分の内部をつぶさにウォッチしてみると、本当に自動
的に、際限なく起こっているのが発見されるものだ。

なんだこれ！ とおどろくほどに、本当にそのシステムはえんえん稼
働しつづけている。

たとえばAくんが、合コンに参加したとする。

そこでAくんは、モテようといういろいろ積極的を試みたが、いわゆる
ダダすべりをしたとしよう。ドン引きされ、「あいたたた」という空気に
なった。

一方でEさんは、合コンのような交遊に慣れていて、話が上手でもあ
り、勢いとジョークとを織り交ぜて場を盛り上げ、ずいぶん色よい時間
を作り上げることに成功していた。しかもそのことには何の厭味もなく、
そのことはAくんから見てもすなおに「かっこいい」と思えるほどだっ
た。

この日の深夜、Aくんは帰宅して、そのまま「おやすみ〜」となるだろ
うか。

なかなかそのままぐっすりというわけにはいかない。

Aくんは寢床で考える。

少なくとも、頭をよぎる。

大胆なふりをして、勢いのあるふりをして、女の子と絡んでみたけど、
手痛い結果になった。

「あーあ、違うんだよなあ」

Eさんの洗練された瀟洒な振る舞いが記憶に残っている。

「もつと、ああいうふうに、なんだよな」

今日のおれは、違った。

あれはさすがに違う。

なんであんな、違うことをやってしまったのか、われながら不思議だ。

きょうのあれは、さすがに違いすぎるので笑。いやあ、次はもつと、う
まいことやらないといけない。

あれはさすがに違ったよな。

じゃあ、おやすみなさい。

彼がぐっすり寝るためには、「世界の修正」をしなくてはならない。

彼が空想の中で作りだしたのは、別の合コンの光景、修正版の光景だ。

空想の中で彼は、「Eさんばりに」、瀟洒で気の利いた振る舞いをし、
場を盛り上げ、女の子にモテている。

それでいて厭味がなく、大人の男性としてかっこいい実力と姿を示し
ている。

空想の中で、彼はすっかり「それ」になっている。

おそらく、本当にEさんばりの「それ」になるのは、そんなに簡単なこ
とではないのだろうが、とりあえず彼は空想の中では、すっかり「それ」
に到達している。

Aくんはそうして、毎夜毎夜、「Aくんの世界」を「Eくんの世界」に
修正しているのだ。

そこにあるのは、Aくんにとって「本当のオレ」であって、それが「本
質的にしっくりくる」と感じられるから、Aくんは穏やかに入眠できる
のだ。

それはそれで、別にかまわないだろう。

穏やかにじゅうぶんな睡眠が取れるということは何よりも大事なことで。

ただしそのことのために、Aくんは日々、自己愛営業所に自分の世界を献上しているのではある。

合コンでダダすべりしたというのも、本来は、若い日の自分の貴重な体験だったかもしれないのに。

彼はそれを「違う」と切り捨てた。

Aくんは、Aくんのやったことを、「違う」と切り捨てたのだ。

△△大学に通っているのも「違う」し、合コンでダダすべりするのも「違う」。

「本当のオレとして本質的にしっくりこない」

この日、Bくんも合コンに同席して、BくんもAくんと同程度に、ダダすべりしたものとする。

その場合Aくんは、何もBくんのために、そのような世界修正の空想はしない。

空想の中でBくんを「Eさんばり」にする必要は感じられないし、Bくんのダダすべりについては取り立てて「違う」などと切り捨てる必要がないのだ。

もちろん、ダダすべりしたのだから「違う」のは「違う」のだろうが、そんなことは、自分のことではないので取り扱う必要はないが。

人はそうして、あくまで自分のことに限り、「世界を修正する」という空想を行う。

それを自分のことに限ってするので、このことは自己愛と呼ばれるわけだ。

自己愛の騒々しさが「陳腐」となる

ここまで説明してきたように、自己愛は存在する。

一般的に思われている、おおざっぱな自己愛「つぼさ」というような捉え方では、自己愛を取り扱うのにはまるで知見が足りないだろう。

おしゃれな建物に入り、おしゃれなレストランに入り、おしゃれな椅子に座り、おしゃれな飲み物を飲む。

じつにおしゃれなムードだ。

そのとき、自分の服装について、

「おしゃれしてきてよかった」

と思う。

そんなことだけで、「様子が、変わる」。

意地悪で言うのではなくて、リアルに、われわれはそれぐらいアホなのだ。

このことについて、相当に正しい視力を持たないと、とてもじゃないが自己愛という現象には対処できない。

卑近に言うならば、「自分だけ自覚のないこだわり爆発野郎」というのがわれわれの事実だ。

意地悪で言っているのではなく、あなたを少しでも気楽にするために

申し上げている。

こだわりがマイナスに出ている場合も同じだ。

おしゃれな建物に入り、おしゃれなレストランに入り、おしゃれな椅子に座らされ、おしゃれな飲み物を注文してみた。

そのとき、自分がいかにもダサくて「浮いている」ので、逆方向に「様子が、変わる」。

とりあえず威圧的に、何か怒っている人、みたいな気配を醸し出していく。

あるいは、しゃべりがやたら甲高くなる。

そんなとき、当人でさえ、何をやっているのか意味不明で、率直に言つて醜悪でもあるのだが、どうしようもないのだ。

自己愛者なんてしよせんそんなものだ。

おしゃれな建物を前にして、そこに入るとき、もうすでに「様子が、変わる」が起こっている。

威圧的になる人もいるし、不思議ちゃんぶる人もいるし、やたらぺこぺこするオバサンになる人もいる。多種多様だ。

多種多様だけどワンパターンだ。

自己愛のデシベルがうるさい。

それをどうにかしろと言っているのではない。

あなたって現実的にそういうレベルの人でしょ、と言っているのだ。

真ん中の「こころ」はゲロ弱だから、現実的にはそうして自己愛デシベルクソデカになるでしょ、と言っているのだ。

あなたを否定して言っているのではない、あなたを否定しているのはあなたであっておれではない。

あなたが、あなたを否定しているから、あなたからＱくんみたいなのが出てくるのであって、あなたがあなたを否定していないなら、あなたからはあなたしか出てこない。

おれからはおれしか出てこないようにだ。

「あなた」は、その真ん中のこのころのゲロ弱なやつが「あなた」であって、その沸騰しているデシベル自己愛は「あなた」ではない。

空想で、「世界を修正」して、ハイクラス自己愛に至ってなんとかしようと思つて、その馬鹿げたパターンもいいかげんふくらんだフグと一緒に海に捨てなくてはならない。

あなたは、山深く秘された峽を、その源流にまでさかのぼって旅し、やがて青白く奔騰する滝に出会い、さらにはその滝の奥から龍神が出てきたとして、その龍に向けて、

「あの、ボク、ハイクラス自己愛を実現してイケている人になりたいんです」

と言うつもりだろうか。

そんなデタラメな度胸はあなたにはないだろう。

あなたの問題は何かのか。

あなたは、あなたの問題が何なのかさえわからないのだ。

あなたは何かしらに苦しんでいたり、何かしらに行き詰っていたりする。

ふだんは平気なのに、なぜか定期的に、けっこうヤバめの苦しみと行き詰まりに出てくわす。

「またこれだ」

けれども、そのたびに何に苦しみ、何に行き詰っているのか、あなたにはまったくわからないのだ。

あなたは、いろんなことをうまくやっており、「順調です」としばしば言いながら、振り返ると何にも歓喜していない。

随時にキューンとはしているが歓喜はしていない。

それがなぜなのか、自分でわからず、区別もつかず、自分は満足なのか不満なのか、安心なのか不安なのか、それさえもよくわからないのだ。

なぜそこまで何もかもが「わからない」ままなのか。

それは、何か内容としてわからないことがあるということではないのだ。

あなたは「あなた」のいる場所がわかっていないのだ。

あなたの問題とかあなたの苦しみとか、あなたの歓喜とかあなたの不安とか言うとき、あなたはそもそもの「あなた」の場所がわかっていない。

問題の中枢はそこなのだ。

本質的には、自己愛の問題というより、真ん中がない・真ん中が空っぽということが問題だ。

そのこの問題を、ずばりいちばんわかりやすい形で示そう。

あなたが、あなたのこのころの底から、何かを言ったとして、なぜそれが「あなたの声」にならないのだ。

「あなたのことば」にもならない。

あなたの表現にもならないし、あなたの存在にもならない。

ただ、何かしらの「デシベル」が、ギューッと高まったな、ということしか検出されない。

「あなたの」作品にならない。

まさかそのデシベルのギューッとなったものを「わたしの作品です」と言い張る気にもなれない。

それがあなたの苦しみだ。

このころの底から楽しいとき、「いえーい！」と大声で言ってみる。

ピースサインとかハートサインとかもしてみてもよろしい。

けれども、そこに現れる声や姿は、なんとも言えず「鼻につく」何かだろう。

何かがわざとらしく、何か無理やりだ。

「わたしの声」にはならないし、「わたしのことば」にもならないだろう。

鼻につく何かをキャンセルするために、精一杯「ネタっぽく」してみたり、「かわいく」してみたり、「キャラっぽく」してみたりもする。

そんなことに大リソースが食われている。

そんなことであなたの内部にわだかまりが残らないわけがない。

あなたが、

「もうブチギレた」

と言つて、こちらの底から思うさま、自分のこと、世界のこと、愛のこと、美のこと、すべてのことを文章に書き連ねたとして、そこに現れてくるのはどのようなものか。

翌朝、あなたが読み返すと、そこにあるのは、

「な、なんじゃあこりゃあ」

という、独自性のない、陳腐な書きなぐりだ。

いわゆる中二病の、精神的にイタいだけの、ひどい文章が出現する。

独特というのでさえない、「超ありがち」な文体と文脈がそこには現れている。

なぜ？

なぜ、自分のこのままに書いたのに、こんなにひどいものが出現するのか。

どれだけへたくそでもいいので、せめて「わたしの文章」が出現してくれないものか。

なぜ「わたし」をフルパワーにしているのに、「わたし」ではない痛々しいものしか現れないのか。

それは何度も言うように、自己愛を「わたし」と思っているからだ。

自己愛の発火が、「わたし」の燃焼だと思っているからだ。

あなたが、何事かに全力で勝負しようとしたとして、その勝負をするユニットが違うのだ。

もちろん、そうまで言われたら、あなたはおれがいま言っていること

を理解する。

「自分の『真ん中』で勝負するということですよ」

そのとおり。

そのとおりなのだが、そうは言っても、あなたは自分の真ん中の

アド레스がわからないのだ。

自分の真ん中がそんなにバツと簡単に取れたら誰も苦勞はしない。

ヒントを出して教えよう。

自分の真ん中へたどり着き、自分の真ん中から勝負したい。

そうか、そのようにしたらいいが、

「デシベルをたどって真ん中には行けねえぞ」

おれはそうように教える。

どういうことか。

これまで述べてきているように、各所の自己愛営業所はそれぞれにデシベルがうるさい。

一方、あなたの「真ん中」は静かなのだ。

あなたはどの音を頼ってその「真ん中」に行くつもりか。

何かしら音のほうに向かっていくなら、それはぜったいに真ん中ではなくて、たどり着くのは必ずどこかしらの営業所だ。

だからあなたに、その自己愛営業所のデシベルが、もっともらしく聞こえてはだめなのだ。

デシベルが、説得力を持って聞こえているようではだめなのだ。

どれだけ鳴っているか知らんが、「聞こえていない」、そういう状態にならないと、自分の真ん中にたどり着けない。

デシベルが聞こえ、音圧を受け、自分に力が発生する。

その時点でもう、真ん中には向かえなくなっている。

一部の人がこころがける、マインドフルネスという言い方になぞらえて言うなら、あなたの体内なんて「デシベルフルネス」だ。

それで、あなたがこちらの真ん中から何かを発したつもりでも、そこに聞こえるのは、どこかしの「営業所のサウンド」ということになるのだ。

「あなたの声」じゃない。

あなたの顔じゃない、あなたの姿じゃない。

文章を書くのが絵を描くのが、唄おうが踊ろうが、演じようがコンクールに出ようが、プレゼンしようがメールを書くのが、出てくるのは「あなたのもの」ではなく「自己愛営業所の何か」だ。

それがあなたのフラストレーションだ。

フラストレーションは、日本語で言うと「挫折」だ。

あなたがドラムスティックでハイハットを叩くたび、ハイハットから、「チッ（自己愛）、チッ（自己愛）、チッ（自己愛）、チッ（自己愛）」と聞こえるようでは、そりゃあ挫折するに決まっている。

現代では、いつそ逆切れのように、その挫折も「鼻につく」も、もはやわからなくなるぐらいに音圧を上げよう、とするのが主流だ。

何事でもそうだが、モンスター化するまでに至れば、もう一般論での評価を超えてしまうことがある。

それが現代の主流になり、時代的にはいまそれで通用するし、この先もそれで通用していくのかもしれないけれど、おれの気持ちとしてはそのようなやり方はおすすめでできない。

こだわりがボクなんだよね、こだわりがアタシだから、というようなことはおすすめでできない。

まあそのあたりはもう、個々人が選ぶことで、おれが差出口をする領域を超えてしまっているけれども。

ただ、どこまでも知っておけばよいのは、真ん中でないものは「あなた」ではないし、真ん中でないものは「その人」でもないということだ。どのように偽装され、またどのように強化され、どのように整形され

ていたとしても、自己愛は真ん中ではないので「その人」ではない。

そこで現代の主流は、

「もう、その人でなくていいじゃん！」

ということなのだ。

いま、時代的に最も説得力があるのはそのイデオロギーだろう。

「もう、その人でなくていい」ので、Vuber が友達でいいのだ。

「もう、その人でなくていい」ので、静止画も動画も、加工しまくって別物にしまっているのだ。

「もう、その人でなくていい」ので、コスプレをしてアニメキャラになりきっているのだ。

「もう、その人でなくていい」ので、自分の作文や友人への返答をAIに書かせてもいいのだ。

「もう、その人でなくていい」ので、かわいければいいし、映えていればいいし、盛れていればいいし、バズればいいのだ。

友人が誰だったかとか、恋人が誰だったかとか、そんなことはどうでもいい。もはや「誰」というのも存在していない。

もう、その人でなくていいのだから。

じっさい、若年層はすでに、そのことを地で行っていると思う。

それは、若者がけしからんということではなく、タイムラグの後に、上の世代にも同様のことが起こるということだ。

Aくんが誰かがデートするといつて、Aくんはそのデート相手と会わなくていい。

AくんはGoogleをつけて、待ち合わせに来た美少女映像とデートすればいいのだ。

声は加工され、男性は最上のイケボ、女性は甘々のアニメ声になればいいし、デートでお互い何を話すかといつて、効果的でセンスのあることを勝手にAIがセリフ化してくればいいのだ。

じつさい、すでにウェブ会議には、AIが当たり前のように導入されてきているし、ウェブ会議に映し出されるそれぞれの映像だって、生成されるアバターに切り替えたほうが捉えやすいしストレスがないということは大いにありうるだろう。

すでに現実的に考えて、映像・音声としては「ゆっくり霊夢」「ゆっくり魔理沙」と会議するほうがストレスがないし有意義な会議になるんじゃないか。

十人のアニメキャラが、ちゃんとそれぞれ駆動して、それぞれの声がキャラっぽく合成されて、それぞれの口調やアイディアをAIが生成し、ウェブ会議をするというような光景を、おれは正直なところ時代のワンシーンとして目撃してみたいものだ思っている。

「すげえ」としみじみ言えそうだ。

それはともかくとして、「もう、その人でなくていい」ということなのだから、とうぜんわれわれは、自分のことも「どの人」か見失っているのだ。

どれだけ真剣に、本気で、誠実に、こころの底からやってみても、自分という「この人」の声にならないし、自分という「この人」のことばにならない。

そのことが繰り返されて、もう「自分の声や自分のことばにはならないんだ」ということに、毎秒ごと向き合わされるのであれば、そりゃあ挫折して当たり前だ。

それでもおれは、あくまで正しい学門として、また単純なインフォメーションとして、「あなた」は真ん中にあると言うしかない。

あなたから「違う」ものが出る。
違わない。

あなたが、あなたの自己愛から出しているだけで、それは「違う」わけではない。

それが、あなたの真ん中から出てはならず、別のアドレスから出てきているというだけで、「違う」というわけではないのだ。

もちろんそのアドレスを調査すると、そこには何かしらのこだわり、何かしらの自己愛営業所があるのだった。

なぜ別のアドレスから出てくるのか。

それは、Aくんの場合でいうと、AくんがAくんを「おれ」と思っておらず、&くんこそを「おれ」と思っているからだ。

自己愛から生じた&くんのデシベル、その騒音を聞き取りながら「おれ」を探しているから、いつまでたっても真ん中のアドレスにはたどり着けようもなく、真ん中から声やことばが出てくるということはありえないのだ。

思い詰めてもしようがないので（思い詰めたりますますデシベルがデカくなるだけだ）、気軽にやるしかないが、気軽にやりつつも、このことの単純なむつかしさ・手ごわさについては、うなずいて受けて立つしかないのだと思う。

たぶん、こうしておれがおれの真ん中に到達しているということだって、当たり前のこと、ふつうのことに見えるけれども、じつはあなたの思っているほどには簡単なことではないのだろう。

じつさい簡単なことではなかったのだ。

不可能なことでもまるでなかったけれども。

あなたをおれの横に置いたとき、果たしてあなたが、

「この人よりデシベルが小さい」

と言ってもらえるかどうか。

つまりあなたがおれより静かになれるかどうか。

たぶんそれはそんなに簡単なことではない。

そんなに簡単なことではないが、求められていることはシンプルなことだ。

おれと比較して、うるさすぎるのだ、ただそれだけであって、あなたが自己愛を解決していったら、あなたは「おそろしく静かな人」と人々に驚嘆されるようになるだろう。

そしてそうして静かなのに、その人の声・その人のことばは、逆にものすごく聞こえてくるようになるのだ。

Aくんは世界を嫌い、自己愛をやりたい

静かにするといって、坐禅でもすればいいのか。

坐禅でその解決を得てゆける人も、いるにはいるだろうが、そういう場合はふつう、ゴリゴリのちゃんとした師匠につくということが大前提になる。

そんな師匠に、いまだき出会えるのかどうか、おれはちょっと門外漢すぎて見当がつかない。

ただ言いうるのは、何かのためにという、目的があって坐禅をするなら、そうした取り組みは失敗に終わるだろう。

魔境入りして終わり、というのが関の山ではなからうか。

そうでもないのかな。

坐るということを実現したいなら、まさに坐ればいいと思うが、他のことを実現するために坐ろうなどという発想は、素人でもわかるくらいありありとだめだ。

つまり本当には坐っていない、ただのデシベル・シッティングがそこには置かれ、坐禅を信じてはおらず他の何かを信じている人がなぜか禅寺で何かをしているというナゾの図がそこには現れるのだが、それでもかまわないからということまで行き着くのであれば、逆にそれは何かに

なるのかもしれない。

わからない。

ともあれ、何であれおれは、あなたが主体的に何かをやっていることを、本心から肯定する者だ。

何をやってもダメ、と言っているわけではない。

ダメごときにおじけつかななくていい、とおれは言いたい。

自分が何かをやろうとするとき、0.1秒の躊躇が挟まる。

この躊躇がいけない。

「やろうとする」というときと「はじまる」というときは、0秒差でないといけない。

失敗とかダメとか、そんなこと知るか。

誰にそんな評価をされないといけないんだ、知らねえよヨソの評価なんて。

「やろうとする」「はじまる」が0秒差だったら、それはもう成功している。

クロックが合っているから。

クロックを合わせてから、何かを成功させにいくということではなく、

クロックが合えばもうそれじたいが成功だ。

誰かに頼る必要はない。

他人に頼るな。

他人を付き合わせることで自分をなぐさめるな。

クロックが合うというのは世界と合うということであって、誰かに合わせる・合わせてもらうということではないので、自分が勝手にやればよい。

コピー用紙にボールペンで線を引くとして、それを「やろうとする」と「やる」が0秒差ならそれでいい。

それはもう成功したのだ。

それでコピー用紙がゴミになり、ボールペンのインクが減ったとして、それでしかなくなったとしても、そんなことは屁でもない。

クロックが合った、主体に先立つものがなかった、ということじたいが成功だ。

0秒差なんだからデシベルが発生するわけもない。

それが、描線一本であっても、0秒なら大爆発がありうるわけで、この大爆発にデシベルがなければ、それで芸術は出現している。

芸術において、センスがどうのこうのを言い出すのは、牛肉を見て「牛」と言っているようなものだ。

牛さんには悪いが、それはもともと牛だったものであって、いまはとつくのむかしにいいものになったものだ。

牛には間に合っていない。

牛だったのはだいたい前だな。

それぐらい、センスだの何だの、目的だの価値だの、そんなことを言い出しているようでは遅いのだ。

「書こう」と「書いた」はもう同時がいい。

クロックに追いついていろ。

躊躇するのは、結果や成果を気にしているからだ。

安心しろ、お前が生きて何かをすることについて、成果なんてものは何ひとつ出でてこない。

そうして取り組もうとするとき、0秒、クロックに、「わたし」は追いつくことができるが、「自己愛」はそれに間に合わないということに気づくだろう。

自己愛は、こだわりが刺激され、加熱し、そこからムーンと音がする、というようなプロセスが必要だ。

アツチアチにはなるが、めっちゃ遅い。

クロックに間に合うわけがない。

芸術を芸術でなくし、作品を作品でなくし、愛を愛でなくし、面白いものを面白くないものになっているのはそれだ。

自己愛のせいで「間に合っていない」のだ。

ところが、このことをやりだすと、少なからぬ人が、このことに対して「いやがりだす」ということが現れてくる。

けっこう多いというか、ひよっとしたらほとんどの人はこれなのかもしれない。

芸術や愛をいやがるのだ。

いざとなると、世界じたいをいやがる。

なぜか？

おどろいたことに、当人は、じつは芸術ではなく、自己愛がやりたいのだ。

おおっと、これは盲点だ。

まさか、自己愛を解決したいかに見えて、そうではなかった。

むしろ自己愛をこそ、やりたかった。

世界なんかどうでもよかった。

そういう人は少なくない。

クラシックバレエを習い、器械体操をやり、演劇部に入って、日本画を書き、生け花を習って、吹奏楽に参加し、世界中を旅行し、一眼レフカメラを操り、禅寺に入門して坐禅を組み、何がしたいかというと「自己愛がしたい」と言う。

そんなバカなという話だが、それでもそういう人はじっさい多く、ひよっとしたらそちらのほうが主流なのかもしれない。

フェラーリが通るかかると、「様子が、変わる」。

そういう人がいると述べた。

おしゃれな建物の、おしゃれなカフェ、その前に立つと、「様子が、変わる」。

それと同じように、クラシックバレエの名演を見ると、「様子が、変わる」という人がいる。

「こういうのが、本当のわたしなのよね」

映像美に満ちた映画を観て、

「こういうのが、本当のオレなんだよな」

音楽の名盤を聞いて、

「本当のわたしって、こういうのだから」

様子が、変わる。

何を言っているのだろう、意味不明だ。

意味不明だが、「本当のわたし」が立ち上がるのだ。

もちろんそれは空想の産物であり、あくんであり、本当には存在していない。

本当には存在していないが、当人にとっては、それこそが「本質的にしつくりくる」のだ。

正直に言って、すべてをこの「本当のわたしスイッチ！」にするだけという人は世の中に少なくなく、むしろ、

「ふつう、そういうものでしょ」

とさえ言いたくもなるのだ。

ここにAくんがいたとして、彼に、

- ・高級ドレスを着た貞淑な女性を付き添わせる
- ・高級で豪華なホテルに泊まらせる
- ・高級で豪華な食事をさせる
- ・高度な音楽演奏会を聴かせる
- ・高度な絵画、映画を、高級な環境で観させる
- ・高級な椅子に座らせ、高品質なバレエを鑑賞させる
- ・高級なサービスを受けさせる

- ・高級な服を着させ、高級な香水をつけさせる
- ・高級車で送り迎えをする

というようなことを与えると、どうなるか。

Aくんはそれらをすべて、

「本当のオレ」

ということに献上してしまうのだ。

すべてを自己愛に献上してしまう。

それでAくんは、

「マジ、自尊心というか？　そういうのが大事でさ。おれ、やっぱりそういう本物の中にいてこそ、やる気が出てくるんだよね」

みたいなことを言い出す。

様子は、すっかり変わっている。

この「様子が、変わる」というのは、学術サンプルとして録画しておきたいほどだ。

本当に、「様子が、変わる」から。

Aくんは、本当には何かをしたいわけではないのかもしれない。

Aくんは、そうしてひたすら自己愛を満たしたいだけなのかもしれない。

Aくんは、そうして「本当のオレ」という気分浸っているだけ、というのがいちばん好きなのかもしれない。

イメージ、イメージ、イメージ。

高級なホテルから、高級車で高級なホールに行き、高級な座席について、高度なバレエを観ていたら、かねてよりの「本当のオレ」というイメージが容易に立ち上がってくる。

本当の、オレ。

様子が、変わる。

Aくんは、冗談じゃなく、「いまのオレが、オレ自身に一番しっくり来ている」と思う。

多くの日本人女性は、生きているうちに一度はどこかで、「バレエを習いたい」「着物の着付けを習いたい」「お花を習いたい」みたいなことを思ったはずだ。

そしておそらく、それらの思いは突発的なもので、衝動的なものということが多いはず。

つまり、低級な自分について、「こんなのは本当のわたしじゃない」「こういうのは、世の中に合わせた、ただの仮のわたし」と思っており、そうではない高級な「本当のわたし」を思いつき、そのイメージにあてがいやすい習い事がしたいと思ったのだ。

自己愛というのはそういうものだ。

自分のためには無制限にするハイクラスな自己という空想・イメージ、というのが自己愛だからだ。

それらは、本当の意味では「やりたいこと」ではない。

「やりたいこと」なんて、ふつうの人にはなかなか得られないのかもしれない。

もし、そうだったとしても、あなたは臆さず、自分のやりたいことに向かいなさい。

そのことに秒数をあけない。

納得してから納得するな。

納得する前に納得しろ。

納得するのに0.1秒かかったとしたら、それはもう本質的には納得していないということなのだ。

内容に無関係に納得しろ。

そうでなきゃあなたはどこに進めないから。

西麻布のカフェ・ル・クォーツで読書会をやります、あなたもどうで

すかと誘われたとき、あなたが、

「えっ」

と思うのは、文化的に高級なイメージが「本当のわたし」スイッチを入れるオカズになるかもしれないからでしかなく、朋友たちと読書を進めていくなんてことにあなたのところが向かったからではない。

「読書会には、朗読イベントもあり、読み手として元女優の○○さんが特別ゲストでいらっしやいます」

「読書会のあとには、△△書院の方による、小文執筆のレクチャーもあります」

文化的に高級そうで、「本当のわたし、かも」と思うだけだ。

おれが文章の書き方をレクチャーする会があったら、あなたは寒々しいデスク席に座らされ、シゴキ倒されて一時間も経たないうちに「もうカンベンしてください……」と泣き出すだろう。

だからあなたのところは、文章を読むとか書くとかの魂に向かっていくのではない。

自己愛、イコール「本当のわたし」をやっているだけだ。

たとえ世界中の景勝地を歩いたところで、それぞれの光景がうつくしくて、そのいちいちに立ち止まり、

「ここにいるの、本当のわたし、かも」

「あっ、本当のオレって、これなのかも」

と思うだけだ。

真ん中のところには何の足しにもなっていない。

足しになっているわけがない。

だから、Aくんには高級な体験をさせ、高度な芸術に触れさせ、読書会に参加させ、世界中の景勝地を巡らせても、何にもならないのだ。

何にもならないどころか、そこに残されるのは、ただ「様子が、変わり切った」Aくんだけだ。

そうなってしまったAくんはもはや、ただの「使い物にならない面倒くさいだけの奴」でしかない。

ひどい言い方だが、本当にそうなるので、いまさらごまかして言うべきでもないだろう。

Aくんは何も、みずから邪悪な意志があつてそのようになっていたのではない。

単に、何もわかっていないのだ。

見聞を深めたと自らで言う自信満々のAくんの、無数の意見がすべて、冷凍鶏肉を解凍したときに出てくるドリップのように要らないものになつていくということが、Aくんにはわからないのだ。

(悪口がひどすぎる)

冗談でなく、人は本当に、本人としては何の他意もなく、すべてのものを「本当のオレ、かな」みたいなことに献上してしまうのだが、こうした人にはある種の特徴が現れてくる。

不安と、さびしさだ。

それも、破滅的な不安、凶悪というほどのさびしさがやつてくる。

まず、数々の高級なもの、貴重なもの、価値あるもの、称えるべき魂のものを、自分がすべて自己愛に献上しているということについて、

「わたしは何かとんでもないことをやっているのではないか？」

という直観が起こり、ケタ違いの不安が発生・蓄積していくのだ。

この不安は、マジだったら本気の本気でヤバいことなので、それだからこそ「まさにそのとおりだ」とはなかなか認められない。

このときに起こる不安はもはや、宇宙まるごとから見放されるというような感じの不安だ。

詳しいことなんて、当人のレベルではわかりようがないので、ただ漠然とした不安ばかりが蓄積してくる。

正確に言うなら、漠然とした「しやれにならない」不安が蓄積してく

る。

芥川龍之介が自死に先立って残したコメントがこれだ。有名なので知っている人も多いだろう。

——自殺者は大抵レニエの描いたやうに何の為に自殺するかを知らないであらう。それは我々の行為するやうに複雑な動機を含んでゐる。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である。〔或旧友へ送る手記・芥川龍之介〕

漠然とした不安というのはあるのだ。そりゃ、はつきりあるでしょと言われて当然のもので、それを「ぼんやりとした」としか言えなかったのは、やはり真ん中のこころの弱さでしかない。

そうして、すべてを自己愛営業所に献上しているので不安が募る一方、逆に自分の真ん中には何も与えられないのだから、さびしさは拡大していく。

もはや目を背けることしかできないほど、黒々と巨大化した穴のようなさびしさがそこにはあるのだが、一方で自己愛は満たされているのだから、

「満足しなきゃ！」

と言いつけられているような気もしてくる。

それで当人は、自己愛営業所の活性化を頼り、

「イエーイー！」

と元気いっぱい、意気揚々としたふりをする。

自分でも、もう何がどうなっているのかわからなくなる。

何かのギャップがキツすぎて、もう無理、と感じている。

もう無理、と感じているところに、すべてのものから見放されるという不安が突き刺さる。

不安に加えて、黒々として巨大なさびしさが襲ってくる。

さびしさのあまり、彼は、

「オレの自己愛を満たしてくれ！」

と言う。

悪循環だ。

本当は真ん中がさびしいのだが、真ん中がゲロ弱すぎるため、本人がそのことに触れない。

また本人はいまだにその「真ん中」のアドレスさえわかっていない。

こうしたことについて、どうしたらいいでしょうか、ということではなく、おれはまず、自己愛そのものについて話している。

自己愛者は、世界のすべての佳いもの、芳しきもの、魂とこころのすべてを、「本当のオレかも」「たぶん本当のわたし」という、自己愛に献上してしまう。

様子が、変わる。

すんげえ変わる。

人は、ふだんは「ふつう」のふりをしていても、本質におよぶとけっきよく自己愛に「乗っ取られる」のだ。

もともとが、自己愛を「わたし」だと思って数十年も経つのだから、その乗っ取りは必然だ。

そこで思いつきで坐禅をしたって、たぶん自己愛に乗っ取られて、

「本当のわたしを見つけた」

と言い出してしまうのがオチだろう。

おれはこのことについて、逆のことを言っているのだ。

おれは、あなたは自己愛ではなくて、「真ん中」だと言っている。

アドレスの問題だ。

デシベルの鳴っていない場所。

どうか逆のことでも起こってくれないだろうか。

自己愛があなたの真ん中に乗っ取るということがありうる以上、逆にあなたの「真ん中」が、数々の自己愛営業所に乗っ取るということも理論上はあっておかしくないのだ。

誰かさんが自死について「ぼんやりとした不安」を言ったようだが、おれはそれについても逆のことがあるでしよと言いたい。

つまり、自死の逆、「わたしが生きる」ということについて、「くつきりとした歓喜」があるということもありうるだろうということだ。

そのとき、「様子が、変わる」というのも、逆の向きで起こる。そちらのほうは、うつくしくて大切なものなので、サンプルを録画するべきではない。

主題を自己愛に献上して肯定されたい

大好きなお洋服、大好きなお化粧で、自分を「アゲ」ても、自己愛がアがるだけであって、自分の真ん中がアがるわけではない。

音圧の高いアニソンを聴いて自分を「アゲ」ても、自己愛がアがるだけで、自分の真ん中がアがるわけではない。

ヤバイ、超、エモい、ヤバイ、マジ尊い、そう言っって声が上ずり、頬が紅潮し、心拍数が上がる。

けれども、「わたし」がアガっているわけではないのだ。

「わたし」がアガっているわけではないが、何かがアガっていて、そのことに熱中している。

そんなことは、ボカロが「メルト」を唄っていたときから変わらない。

さかのぼれば、小室哲哉ブームのころから変わらない。

自己愛が華やいでも、自分の真ん中が華やぐわけではない。

自分がキャラならよかったのに。

自分が、自己愛から発生したキャラだったなら、自己愛が満たされたときには、たしかにもう無敵のアイドルになっているだろう。

ところが残念ながらそうではないのだ。

おそろしいことに、「わたし」というのは自分の真ん中に存在してしま

っている。

自分はこういうキャラかな、というような問いかけとはまったく無関係に、「わたし」は存在してしまっている。

仮に、重度のコスプレオタクが、記憶喪失になったとして、すべてのキャラは喪失されるだろうが、それでもその人の「わたし」は残っている。

キャラがなくなつて、喉が渴けば水を飲むだろう。

キャラや、自意識、自己愛といったものは、じつは「わたし」ではないのだ。

一千億の自己愛を満たしたとしても、真ん中は一ミリも満たされない。冷静に見れば当たり前のことではある。

自己愛はネタ的・キャラ的なことで、真ん中はプライベートなことだ。

プライベートなことなので、けっきょく他の誰かがどうにかしてはくれない。

おれがうっへっへと書くときは、おれがうっへっへとなっている。

真ん中からだ。

何かのキャラではないのだ。

一般の人は、うっへっへキャラを、そのとき安造りできるが、真ん中からうっへっへということは、へたすると一生かかってもできない。

ところでおれは、あなたを応援している。

応援という言い方は、ものすごくダサいが、この場合はダサいのもあって引き受けよう。

おれは悲しいことが好きではない。

あなたが、これまでにやってきたことが、けっきょくダメなんだなんて、そういう悲しいことにはなつてほしくない。

おれは何かダメだなんて言っていないのだ。

何かをダメだと言うとしたら、それはあなた自身が何かの「こだわり」でダメだと言っているだけだ。

こだわりがゼロだったら何かに対する「ダメ」も発生しようがないのだから。

おれは、あなたのやることに何のこだわりもないのだから、おれがあなたに何かを「ダメ」なんて言うわけがない。

あなたは誤解しているのだ。

あなたは肯定してもらおうと思っているのだろう。

それが根本的に誤りだ。

肯定とか否定とかいうものは、それじたいがいちばん見当違いだ。

何のことかといって、肯定とか否定とか、善いとか悪いとか、それが

いちばんの自己愛の領分だということだ。

善いわたし、悪いわたし。

肯定できるわたし、否定すべきわたし。

何を言っているのだ。

そうして、「自分」にこそ最大のこだわりが発生するということ、その

ことを自己愛と呼ぶ。

冷静に考えろ。

「あなた」に善いも悪いもないのだ。

何を肯定して何を否定するというのだ？

そのことじたいが、自己愛からの挙動だと気づかねばならない。

たとえばハエトリグサの何が「善い」で、何が「悪い」のか。

あなたにとって自分がハエトリグサということは「悪い」ことだろうか、

「肯定できない」ことだろうか。

あなたは何に抵抗しているか。

あなたは、あなたが否定されることに抵抗しているのだ。

それは、単純に言って当たり前だから、その抵抗の気持ちというか、

心理はわかる。

けれどもここには構造的な誤解がある。

あなたは、自己愛を「あなた」だと思っている。

おれは、いつも自己愛ではないものを「主題」にする。

するとあなたは、自分のことを否定された、無視された、ないがしろにされた、と感じる。

そうしてあなたは、落ち込みながら、おれの示した「主題」を、とぼとぼと自己愛営業所に持ち帰っていく。

あなたにとっては自己愛が「わたし」だからだ。

それで主題を自己愛に献上してしまう。

あなたは悪意からそのようなことをしているのではない。

本当にわからないのだ。

自己愛とは異なる「わたし」が存在するということがわからない。

冷静に、的確に、シビアに、精密に、捉えなおせ。

自己愛というのは、「自分」について発生する「こだわり」だ。

他人の服がダサイのは知ったことではないが、自分の服がダサイのは

耐えられない、許せない、肯定できない。

それが「自分」について発生する「こだわり」だ。

どうしてその「こだわり」の現象が「あなた」なのか。

そんなわけないだろう。

それは、あなたの主義思想によらず、単に理論上の誤認だ。

目の前に蛇口がふたつあったとして、右の蛇口も左の蛇口も、まったく同じ水を吐出するとする。

あなたはどちらの蛇口から水を飲むか。

そんなもん、どっちでもいいだろう。

「こだわり」がないはずだ。

これももし、

「わたしはぜったいに左の蛇口からしか飲まないんです。右の蛇口から水を飲むなら死んだほうがマシです」

と言いつつ、それはわかりやすい強迫神経症だ。

じつさい、強迫神経症なら、何も無理をすることはないので、どうぞ左の蛇口から水を飲めばいい。

そんなことに、何の意味もないとわかってはいても、それでも「こだわり」が発生してしまうのだからしょうがない。

強迫神経症というのは冗談でなくそういうことだ。

靴を履くのに、左足から履く、あるいは右足から履く。

このことに、本人さえ意味不明の「こだわり」が発生してしまい、それを違えると、

「いちど靴を脱いで、最初からやりなおしになるんですよ」

これについてあなたはと思うか。

その人は、左足から靴を履かなければ、もはやその人ではないということになるのだろうか。

「こだわり」が、イコール「その人」だろうか。

そんなことはないはず。

そうした神経症の人でも、他人が靴を左右のどちらから履くかについては、ほとんどの場合で興味ゼロだ。

他人のことについては「こだわり」が発生しないから。

あくまで自分のことに限ってのみ「こだわり」が発生する。

それが自己愛というものだ。

自分に限っては、右足から靴を履くのがたまらなく「厭（イヤ）」なのだ。

彼にとっては、右足から靴を履くと、そのことが猛烈に「しっくりこない」。

テレビの音量を決めるのに、偶数でないとしっくりこないという人も

いるし、奇数でないとしっくりこないという人もいる。

「テレビの音量は、ぜったいに偶数、それが『オレ』なんだよね」

テレビの音量設定を偶数にしておきたいという、ナゾのこだわりは、別に好きにしたらいいと思うけれど、それをもって「オレなんだよね」というのは論理的な逸脱があるだろう。

じつさい目の前にテレビを置かれたとして、その音に聞き耳を立てても、その設定の数値が偶数か奇数かわかるわけではない。

偶数のオレなんて存在しないし、奇数はオレではないというようなことも存在しない。

彼の「こだわり」において、偶数は善で、奇数は悪だが、そうした善悪が実在しているわけではない。

あなたは自分について、「善いわたし」を空想し、「悪いわたし」を罵っている。

あなたは冗談じゃなく誤解しているのだ。

あなたに「善い」も「悪い」もないのだ。

あなたにダサイ服を着せたとして、あるいはおしゃれな服を着せたとして、「あなた」が変動すると思っているのか？

野良犬のタロウにユニクロを着せたときと、エルメスを着せたときでは、「タロウ」が変動すると思っているのか。

そう、思っているのだろうか。

おどろいたことに、あなたは本当にそう思っているのだ。

それぐらい、残念ながらアホなのだ。

あなたにユニクロを着せたときと、あなたにエルメスを着せたときに、変動するのは「あなた」ではなく「あなたの自己愛」だ。

あなたの「こだわり」のパラメーターが変動するだけで、「あなた」が変動するわけじゃない。

当たり前だ。

エルメスを着ると、ハイブランド服を着ると、あるいは安くてもおしやれな服を着ると、あなたがアがる。

あなたはそう誤解しているし、その体感をそのまま「わたし」だと思っっている。

ダサい服、あるいは似合わない服を着て、鏡を見ると、

「違う」

と思う。

ボトムをさっきの細身のパンツに替えてみようか。

鏡を見て、

「うーん、これも違う」

お洋服のコーディネート・イメージングとしてはそのようでけっこう。

コーディネート・イメージングとして「違う」のはいいけれど、

「わたしとして、違う」

「オレとして、違う」

というのはやめろ。

単に論理的におかしいから。

なぜ、^^或る特徴的な情動を伴わせてV、「違う」と言っているのか。

なぜ、「様子が、変わる」のか。

あなたはやはり「本当のわたし」を追いかけているのだ。

服をとつかえひつかえしながら、あなたが探しているのは「本当のわたし」だ。

いくつかの服をあてがってみて、しかしそのコーディネートが空想上の「本当のわたし」に寄ってこない場合、あなたは或る特徴的な情動を伴わせて、

「違う」

と言っている。

ふだんは、あなたはこの自明のことをよく理解し、納得している。

どんな布をあてがったとして、それで「わたし」が変動するわけではない。

論理的に考えて当たり前だ。

室内の光量がゼロになったら、どんなおしやれ服も見えなくなる。

だからといって「わたし」が変動するわけではないのだから、あてがわれた布は「わたし」ではないのだ。

けれども、そのことを理解して納得しているのはあくまで「ふだん」のときだけで、わずかでも「本質」におよんでくると、あなたには「様子が、変わる」が起こってくる。

様子が変わってしまったら、その直後からは、もう「わたし」イコール「こだわり」が正になる。

大好きなお洋服、大好きなお化粧で、アがる。

月曜日のことを思い出すと、サがる。

気に入らない事実に思い当たると、ブチギレる。

断然、それが「わたし」なんです、と強い調子になる。

そうなる、そこから先はもう、おれがどのように話そうが、あなたとしては内心、

「どうしてそうやって、あなたは、わたしのことを否定ばかりするんですか」

と憎悪が湧いてくるようになる。

あなたは、乱高下する自己愛を「わたし」と思っており、発火したりひび割れたりする自己愛を「わたし」と思っている。

そしてあなたが求めるのは、その「わたし」が肯定されることだ。

あなたはつまり、

「わたしの真ん中とか、そんなものはどうだっていいんです。それどころじゃないということが、見ていてわからないんですか!？」

と激怒することになる。

あなたが、あなた（真ん中）を否定し、あなたが、あなたでないものを肯定してしまう。

あなたが自ら、「わたしにとって最も大切なのは、わたしの真ん中とかではないんです！」と力説してしまう。

あなたはその激怒と力説の裏側で、

「いま、わたしはわたし自身を爆発させ、わたしは疑いないわたしをはつきり掴み、正しい主張をしている」

と確信する。

何しろ、そのことについて猛烈というほどの実感があるのだ。

その「実感」を、何度も何度も、自分の内部で確かめることができる。

「だから、間違いありません」

とあなたは言う。

「これがわたしなんです」

そうかもしれない。

自分の内部で、その実感が百デシベルでこだましつづけるのであれば、それが聞き取られるということが、疑いない正しさということになるだろう。

その先に起こってくることは何か。

その先に起こってくるのは、逆にあなたが、「わたしの声」「わたしの姿」「わたしのことば」を現わせなくて困るということだ。

百パーセントのわたし、百デシベルのわたし。

そのときはアガっている。

にもかかわらず、三日後に自分の声を振り返ると、そこに「わたしの声」は存在せず、「わたしの姿」もなく、なぜか醜くて消去したくなるような不細工・うるささだけが残っている。

もう、見たくもないし、聞きたくもない。

三日後に見ると、すべてものは、

「違う」

とあなたには見えるのだ。

あなたは定期的に、自分のアカウントとツイートを消去するかもしれないし、定期的に、「人間関係リセット癖」をするかもしれない。

Aくんが、ふと自分の残してきた実作・実演・実物を振り返ったとき、それらがすべて「Bくん」のそれではないということに気づく。

するとAくんにとってはそれが、

「違う」

と思える。

耐えられない。

醜くて見るに堪えないものばかりを残してきている。

それでリセット癖が起こる。

そこでおれは、わざとらしく、こう言うことにしようか。

「ほらな」

厭味が言いたいわけではない。

「ほらな、大好きなお洋服、大好きなお化粧で、『わたし』がアガるというわけではなかっただろ？」

いちおう、おれが述べているのは、「人はそれぞれ『真ん中』にある」という単純なことだ。

街の真ん中の、静かなところに、「その人」の家があり、周辺の騒がしいところにあるのは、自己愛営業所なのだと、おれは述べている。

それでおれは、その何でもない真ん中を、静かなまま、0デシベルのまま、0リソースで、「ぶち上げる」というようなことを、述べるばかりだ。

おれの言っていることは、ふだん、理解されうるだけで、現実的には排斥される。

ちよつとでも「本質」におよぶときは、たちまち「様子が、変わる」の

で、おれの小論などはまったく取るに足らない曲学のものとしてキックアウトされる。

行き着くところ、「あなた」の邪魔をするのは誰なのか。

「あなた」を妨害するのは誰なのか。

現実的には、「あなた」の邪魔・妨害をするのは、おれだ、ということになる。

現実的にはそのように思っておいたほうがよいし、大半の場合、いや大半というより九割以上の場合で、あなたの邪魔・妨害をするのはおれということになる。

おれは、これでもじつは、あなたのことを応援していて、あなたのやること・やつていくことが、豊かな実りをもたらすことを祈っているし、そのことをおれなりに望んでいる。

それで、もうどのようにも言うことはできないのだが、せいぜいこのように述べておきたい。

「あなた」の邪魔をするものがなくなればいいな。それがどのような形であれ。

「違う」、いや違うない

自己愛が人を閉塞させる。

自己愛が人を永遠の停滞に閉じ込める。

そのことの事例を、おれ自身も体験しているので、そのことについて述べたい。

びっくりするぐらい、それは閉塞であり、永遠に解決することのない、停滞だった。

おれはある時期、ダーツを練習していた。

若い人は知らないと思うが、80年代の中ごろに、ソフトダーツが異様に流行した時代があったのだ。

おれもそのブームに乗っかり、ダーツに入れこんでみることにした。

じっさい、上級プレイヤーを見てみると、ずばり「カッコいい」ということがあって、おれもあなりたいと思ったのだ。

そうして取りかかり始めると、おれは執拗なので、たいていどんなことでも、それなりにモノにしてしまうものだ。

コイツ、本当に、やり始めたらぜんぜん引き下らないし、本気でしつこいからな。

そういう奴は上達するに決まっているのだ。

ところが。

数年にわたる、執念のような練習の末、おれのダーツ力は、鼻毛ほど

も伸びなかった。

誇張ではないし、謙遜でもない。

いったいどれだけの時間を費やしたのか。

どれほどの労力を費やしたのか。

おれにとっては慣れっこのことだが、ふつうの人にとっては、ここまですて上達しなかったなら、それはけっこうな「挫折」と体験されるのではないだろうか。

どれだけ練習しても、まったく伸びなかった。

こんなに上達しないことってあるかね、と、おどろかされるほどにだ。才能がないとかいうレベルではない。

逆に、ダーツがでたらめに飛ぶ才能があると言いたくなるほどに、ダーツはまともに飛んでくれなかった。

どれだけ練習しても、わずかも伸びないという停滞。

閉塞だ。

ダーツなんてものは、筋のいい人が（プラス、たいていは素地のある人が）鼻歌まじりにでも練習すれば、二ヶ月ぐらいでけっこうな上達をするものだ。

一方おれのほうは、必死こいて練習しているのだが、まったく上達しない。

そのときのみじめさたるや。

念のために申し上げておくが、おれはちゃんと上級者の人に習いもしたし、本も読んだしビデオも観た。色んな人からのアドバイスも吸収した。

それでも伸びないものは伸びないのだ。

なぜ？

そのことは、この二十年間、おれにとってひとつのナゾではあった。例によって、おれのことだから、そのみじめな挫折を、おれとしては

めずらしいこととして、むしろ喜んで話のネタにしていたのだけれど。むろん、いまでもヘタなままだ。

いまはもう練習していないし、手元にダーツじたいがないけれど、いまから練習したらどうなるのだろうか。

ひよっとしたらおれは、あのおれとは違い、まともに上達していくことができるのかもしれない。

正直、そのことにけっこうな興味はあるが、ちょっとそこまでやっている時間がないので、なかなか現実的には取り組めないだろうか。

なぜおれは、そこまで徹底的に、ダーツが「上達しない」という憂き目にあったか。

才能がどうこうということではないのだ。

ちゃんと仕組みがある。

おれはダーツの練習をする。

おれの投げたダーツは、斜め右下に逸れていった。

それについておれはどう思うか。

とうぜん、

「違う」

と思う。

おれは真ん中を狙っているのだ。

次の一投は、ずいぶん上にずれた。

「違う」

さらに次の一投は、左にずれた。

「違う」

何が「違う」のか？

おれ自身、かつてのおれに申し上げよう、

「違うない」

断じて違うない。

なぜなら、おれの投げたダーツだ。

斜め右下に飛んでいったということは、おれがそちに投げたのだ。

おれがそう投げたのに、なぜおれは「違う」と内心で、そのたびにつぶやいているのか。

これは、自己愛の現象なのだ。

説明のために、AくんとBくんの現象を、一般化してA-Bの現象と扱うことにしよう。

おれは、ダーツの上級プレイヤーにあこがれたのだ。

狙ったところに、スタン、スタン、スタンと突き刺さる、特にあのハードダーツの鋭いスローイングにあこがれた。

カッコよかった。

女の子にモテそうだったし、

「おれもそうになりたい」

と思った。

それがモチベーションだった。

モチベーションによって努力もした。

おれのモチベーションと努力は何に向かっていたか。

おれは空想上で、自分の投げたダーツがスタン、スタン、スタンとダーツボードに刺さっていく、そういう自分を作ったのだ。

Aのおれだ。

そこから、本来のあるべき練習や稽古からは逸脱が起こっていく。

狙ったところに、カッコよくダーツが飛んでいく、そういうスローイングをするのが「本当のおれ」だ。

しかし、じつさいに投げたおれのダーツは、斜め右下へ飛んでいった。

「違う」

違うない。

それはただの、Aのダーツだ。

おれは、自分のAのダーツを目撃して、それがRのダーツではないことについて、

「違う」

と言っている。

おれは、こうしておれ自身を含めて堂々と言うが、人というのはこれぐらい自己愛においてアホだ。

違うと言え、お前が勝手にRを空想し、Rを本当の自分と思い込んでいる、そのことのほうが違う。

けれども、そのときのおれはきつと、すでに「様子が、変わる」のあとにいたのだろう。

「本当のおれ」を追いかけつづけている。

まったくアホな話で、「本当のおれ」とは何かというと、斜め右下にすつぽ抜けているのが本当のおれだ。

でも当人はもうそんなことにまったく立ち返れなくなっている。

本人はただ「ふつうに練習している」つもりだけれども。

投げるたびに「違う」「違う」「違う」「いまのも違う」。

たまたま真ん中に入り、ズキューンとSEが鳴ると、

「よし、今の」

と思う。

こんなことをしていて上達するわけがない。

こいつがやっていることは練習でも何でもなし。

こいつがやっているのは、ただの「ありもしないRの言い張り」だ。

Aに向き合って、Aを向上させていくというつもりがない。

いや、本人はそのつもりなのだろうが、本人はそのつもりでも、じつ

さいにはすでに自己愛に支配されている。

本人は、

「じきに、本当のおれ(R)になってみせるから」

と違ってダーツを投げつづけているのだ。
違うといえばそのことのほうが違う。

本当のおれはAであって、狙ったところへは投げられていないというのが本当のおれだ。

だが、断じて申し上げる、人は自己愛において、Aなどというものは興味がない。

自己愛において、人のマインドはきわめて単純だ。

そのマインドは、

「さつさとR！」
だ。

自己愛において、Aがする練習などというものは、どうでもいい形式的な作業でしかない。

大切なことを申し上げよう。

自己愛において、「練習なんか要らない」のだ。

じつさい、翌日からきゅうにガンガン、ダーツボードの真ん中にダーツが刺さるようになったとして、そのことは何らおれを戸惑わせない。

そのときおれは、

「よしよし、来た」

と思うだけだ。

これはかなりの救いがたいバカということがわかるだろう。

さつさとR、さつさとR、さつさとR！

Aの練習などにところが向かっているわけではない。

だから、自分の投げたダーツが斜め右下へ逸れていくと、

「違う」

と断じる。

おれはR投げをしているのであって、A投げをしているのではない、
と思っているからだ。

それによって、A投げはまったく上達していかないということになる。A投げは、^^ただ否定を繰り返されるvvことになる。

「違う」「違う」「いまのも違う」「いまのはもっと違う」「だから違うってば」

おれは何の練習をしていたのか。

おれはすべての練習時間を「自己のスローイングを否定すること」にのみ費やしたことになる。

自分に向けてだが、これは意地悪を言っているのではない。
本当にそういうことをしたのだ。

そういうことをしているということに、本人は気づけないのだ。

重ねて言うが、おれは本当にダーツが一ミリも上達しなかった。

そしておれは、ほとんどのことについて、取りかかればそれなりにモノにしてしまう奴だ。

おれの周囲の人は、よくわかると思うが、

「この人がそこまで練習して、まったく上達しなかったなんて信じられない」
というのが妥当な感想だろう。

そのとおり、まったく信じられないようなことだが、そうではないのだ。

おれだって、この「自己愛」という仕組みに囚われると、その閉塞から一歩たりとも脱することはできない。

空想上にQを形成し、それを「本当のおれ」とし、そこに湧いてくる情動をモチベーションにして掻き立てられているかぎり、おれの真ん中はいつまでたってもダーツの練習なんかできないのだ。

ずばり言おう、おれの「真ん中」に、ダーツのスローイングの経験は一ミリもない。

一ミリもないのだ、逆におれは確信をもってそのことを断言できる。

「真ん中」で投げたことがあれば、おれのことだ、そのわずかな体験量でも、長足の進歩を得るに決まっている。

だから、おれはあれだけあの時期に必死こいて取りかかったダーツを、^^本当にはやったことがないvvのだ。

あんなに連日、何時間も、練習して研究して、ウンウン唸っていたのに、その時間のすべてにおいて、おれは本当にはダーツを投げたことが一度もない。

そんな言い方をしたらかわいそうだよ、と、多くの人は思うかもしれないが、そんなことはないし、そうしたことにおれは慣れっこなので、その点はまったくご心配いただかなくて大丈夫だ。

なぜなら、おれが確実に知っていることは、本当にキツイのは「本当にやる」ということの方であって、本当にはやっていないということについては何も本当にはキツくないので、心配するようなことはないからだ。

おれはこうして書き話をしているが、こちらのほうは「本当にやっている」ので、こちらのほうが何万倍もキツイ。

ダーツの練習をしていたときは、ただ自己愛が乱高下するだけであって、本当には何もキツくはないので、そのことにいまさらお心を砕いていただく必要はないのだ。

またそのように言うと、一部の陰気な勢力から、「オレだってキツいんだよ」「アタシだってキツいんです」と言われてしまいそうな気がするが、それについてはやはり、「じゃあ本当にやれよ」と申し上げるしかない。「じゃあ本当にやれよ」と言われると、やはりじつはそっちのほうがつとキツイということが浮き彫りになってくるのではないだろうか。

ともあれ、このおれが、この何でもこなす九折さんが、ダーツにかかわってはとんでもないポンコツだったということは、わかりやすい実証レポートになるのではないだろうか。

おれもあなたも、同じ穴のムジナだ。

自己愛に囚われると、ただちに閉塞、停滞して閉じ込められる。

まったく進めない、まったく成長しない。

それでいて、自己愛だけが乱高下する。

そして、いちいちの自分が発するものについて、自分で、

「違う」

「違う」

「いまのも違う」

と言いつづける。

まるで「自分に敵しい人」みたいだがもちろんそうではない。

Ｑを本当の自分と思い込んでいるだけだ。

Aをすっぽかして「さっさとＱ」を夢想して平気である、根本的に自分に甘い奴だ。

いまからおれがダーツを練習し始めたらどうなるのだろう。

何割かは、「いまのおれならいける」という気もするが、一方で、「けっきょくあのスローイングに関する自己愛が再燃するだけでは」という気もする。

もちろん、いまのおれが、本気の本気で立ち向かえば、それはきっと突破してしまうだろう。

けれども、それにしても、自己愛に囚われたものを突破するというのは、いまのおれをもつてしても容易なことではないということなのだ。

けっきょく、かなぐり捨てないと突破できない。

かなぐり捨てるといって、Aをかなぐり捨てるんじゃないよ。

そういうとんでもない誤解をしないように。

かなぐり捨てるのはＱのほうだ。

空想上の、「本当のオレ」を捨て、空想ではない直接のおれAを愛する。真ん中を狙って、斜め右下に飛んでいく、それがおれのスローイング

だ。

そのことの善とか悪とかはおれは知らない。ただおれはそのAを愛する。

Aを愛しているのだから、Ｑに用事はなくなる。

ここでほとんどの人が、

「Ｑを捨てられないんです、自己愛が捨てられないんです、空想した本当のわたしが捨てられないんです」

と、感情を激して苦しむということを、おれはよく知っている。

だがこれについては、どうにかする方法などは存在しない。

また、あなたがいま生きているあなたAを否定するということに、おれまで賛同するという気にはなれない。

あなたの投げたダーツは、真ん中に飛んで行かなくてはならないか。そのことはよくわかる。おれもかつてはそうだったからだ。

いまのおれはもう、投げたダーツが、真ん中に飛んで行かなくてもいい。

おれの投げたままに飛んでいくだけでいい。

ただ、本当にやらないと。

おれはあのころより、少しは賢くなり、それなりに大人にはなったのだ。

自己愛ならざるものを持つてゐる 人のほうが異常で稀有だ

逆に考えろ。

「むしろ自己愛しなくて当たり前でしょ」

あなたは偉人ではない。

あなたの周りにいる人もたぶんあまり偉人ではない。

たぶん偉人ではなく凡人だ。

凡人が自己愛まみれなのは当然だ。

あなたが、自己愛まみれの自分を「しつくりこない」と言い出すのはそれじたい脈絡がおかしい。

むしろ、自己愛ならざるものを持っている人に会ったらびつくりしろ。

あなたにもそういう経験が一度や二度はあったかもしれない。

おれにもあった。

おれは幸いにも、そういう経験がけっこう数多くあった。

当時はおれもアホだったので、何がなんやらわかっていなかったか、すくなくともおどろいてはいた。

びつくりしていた。

一種の感動があった。

でもそれが何なのかまではわからなかった。

ただ胸を打たれた。ショックだった。

もしあなたに同様のことがあったら、できたらそれを大切にしろ。

なるべく最後まで、唾を吐きかけたり、ゴミ箱に捨てたりはするな。

なるべくだ。

自己愛ならざるもの、自己愛以外の愛を持っている人のほうが、きわめてレアなのだ。

そのへんの、街ゆくジイさんやバアさんを捕まえてみる。

ジイさんは、凡人なので、

「本当の、ワシはなあ」

みたいなことを空想している。

バアさんも、

「本当の、わたしはねえ」

みたいなことを空想している。

自己愛だ。

けれども、だからといって何だというのだ。

凡人というのはそういうものだ。

逆に、そのへんを歩いているタフガイを捕まえて、そいつからはミ
リも、

「本当のおれはさあ」

みたいなものが聞こえてこなかったらどうだ。

そんな奴のほうが異常だ。

「本当のおれは、これだ、ここにいるおれだ」

そう堂々と応えて、0デシベル、そんな奴のほうが異常じゃないか。

そんな奴スゴすぎるだろう。

そういえばおれは昔、神田のあたりで、交差点で信号待ちをしていたところ、宗教の勧誘に捕まって、

「あなたの今の、幸福度は何パーセントですか」

みたいなことを訊かれた。

おれはそのとき、それが宗教の勧誘とも気づかずに、

「百パーセントですけど」

と即答してしまった。

すると勧誘の二人組が、

「エエッ!？」

と、素でおどろいた声をあげた。

おれはなおも、

「百パーセントですけど。あの、信号変わったんで、もう行っているんですか」

と言い、立ち去ってから、ああ宗教の勧誘だったのかと気づいた。

一般の人は、ハイスペックな異性と交際し、持っている株の価格が三倍になれば、幸福度が九十パーセントになるのかもしれないが、おれは女にフラレ、パチンコでスツテンテンになったとしても、幸福度は百パーセントだ。

パチンコやらないけど。

おれの幸福は、おれがおれであるということにのみ根差すので、そのパーセンテージが一ミリだって減ることはない。

役所から何かの呼び出しがあるとか、わけのわからん用事に付き合わされるときは、わずらわしいとか面倒くさいとかは思うけれども、だからといっておれの幸福度が変動するわけではない。

若いハリウッド女優の百人が裸になっておれのところにやってきたとして、おれがウヒョーとなったとしても、それで幸福度が増加するわけではないし、彼女らが帰っていったとして、おれの幸福度が低減するわけではない。

五つ星ホテルでも野宿でもおれの幸福度は変わらない。

ハリウッド女優の百人が、裸でおれに会いに来たという場合、それだけなら話はわかるが、まさかそれをおれが幸福度の足しにするというようなことだったら、さすがにそれはその百人がかわいそうだ。

おれの幸福度のために女を呼びつけるなどということがあったとしたら、それは失礼であって侮辱的で、彼女らの尊厳の侵害にあたるだろう。

おれは自分の幸福度のために誰かをどうにかするということはない。考えない。

おれはおれであるということだけが幸福の要素で、いつも百パーセントだ。

このように言うと、逆におれが自己愛の権化のように思えるのだが、そうではないのだ。

ここまでに説明してきているとおり、自己愛というのは、空想上に「本当のわたし」を作り出すという無自覚のシステムのことを言うのだ。

おれは、何も空想しなくても、このとおりおれがおれであるということに満足しているので、空想上のおれ・本当のおれをというのを作り出す必要がない。

おれには自己愛がないというよりは、そもそも自己愛の必要がない。

愛があるので自己愛は必要ないのだ。

世田谷区で、夜な夜な、若い人たちが大声を出してお酒を飲んでいるのを見ると、たいいてい、男の腕にはちよつとしたタトゥーなんかが入っていて、女は、幾人かの男を「どうかなあ」と吟味している。

にぎやかで、楽しそうではあるのだが、全員が「本当のおれはさ」「本当のわたしはね」を無言で掲げあっている。

それが、ふつうだ。

何らおどろくべきことはない。

むしろそんな中に、「どう見てもコイツはこのままで本当のコイツ」という実物がまぎって座っていたら、そいつの存在のほうがおどろきだろ

う。

あなたもこれまでに、一度や二度は、そうした「おどろくべき」人に出会ったことがあるかもしれない。

そのときあなたは、おどろくというか何というか、「よくわからない」という戸惑いを覚えたはずだ。

そして、「どうしたらいいんだろう」と思いながら、それでも何かを「大切にしなきゃ」というようなことを思い、何かを「ありがたい」と覚え、何かを「やさしい」と感じた、そういうことがあったはず。

そして、ずっと後になって、何か自分が少しでもまともであれたとき、なぜか、

「あの人のおかげ」

と想ったりした。

自分が、一部なりとも、あるいは限定的にでも、自己愛を離れられているときがある。

そのことについて、

「あの人のおかげ」

という気が、なぜかするのだ。

それがなぜなのか、いったい何を意味しているのか、あなたにはさっぱりわからない。

そのことをもって、あなたの自己愛が解決したわけではまったくないけれども、少なくともあなたは、自己愛が解決される手がかりを、その実物から得ているのだ。

それであなただけは、そこまで理解はしていなくても、直観的に「ありがたい」と覚えている。

自己愛ならざるもので挙動できている人は、きわめて稀有な人であって、われわれはアホなので、そのことじたいがわかっておらず、またそれに対してどう向き合えばいいのかもわかっていないのだ。

このことについての賢明さは、ごくまれに生じることはあるが、そこに生じた賢明さは、まったく万人にとって「ナゾ」みたいなものになる。おれ自身にもそういう経験がある。

ある女性が、まったく脈絡のない論理でおれに、

「あなたのおかげ」

と言った。

それはまったくのナゾだった。

彼女は、ひと昔前の、完全な「ギャル」のタイプで、アバレルに勤めており、髪の毛が金髪だった。

それは、よく似合っていたし、それで素行が荒れていたわけでもなかったのだ、それは何も問題のないスタイルだった。

けれどもなぜか彼女は、ある機会におれと少し話し、次回、おれに会う機会には、なぜか髪を黒色に染め直してきた。

おれはおどろいた。

「髪、黒に戻したの？」

「うん、あなたのおかげなの」

「んん？」

「あなたのおかげ」

わけがわからない。

前に会ったとき、何かそうした容儀にかかわることを話したわけではまったくなく、

ふつうの、何でもない話をしただけのはずだった。

彼女がたしか、おばあさんと仲が良く、おばあさんから教えられて、意外に仏教の話に詳しい、みたいなことを聞いたように覚えている。

ただそれだけだ。

彼女が髪を黒く染め直してきたことについて、おれの存在やたらきかけは、あまりにも因果関係がない。

そもそもおれは、ギャルの彼女の髪が金色なのは、ぜんぜん悪くないし、別に何とも思っていなかった。

彼女のほうは髪色について何かを思っていたのかもしれないが、そのことはおれからはよくわからない。

ただ、あまりにも真つすぐに、

「あなたのおかげなの」

と言ってくるので、しょうがない、

「お、おう」

と、やがておれは折れるしかなかった。

ただ、そこにはなにか、頭でっかちではない賢明さ、遠くまで届いている澄んだ叡智がはたらきかけているというようなさわやかな感触がした。

おれは、本当に彼女に何もしていないのだが、彼女は、これまでイライラするばかりだった自分をやめることができた、とおれに言った。

先日おれに会ったときには、彼女はおれに対してはまったくそんなイライラしているようなところは見せなかったので、おれは「意外だなあ」とおどろいて言った。

すると彼女は、「あなただからだよ」と言った。

いつもはもっと、鬼みたいに怒ってばかりなの、と彼女は言っていた。

それは、おれが見た彼女とはまったく違うありやうなので、おれとしては、不思議がるしかなかったのだった。

それで、そこに何か、恋のようなものがあつたのかというと、何かそういうステレオタイプなことがあつたのでもない。

正直なところ、彼女に交際相手がいるのかどうかさえおれは知らないままだった。

話を元に戻すと、われわれは凡人であつて、凡人ということは自己愛まみれで当然だ。

自己愛ならざるものを持っている人のほうが異常で稀有だ。

そしてわれわれは、その異常で稀有な人に出会ったことがあるかもしれない、そのとき、よくわからずとにかくおどろき、戸惑ったはずなのだ。

そのときのおどろきと戸惑いを、どう取り扱えばいいのか、どう捉えればいいのか、けつきよく不明のまま現在まで生きてきている。

われわれは、凡人であつて、救いがたいほどアホなので、とんでもない誤解をする。

自己愛ならざるものを持っている人に出会い、感心していると、そのうちに自分もその稀有な人と同レベルにあると思ひ始めるのだ。

知らず識らず、自分も、自己愛ならざるものに到達した、もはや凡人ではない人なんだろうな、という気がしてくる。

惜しい。

賢明さ不足だ。

われわれはもともと、空想上にイケている自分々を作り上げてそのイメージを味わっているのです、どうしても自然に「凡人ではない自分」というものになりきっていつてしまう。

でもほとんどの場合で、そのときの自分は「あの人」の領域になどは達していない。

あなたは「あの人」の領域になど至っていないのだ。

あのとき初めにあつた、「よくわからない」と感じて戸惑ったこと、おどろいたこと、不明の感動があつたこと、あの時点のことに立ち戻れ。

^^あのとときの「よくわからない」はいまも続いたままなのだvv。

あれからもう何年も経つ。

だからといって、どれだけ年数が経とうが、それで理解や見識が進行するというわけではないのだ。

あなたが中学のときに「よくわからない」と感じた一次関数は、あれ

からどれだけ年数が経ったとしても、いまもやはり「よくわからない」ままだろう。

自己愛を超えたわたし、自己愛ならざるものを得たわたしというのは、「よくわからない」のまま、たいてい空想上のわたし Σ として創り上げられてしまっている。

おれが、先ほどの金髪から黒髪への女性について、その知性の冴えと一種の美を認めるのは、彼女が、

「いつもはもっと、鬼みたいに怒ってばかりなの」

と言い、 $\Delta\Delta$ いつもの彼女Aのほうを切り捨てなかったVVところだ。

彼女の言いようをそのまま信じるなら、彼女はいつもはイライラしており、鬼みたいに怒ってばかりで、そのことに自分で疲れ果て、うんざりしていた。

(そういう口調をしていた)

彼女はそうして、怒ってばかりの自分にうんざりしながら、そこから脱する方法がなく、閉塞していた。

そこで、どういつながりかはわからないけれど、おれと会って少しでも話したとき、なぜかそうして怒りつづけるということをやめるきっかけ・手がかりを得たようだ。

そのことのサインとして、また報告として、さらには少なからずお礼の気持ちも潜ませて、彼女の黒髪は示されたのだろう。

しかし、それでもなお彼女は慎重だった。

つまり安易に、

「わたしは本当のわたしになれたんです」

というふうな、閉塞からの解脱を気取らなかった。

あくまで「あなたのおかげ」とのみ言い、怒りつづけるという閉塞に通風孔が空いたのは、自分の功績ではないし、いまのところ自分の到達点ということでもない、という認識に留まったのだ。

彼女は本当に、おれに向けて、「あなたのおかげ」と言ってくれていた。彼女は彼女Aのままやっていく気概で、彼女 Σ を言い張るということがなかった。

とても勇敢で、きつとおばあさまから授かった知性が彼女に生きているのだと思う。

仮に彼女に、あなたは凡人ですか偉人ですかと訊けば、彼女は大声を出して笑い、

「超、凡人だよ」

と、甲高くうれしそうに言っただろう。そういうことにはじつに屈託のない女性だった。

われわれはアホなので、自分が凡人ということについて、そこまで屈託なく言いされることさえ稀なのだ。

われわれはけっこう、有為な数パーセント、偉人とは言わないまでも、「ただ者ではないワタシ」みたいなことを空想しつづけているのかもしれない。

(「かもしれない」じゃないなあ、ふつうそういう空想にしがみついているよなあ)

このように、冷静に考えると、われわれは凡人であって、自己愛まれということのほうが当然だ。

そして自己愛ままれということについて、本心では納得がいかない、受容できない、屈託なくは認められないというのが、まさにわれわれ凡人の凡人たるゆえんだ。

われわれは残念ながら、ややこしい奴らで、面倒くさい奴らなのだろう。

残念ながら、内心ではわたし Σ を気取りつづけ、わたしAを否定しつづけるという、自己愛の濃い&濃い、面倒くさい連中がわれわれだ。だからやはり、逆に考えろ。

自己愛しかないというほうが当たり前だし、ふつうだ。

そして、逆に考えろ、あなたはここに結論を見つけたのじゃない、本当はヒントを見つけている。

あのとときからずつとつづいたままの「よくわからない」について、ヒントを得ているのだ。

ちよつとタフなことになるけれど、お得意の結論は投げ捨てて、ヒントを見い出して、本当にあのとときからの「よくわからない」の解明に向かえ。

人格が乗っ取られるほどキツい時代

なぜか、時代と共に、自己愛は「キツい」ものになってしまった。

これはただの、ていどの問題だ。

十五年前の自己愛問題とは、なぜか「ていど」が違う。

これはなかなか困ったことだ。

誰だって、ここまで読み進めているのなら、きっと自己愛の問題を解決したいはずなのだが、単純に「ていど問題」として「キツい」ものになっているということは、それだけで解決可能性が低くなってしまう。

繰り返すが、自己愛というのは「本当のわたし」という空想だ。

そのことは、ふだんは「なるほどね」と冷静に理解されるが、じっさいに少しでも「本質」におよぶとダメだ。

様子が、変わる。

自己愛に乗っ取られる。

もはや、自己愛営業所がクーデターを起こし、政権を乗っ取ったというような状況だ。

このことが、なぜか「時代」というまったくどうでもいいもののせいで、ていどを「キツく」するというのは、われわれにとってはひたすらの困りごとではない。

せめて、人々が、あるいはあなた個人だけでも、その「時代」の影響に抵抗すればよかったのだが、なかなかどうして、われわれはその時代というものに三日ぐらいしか抵抗できない。

あっさり洗脳され、あっさり書き換えられてしまう。

先週まで「そういうものでしょ」と言っていたものが、今週には「ぜったい許せない」になっている。

その「ぜったい許せない」が、翌週には「何だっけ、それ」になっており、それが来月には思い出されて、「だからぜったい許せないんだって」と再燃している。

わけわかめだ。

（文学としてはこんな粗雑な表現をしてはいけません）

男性アイドル事務所での秘め事が、先日まで「そういうものでしょ」と言われていたのに、今週には「ぜったいに許せない」になり、来週には「何だっけ、それ」になり、来月には「だからぜったい許せないんだって」と再燃する。

なぜかいつのまにか、そういう時代になったのだが、なぜかそういう「時代」というものに、多くの人があっさり人格と精神を書き換えられてしまうのだ。

これではもはや、どういう「人」がそこに存在しているのかさえ不明だ。

ここでは原理だけ容赦なく示しておこう。

自己愛というのは空想イメージだ。

^^空想イメージだからこそ、自己愛営業所の方針というのは書き換えられるVVのだ。

先週まで、「生涯現役」、バリバリに仕事をこなす有能な自分というものを「本当のわたし」と空想していたけれど、世の中が、「FIRE」「QOL」「スローライフ」「マインドフルネス」みたいなことを言い出すと、

空想イメージが書き換えられ、今週にはもう、「若いうちに成功を収めて、南の島で大切な人とのんびり暮らす、それが本当のわたしだし、もともとわたし」ということになってしまう。

「もともとのわたし」とまで思い込まれてしまうのがおどろきだ。

あきらかに、「もともとはそうじゃなかったでしょ」と言われるべきなのだが、そんなこと言たって、当人は気分を害して不機嫌になるだけだ。

どのように反応されるかも、すでに前もって知られている。

「だから、そうじゃなくって。あのときは、何かそういうムードに、乗せられていたの。だからあのときのあれは、あくまで仮のわたしであって、本当のわたしはもともとこうなの」

本人はこれでウソをついているわけではない。真剣に、こころの底からそう言っているのだ。

疑うことは許さない、と彼女は思っている。

じつさい、このときの彼女はウソをついているわけではない。

自己愛営業所の方針なんて、いくらでも書き換えられるということを、彼女本人が知らないだけだ。

どうでもいいことだが、わかりやすさのためにいくつか例を出しておこう。

九十年代の中ごろには、なぜか猫も杓子も、「スキーに行って白銀にシユプールを描く」のが「本当のわたし」だった。

同時に、テニスサークルでスコートを穿いて汗を流しているのが「本当のわたし」だった。

九十年代の後半に向かつては、「クラブ」で流行のサウンドに詳しく浸り、夜遊びを転々としているのが「本当のわたし」だった。

〇〇年代になると、テニスサークルではなくダンスサークルが主流になり、「自己表現的」なことに所属しているのが「本当のわたし」だった。

同時に、「爆笑オンエアバトル」などを見て、やはり自己表現的なことをしている人たちへ、共感を覚えて胸を熱くするのが「本当のわたし」だった。

それが一段落すると、「ニコニコ動画」等で、電腦サブカルに寄った自己表現が拡散されること、その中にいることときめきが「本当のわたし」だった。

その後、時代はSNSやマネタイズに切り替わっていくが、もうこんなことを拡大して語る必要はないだろう。

とにかく「書き換わる」のだ。

自己愛営業所の方針は、時代のもたらすイメージによっていくらでも書き換わる。

「2ちゃんねる」などのログを見たとき、十五年前のスレと、現在のスレとは、根本的なムードが異なるだろう。

「書き換わる」のだ。

そしてそのとき、やはりそれぞれの規模において、「様子が、変わる」ということが起こっている。

ここでも「様子が、変わる」が起こるのだ。

自己愛営業所の方針を変えたとき。

やはり、様子が、変わる。

やはり「2ちゃんねる」のスレッドへの書き込みも変わるし、さまざまなものの風当たりの強弱も変わる。

現代のYoutuberやミュージシャンを八十年代に送り込んだら、八十年代の人たちからはひたすら「きつしょ」「去(い)ね」と言われるだろう。

男性が眉毛を整えていたらそれだけで全力でからかわれるような時代だったのだから。

逆に、八十年代のドラマ「金八先生」を現代に送りこんだら、視聴者た

ちからは「くつきw」と笑われるばかりだろう。

人は、「真ん中」の存在としてはつづくけれど、自己愛営業所としてはすぐに書き換えられる。

たとえば、九十年代、「ゆず」という二人組のシンガーが現れたとき、何かわれわれには「様子が、変わる」ということが起こった。

つづいてGLAYやラルク・アン・シエルといういわゆるビジュアル系が台頭してきたときも、「様子が、変わる」は起こった。

何かが書き換えられ、前まであったものは消されたのだ。

おれがこうして書き話しているところ、たとえば人それぞれの「真ん中」というようなことを言っているけれども、これも旧時代なら、その言いようじたいが前向きに捉えられた。

「真ん中」という言いようについて、たしかにそうだ、と聞き取ろうという態度がありえた。

けれども現代ではそうではない。

様子が、変わる。

「真ん中」と言えば、

「それってどういうことですか？」

と、おれが詰問されてしまう。

ていど問題として、自己愛営業所が「キツク」なってしまったのだ。

現在、すでに人々の自己愛営業所の方針は、攻撃性を高くして、敵愾心を強くしている。

それは、あなたの価値観とか、あなたの態度とかいうことではなくて、ただの時代のイメージ作用だ。

あなたの自己愛営業所は、「時代」がもたらすイメージによって三日で書き換えられる。

（「それは違うでしょ」という抵抗が、三日しかできない）

あなたの意志や意図によらず、あなたの自己愛営業所の方針として、

「それってどういうことですか？」

と、無条件の反発、攻撃性や敵愾心をにじませて詰問が起こる。

あなたは、そのことを嘆かわしいと考えるけれども、そのときにはそれに乗っ取られるので、じっさいの現場においてはどうしようもない。

そんなわけで、現代におけるこの自己愛の問題は、「 कोरोコ書き換わるし」「攻撃性や敵愾心が強い」という単純な二点において、ていどが「キツい」のだった。

ていどがキツくなっているのです、その乗っ取り力も、シャレにならず強力になってしまった。

かつて、人格や精神が自己愛に「乗っ取られる」なんて、きわめて稀な例だったのに、現代においてはごく日常的な、ふつうのありふれたことになってしまった。

どうしたらいい、ということは出て来ようもなく、ひとまずひたすら「困る」としか言えない。

ますます「真ん中」は遠ざかるのだが、状況的には、ますます「真ん中」が得られてほしいと望まれるのもあった。

「腐れ縁のアツいオレたち」

自己愛とは、空想イメージだ。

本当のわたし、という空想イメージ。

本当のわたしは、見栄えがして、文化的で、豊かで、アーティスティックで、美だ。

それでいて気さくで、屈託がなく、厭味もない。

われわれが愛するものは、自分をそうした「本当のわたし」へ寄せていってくれるものだ。

だからわれわれは、十二万円のジャケットを愛する。

おしゃれなエリアを愛し、おしゃれな建物を愛し、おしゃれな店を愛する。

フェラリを愛し、西麻布での読書会を愛する。

高級ホテルを愛し、海外旅行を愛し、景勝地を愛する。

すべて、

「あっ、これ、本当のオレかも」

と思わせてくれるという、その一点で愛するのだ。

ここにおれがしゃしゃり出てきて、

「いや違う。本当のお前はこうだ。まず、お前は真ん中が空っぽでな…」

そんなことを解き明かすならば、彼はおれのことを愛さないだろう。

要するに、われわれは何かを愛したつもりでも、その愛はほとんどが原理として自己愛ということがあるのだ。

先ほどの章で述べたとおり、われわれ凡人においては、

「けっきょく自己愛しかないじゃん」

というのがふつうなのだ。

たとえばBくんは、空想する「本当のオレ」においては、気の置けない友人たちとつるんでおり、そのことを互いに「腐れ縁」と言い合っている。

あくまでそういう空想を、彼が持っているということであって、彼が本当にそういう仲の友人がいるということではない。

何に影響を受けたのか知らないが、彼はそういう「腐れ縁の中でヤレヤレと肩をすくめている男」なのだ。何かそういうことへのあこがれがあったのだろう。

そういう空想上の自己キャラに支えられて、彼は日々を生きている。

一方でC子は、空想する「本当のわたし」においては、サバサバしていて皮肉が効いており、でも本当はやさしいところがある、そういう女性だ。

あくまでそういう空想イメージであって、本当にそういう人ということではない。

何に影響を受けたのか知らないが、彼女はそうして「見た目は色っぽいくせに友情を大切にしている女」なのだ。

そういう空想上の自己キャラに支えられて、彼女は日々を生きている。

さらにD子は、空想する「本当のわたし」において、何についても意見が鋭すぎ、周囲をあせんとさせてしまうタイプだ。あくまで当人の空想でしかないが、やはり何かに影響を受けて、彼女はそういう「一種の天才肌のタイプで、怖がられているけれどじつは頼られて人気者でもある女性」になっている。

このBCDがつるむと、どうなるか。
ある酒場に彼らは集まる。

BくんはC子に對し、

「うーす」

とあいさつし、続いて、

「あ、お前また、その気はぜんぜんなくせに、恰好だけエロい恰好しやがって」

と言う。

あたかも、「腐れ縁」の友人に向けて言うような口調でだ。

それについてC子は、

「はい、残念。ぜんぜんその気ないのは、アンタに對してだからだつての。だいたい、本気でそんなつもりぜんぜんないのはアンタのほうじゃない」

と言う。

あたかも、「サバサバして皮肉が効いている」ふうにだ。

それを聞いていたD子は、

「なんか、こなれていて、逆に淫猥？ ふたりとも、変態のにおいがする」

と言う。

何か、鋭いことを言う人、みたいな口調でだ。

Bくんは、

「え、おいおい、誰がヘンタイだよ」

と大きな声で言う。

C子は、

「あ、アタシ、逆にヘンタイ的なことには興味ある。あくまで他人事としてだけど」

と頬杖をついて言う。

これは何をやっているのか。

三人ともおおいに愉しんでいる。

彼らは自分の友人たちを愛し、彼らとの交歓を愛しているように思えるが、彼らがじつさいにやっているのは、それぞれの「本当のわたし」プレイだ。

三人とも、「真ん中」で酒を飲んでいるわけではなく、個々に空想したイメージ・プレイをしているのだが、三人それぞれのプレイするイメージが相互にそれなりに適合してしまうので、表面上は「気の合った」コミュニケーションをしているように見えてしまう。

Bくんはナゾの「腐れ縁」キャラをつづける。

C子はナゾの「サバサバ色女」キャラをつづける。

D子はナゾの「鋭いことを言う」キャラをつづける。

それらは三人の性格ということでさえない。

まるでそれぞれが、

「仮に自分が何かのアニメ作品に登場するとしたら」

ということの設定を練った、そういうキャラを演じているような状態なのだ。

この様式がいつのまにか、多くの人たちにおいて標準的なスタイルになってしまっている。

なってしまうといっても、別にそれが悪いというわけではない。ただおそらく、当人たちは、自分たちがそのようなことをしていると、いうことに気づいていないのではないかと思われる。

アニメやマンガの影響が強いのだらうし、テレビドラマやお笑い芸人などにも、そのアニメやマンガの影響は入り込んでいる。だからテレビドラマやお笑い芸人を經由しても、けっきょくアニメやマンガの影響は入り込む。

そういう時代だ。

そして、元になっているそのアニメやマンガというのも、いまやわざわざ「アニメの中でアニメキャラクターが演じられている」というような状態だ。

いくらアニメだからって、そんなアニメっぽいキャラクターはいないだろうというような、矛盾というか入れ子構造のようなキャラクターが出てくる。

旧来、たとえば「平凡な練馬区の、平凡な小学生」というモチーフを、藤子不二雄の視点で描き出し、いくらかデフォルメも加えたのが「のび太」というキャラクターだった。

それが現代では、「ありがちなアニメ世界の、ありがちなアニメ美少女」というのがモチーフになっていて、そこから新規キャラクターが醸成されるという勢いなのだ。

アニメのイメージがアニメ化されているということ。

入れ子構造になった「アニメのイメージ・プレイ」ということになるだろう。

そうしたイメージ・プレイが、感情を失って無味乾燥なものだと言っているのではない。

そうではなく、むしろ逆で、人の感情はそうしたものにこそ強く塗りこめられる。

感情に振り回されるというほどの、強い感情がそこには乗っかる。

Bくんにとっては、その「腐れ縁のおれたち」というプレイは、強い感情をこめてのものなのだ。

だから声も大きくなる。

そもそも強い感情・情動がないのであれば、そんなプレイをしようと思わない。

C子にとって、その「サバサバ色女」のプレイは、強い情動が伴うものだ。

D子のする、「鋭いことを言う」キャラのプレイも、多大な感情がこめられている。

そうしてこめられた感情、伴う情動も含めて、彼らは相互に、友人とその交歓を「愛している」と認識する。

彼らにとって、それは事実「アツい」のだ。

「おれたちって、なんだかんだ言って、割と関係として、アツいと思わん？」

「えー、何それキモい。キモいけど、わかる。わかるだけにキモい笑」

「意外に、古風な物言いをするんですね。言わんとすることはわかります」

彼らがウソ偽りなく、アツく、楽しい、ということはよくよくわかっている。そのことに水を注すつもりはない。

ただ、自己愛というのはそうしてアツく楽しいものなのだ。

誰がそんなややこしいところまで自己愛というものを知っているように。

それは疑いなくアツくて楽しいのだが、そのアツさは自分の真ん中を吹き抜けているものではない。

そしてその楽しいというのは、そんなに長時間摂取していられる貴重な感情というわけでもないのだ。

三人はお互いに、それぞれのキャラを、それぞれの個性だと思っている。

だがそれはキャラであって個性ではない。

ほとんどの場合、われわれはこの三人に見られるような情景の真相を、けっきょく知らないままで生きていく。

最後の最後まで真相は知らないままだ。死ぬ間際に何かに気づくなんてこともじつさいにはない。

それでも、矛盾するようだが、友人は友人なのだから、大切にしろ、愛

せ、とおれは言いたい。

それが田舎じみて、それぞれが自分の益に利用することしか考えなくなったら、それはもう引き払ったほうがよいのかもしれないが、そうではない限り、情熱なんて馬鹿げたものを信じられる気がしているかぎり、それでも友人は友人なのだと大切にしろ。

砕け散るまでは愛せ。

その後、BとCは結婚するかもしれないし、Dは脱力系のインフルエンサーとしてYoutubeチャンネルに登録者を集め、人気者になるかもしれない。

それでも三人は、けっきょく自己愛しか持つことはできず、そうして自分が自己愛しか持っていないということに、気がつかないまま生きていくことになる。

そういうものなのだ、

すべてについて、けっきょく自己愛しか持っていないくて、本当には何かを愛するということには至っていない。

それでふと、いつからのことか、

「何を愛してきましたか」

と訊かれると、

「どうなんだろうね」

という、不気味な言い方が自分から出るようになる。

(えっ、何、いまの言い方？ われながらヘンな言い方で、聞き慣れない声だった)

真ん中が空っぽのままなのだ。

真ん中が空っぽという実態、そのことからの影響を、いつまでもゼロにしたまま生きていくことはできない。

何かしらが忍び寄ってきてしまう。

真ん中が空っぽだぞ、と。

そうして忍び寄ってきたものについて、三人は三人とも、それが何なのかを検知することはできない。

漠然とした不安が多くなったり、きゅうに怒りっぽくなったり、やたら正体不明のさびしさに押し潰されることが増えたり、そうしたことのすべてをとにかく「人のせい」「誰かのせい」にしたりと、色んなことが起こる。

何が起こっているのかは当人たちにはわからない。

十二万円のジャケットを愛していたか。

おしゃれなエリアで、おしゃれな建物に入り、おしゃれな店を覗くことを愛していたか。

「あなたそういうこと好きだったじゃない」

そうしたことが、きゅうに「もう好きじゃない」と思えるときもやってくる。

「海外旅行とかは？ あなた好きだったじゃない」

「もう好きじゃない」

そうなっていたときは、半分がた、心療内科にお世話になって投薬治療をするということになっておかしくない。

そのことが悪いというわけではないし、そのことをそこまで恐れる必要はない。

いわゆる精神運動抑制だ。

そのときは当人としてはひどくキツイが、そのときのそれは、もうそういう病気なのだからしょうがない。

病気になればキツイのは病気全般に言える当たり前のことで、病気が緩解すればその悪夢は去るのだから、と割り切って考えておくしかない。ただ本当に、自分の真ん中が空っぽということがあって、そのことは長い時間をかけて、やはりあなたをおびやかすのだ。

このことに、早いうちから立ち向かえている人は、苦勞しながらも、

本質的にはラッキーだということになる。

たいていの場合は、わけのわからないままそれは迫ってきて、わけのわからないまま打ち倒され、わけのわからないまま耐えなくてはならないということになるから。

Eさんが、自分の「真ん中」を得ていて、友人と真ん中から「おう」と通じているのを見たとき、BCDそれぞれの世界は、空間ごと「ぐわあん」と歪む。

そして、きゅうに眠くなったり、きゅうに何かについて毒づいたり、きゅうに目の前にあるメニューの隅っこを読み始めたりというような、奇妙な行動をしだす。

そのあたりのことは、もう今回は詳しく書き出さなくていいだろう。

BCDの本人らは、自分に何が起こっているのかわからない。わかりようがない。

Bくんは「腐れ縁」の仲間に向けて、大きな声を出して呼びかけた。

「おれたちはさあ」

その声が、自分の声じゃない、ニセモノの作り物の声だ、と聞こえる。

C子は、スマートホンの自撮り画面で、化粧の手直しをした。

そこに映る顔が、自分の顔ではない、失敗した作り物の顔だ、と見える。

D子がごによごによ、何か「ふしぎちゃん」のようなことを言った。

その吐き出した語彙が、自分のことばではない、安物の作り物の語彙だ、と考える。

何が起こっているのか。

単純なことだ。

BCDに、自覚はないが、BCDはやはり自分の「真ん中」に焦がれているのだ。

自分に「真ん中」があり、その真ん中からの声、姿、ことばが現れると

いうことに焦がれている。

キャラぶってイメージに沿って情動を伴わせて、そのことが本当に真ん中からアツくて楽しいわけではない。

世の中は、いつからこんなに極端に、イメージ先行のものになってしまったのだろうか。

父親が父親のイメージをやり、幼児が子供のイメージをやり、教師が教師のイメージをやっている、というような実態が現実にある。

表面上は、何か「ちゃんとした世界」「ちゃんとしたやりとり」が成り立っているように見えるだけに紛らわしい。

もちろんふざけてそうしているのではないし、やっている人のほとんどは善意に満ちて真剣だ。

ふざけているといえ、おれのほうが万事においてふざけているだろう。

このようにして、自己愛という現象は存在しており、自己愛がキツくなってきた現在、空想からのイメージが先行し、何であればむしろそのイメージがなぞられていることに称賛さえ向けられるというのが、われわれの文化空間になってきた。

おれの文章は、真ん中が文学だが、イメージとしては書きなぐっているに近いです、いまほとんどの人には文学としては受け取られない。

けれども、もしあなたがおれのように、言いたい放題の文章を書いてみようとする、そのとたん、あなたは白紙の前で空間ごと自分が「ぐわあん」と歪むのを体験するだろう。

そこで、どれでもいいが、世の中にあるイメージどおりの「文学」を手にとってみる。

それを読んでみると、とたんにあなたの「ぐわあん」は止まる。

テレビをつけてワイドショーを観れば十五秒で「ぐわあん」は止まる。

空間はスツと、もとの歪みのない、四角四面のものに戻る。

人は、まったく自覚をもたないまま、本当は自分の「真ん中」に焦がれているのだ。

それに比べると、自己愛営業所などというものは、しよせん真ん中が得られないことへの代償に存在し、活発化しているにすぎない。

「よくわからない」のままが幼児、 脳みそをしぼりつくしたのが大人 だ

自己愛、というのは、いかにも幼児性とつながっている、という印象を受ける。

自己愛と聞いて、大人のそれだとか、成熟した者のそれだとかいう印象はさすがに受けない。

そのとおり、自己愛というのは幼児期に発生し、その後克服されなければそのままずっとわれわれの体内に居座りつづけるものだ。

このことは、いかにも先日のテーマ「ナルシズム」と重なってくるので、本稿ではあまり細かに取り上げない。

当たり前というていどに触れておくに留めよう。

先に述べたとおり、中学のときに「一次関数」というようなことを教わり、そのとき「よくわからない」と感じた者は、それから何十年か経って、「いまははつきりわかるようになった」ということになるわけではない。

加齢していくと、われわれの感性や氣勢は老けていくが、それは成長するということではないし、成熟するということでもないし、発達する

ということでもない。

第二次成長期がくれば、男性は声変わりし、女性は一瞬が膨らんでくるが、そうした生理的発達のようには、人の「真ん中」は発達しない。

あくまで自分が向き合って乗り越えてきたぶんしか発達はしない。

先日のナルシズムというテーマでは、その意味で人はいつまでも六歳児でありつづけると述べたのだった。

十二万円のジャケットを試着し、

「あつ、本当のオレ、かも」

と思うようなこと。

このことは、どうにも大人の精神の覚えるようなことではない。

まるで、幼児がおもちゃの「仮面ライダーベルト」を装着することと変わらないではないか。

見栄えがして、文化的で、豊かで、オープンで、厭味のない、本当のわたし。

それだってまるですぐに打ち切られる子供むけの少女マンガみたいだ。

大人がフェラリを見て興奮してはいけないということではないし、大人が高級ホテルに行くのに装いを整えてはいけないということではない。

大人は本来、「本当のわたし」なんて探していないのだ。

むしろ、一定ていどは「本当のわたし」に至れた者だけを本来は大人と呼ぶべきだろう。

子供も読むようなマンガ・アニメと一緒に読んで読み耽り、

「この中の登場人物だと、わたし○○にいちばん近いのよね」

「あ、それってわかるかも。おれの場合は、△△に近いんだよ」

こんなことを言い合っている者を、本来は大人とは呼べないのだ。

マンガは悪くないし、アニメもそれじたいは何も悪くないとしても、そこに本当の自分を探すのはやめろ。

推し活なんて言いようも馬鹿げているが、趣味としてアイドルを追いかけるのは、しょせん個人の趣味嗜好かもしれない、けれども推し活をしている自分に「本当のオレ」みたいなことを見つけようとするのはやめろ。

本当のあなたは、探さなくてもそこにある。

本当のあなたはたぶん、「真ん中が空っぽ」だ。

そして、ここからが大事だと思うが、多くの場合はこれまでどこかで「よくわからない」ものに触れてきて、それを「よくわからない」のまま放置してきたのが本当のあなただ。

放置してきたというのはきつと、本当にどうしたらいいかわからなかったからだろう。

あえて、子供に向けるような言い方としておれは申し上げるが、人が大人になるということは、自分の頭でさんざん「考える」ということの結果として得られることなのだ。

脳みそをしぼりつくしてしか、人は大人になれない。

覚えごとや、つまみ食いの理解で大人になれるわけがない。

「なるほどね」をつまみ食いしていたら何年経っても子供のままだ。

「よくわからない」ものに、これまで出会ってきたか、そうでなくてもすれ違ったり、かすってきたりはしてきたわけで、それについて真ん中から向き合うというのは、とても怖いことだ。

そして、そうした真ん中のことが「怖い」というのは、やはり子供の言い分だろう。

おれはあなたに、自分が子供であることを恥じろと言っているのではない。

怖いものは怖いのだ。

それでも、自分でその怖いものに向き合い、真ん中で何かを確かめて進んできた人が大人なのだ。

イメージを転々としているうちに三十年が経ちましたというだけの人が、それだけで大人になるわけがないだろう。

あなたは若いころ、経済新聞に何が書かれているのかわからず、いまになってもやはり、何が書かれてあるのかは「よくわからない」ままだ。

あの映画の何がよかったのか、それが「すぐよかった」ということには確信があるが、「何がよかった」のかと言われると、根っこのところでは「よくわからない」ままだ。

歌曲で唄われていること、詩文に詠まれていること、それらのすべても、「何かスゴい」と思ったきり、いまになっても「よくわからない」ままだ。

食塩を水に入れたら電離する、イオンになるといって、それがどういうことなのかはやはりいまも「よくわからない」ままだ。

内閣、ということばを、週に一度はニュースで聞くけれど、「内閣って何」と訊かれると、じつは「よくわからない」ままだ。

この名画の何がいいのか、この名演は何をどうやっているのか、われわれは「わかったふう」になり、ニセモノの文化人を気取って頷くけれど、本当にはすべて「よくわからない」ままだ。

そんな何もかもを「よくわからない」でいる者を大人とは言わない。もちろん何もかもをわかりつくすということは、凡人のわれわれには不可能なことだ。

けれども、やはり何か本質的なこと、根幹のことを、いいかげんわかっていなければ大人ではない。

根幹のことを、自分の真ん中でわかるようになって、むしろそのことによって人は大人になるのだ。

オタクのように詳しくなっても大人にはならない。

電車の種類がわかるようになるというのは、趣味のことであって、それで自己愛がアがるタイプの人もいるらしいが、それによって人が大人

になれるわけではない。

もしおれが子供のまま、大人になっていなかったとしたら、こうして書き話すにしても、何をどう書き話せばいいのか・何が文学なのかを本当は「よくわからない」まま、書き話そうとしていたはずだ。

それで言うと、少なくとも、おれは何をどう書き話せばいいかということ、書かれる・読まれるということについては本当にわかるようになったのだ。

そしてむしろ、おれは選択的にそのことを本当にわかっていて、そのことによって大人になっていった。

そうして、大人にしかできないこと、大人にしかわからないことに、真ん中から向かうという、子供にとっては怖いことに進んでいくことでしか、人は大人になれないのだ。

寝転んで世の中の悪口をつぶやいていたら、老けていくだけであって、大人になっていくわけではない。

受験や部活や恋愛や結婚等、イメージをなぞっていても大人になんかならない。

あなたの父親と母親は、また学校の教師は、本当にみんながじゅうぶんな大人だったか？

^^あなたの目撃してきた、じゅうぶんでない大人たちは皆、根幹のことを「よくわからない」まま生きている人たちだったはずだVV。

善し悪しの問題でなく、「真ん中」を閉ざしたままイメージで生きていると誰だってそうなるということ、これはただの事実だ。

幼児性ということにも、このようにしていちおうは触れておく。

あえてこのように申し上げよう、

「いかにも『わかっている人』のあなたへ」

あなたは、「わかっている人」というイメージをなぞっているし、周囲にもあるていどそのように思わせることに成功しているけれど、本当は

万事が「よくわからない」のまま生きているのではないですか。

そんなあなたは、本当にわかっている人と同じ場所に置かれ、横並びに実力を問われるのを、根こそぎ恐れて厭がっているでしょう。

もし気づいていなかったとしたら、あなたがなるべく苦しまなくて済むように申し上げます。あなたが激しく感情的になり、ときに内心で激怒したりを繰り返すのは、本当には「よくわからない」のまま「よくわかっていない人」のところへ立たされるからなのです。あなたは本当は「わかっていない人」。あなたはその恥が衆目に暴かれることをとても恐れて厭がっているのです。

現実逃避、「永遠のゲスト」

ディエゴ・マラドーナは偉大なサッカー選手だった。

さまざまに、素行に問題はある人らしかったが、わたしは詳しくは知らない。

そもそもわたしはサッカーにまったく詳しくない。

それでも、ディエゴが、飛んできたサッカーボールをトラップする、そしてドリブルして敵陣を駆け抜けていくというときには、一種の神秘のような趣さがあると、わたしでもわかった。

サッカーに詳しい人はいくらでもいるだろうし、サッカーをやっている人もたくさんいるだろう。

わたしはサッカーについては完全に門外漢だが、わたしがいましている話はサッカーの話ではなく「真ん中」の話だ。

「真ん中」にサッカーが入っている人といえば、わたしはディエゴ・マラドーナのことが思い浮かぶ。

あんなにまで物事を真ん中にまで受け入れられる人はめったにいない。体内の、心臓よりも真ん中に、サッカーが入っている、というふうに見える。

それでは、いくらコカインをキメたとしても、サッカー以上の歓喜は得られなかっただろう。

真ん中の真ん中にサッカーが入ると、人はサッカーと同一化するのだ。

仮にわたしがサッカー選手にあこがれて、いまからサッカーの練習をしたとしても、それはわたしの「真ん中」にまでは至らないだろう。

単純に言って、わたしはそこまでのことをせず「サボる」はずだ。

何をサボるかといって、練習をサボるのではなく、「真ん中」をサボる。

どれだけ時間・労力を割いて猛練習したとしても、「真ん中」を譲り渡すかどうかは別のことだ。

わたしは、自分がサッカーの名選手になり、大活躍しているようなところを空想するかもしれないが、またその空想をモチベーションにして練習をつづけるかもしれないが、それはあくまで空想だ。

真ん中のことではないし、真ん中は空っぽのままだ。

空想にもとづいて練習しても、それは本当のものにはならない。

そのことは、先のダーツの例で述べたとおりだ。

「真ん中」でない空想を追いかけるといことは、じつは本質的に「現実逃避」を意味している。

わたしがサッカーの練習をして、サッカーの名選手を空想するというのは、思いがけず「現実逃避」なのだ。

ディエゴがサッカーボールをリフティングしているのは現実逃避ではない。

少年のころから、彼のそれは現実逃避ではなかっただろう。

そこにいた少年はリフティングに「真ん中」を譲り渡していたはずだ。

真ん中との合一と、真ん中からの乖離を考えねばならない。

Ｑを空想し、Ｑに焦がれ、Ｑに向けて努力しているという場合、それはじつは「現実逃避」をしているのだ。

真ん中から乖離して、空想上のＱを追いかけているので、現実逃避だ。

自己愛は常にこうした現実逃避を駆動させると思っている。

Aくんが、コンビニエンスストアでレジ打ちのアルバイトをしているとき、Aくんは安月給で見栄えしないその労働をしている最中の自分を、

「仮のオレ」と捉えている。

仮のオレと言っても、じっさいにそこでレジ打ちをして働いているのだが、自己愛のはたらきが彼を支配しているので、彼にとって「本当のオレ」は、もっと別のところにいる。

じっさいAくんは、高校のときにサッカー部にいて、そこそこ活躍していたかもしれない、空想の中で、

「こうやってピッチ上を駆け抜けている、そして歓声を受けている、そういうのが本当のオレなんだよなあ」

と空想しているかもしれない。

様子が、変わる。

空想だが、それが彼にとつては「本当のオレ」だ。

彼は自分の「真ん中」を、コンビニのレジ打ちには譲り渡さない。

だから、そこで何かを「本当に」学ぶとか、何かを「本当に」モノにするということは起こらない。

自宅の庭でサッカーボールをリフティングしていても、彼は自宅の庭でリフティングするというような見栄えのしないものに真ん中を譲り渡すわけではないので、そこで「本当に」リフティングをモノにするということは起こらない。

彼はずっと現実逃避だけをつづけていることになる。

彼にとつて「本当のオレ」は、観客の詰めかけた満席のスタジアムにいるのであり、自宅の庭などにはいないのだ。

この問題は、コンピュータ用語を借りてきて説明することができる。

このときのAくんは、「ゲスト」として「サッカー」に「ログイン」している表現できる。

何かにログインするということは、現代のわれわれにとって日常なことだからわかりやすいだろう。

通信上で何かにログインするとき、必ず、通信の向こう側に「ホ

スト」のコンピュータがあるのだ。

あなたの側のPCや、あなたの側のスマートフォンなどの端末が「ゲスト」となつて、向こう側の「ホスト」コンピュータにアクセスしている。

そのことはあなたにとって日常的事実なのはずだ。

一方、あなたの側がログイン「された」という経験はないはず。

あなたの自宅PCが、外部の誰かからログイン「された」ということはこれまでにないはずだ。

なぜならあなたは自宅のPCをサーバーにするよう設定はしていないからだ。

サーバー設定していないのに「アクセス」「ログイン」されたら、それはいわゆるハッキングだ。

インターネットというと、現代では日常的事実なものになっているのに、その仕組みはよくわからないままになっているのだが、「サーバー」というのはふつうのPCのことではなく、不明のピコピコ光るスーパーコンピュータが秘密基地に設置されているわけではない。

あなたの自宅PCと別に変わらないし、何ならあなたの所有するノートPCだって「サーバー」にすることはできるのだ。

外部からのアクセスが常になん千とか何万とかあるという場合、自宅の設備では脆弱すぎ、PCもルーターもパンクしてしまうと思うが、たまに誰かが覗きにくるというだけなら、自宅PCをサーバーにするということはそんなにむづかしくもなく出来る（じっさいにやっている人はいくらでもいる）。

自分の側が「ホスト」になり、自分の側が「ログインされる」ということは可能なのだ。

そして、わかりやすさのために「ログイン」という語を入れているが、何もログインまでしなくてもホスト・ゲストの関係は変わらない。

あなたが何でもないウェブサイトを開覧するときも、あなたは「サーバーにアクセスする」ということをしている。

向こう側に、やはりホストコンピュータがあり、あなたの側の端末がゲストとなって、「アクセス」しているのだ。

このことはどうにも、ホスト側をやったことがない人にとっては、感覚的に掴みづらい。

たとえばおれが運営しているウェブサイトをおあなたが閲覧するという場合、あなたは、おれが業者からレンタルしているサーバーPCにアクセスして、そのサーバーPCにおいてあるファイルを閲覧しているということになるのだ。

そのとき、あなたの側のPCやスマートフォンが「ゲスト」としてアクセスしているのだということなのだが、このことがどうしても感覚的に掴みづらい。

たとえるなら、おれが業者から借りている「別荘」があったとして、その別荘のデスクに、おれの書いた冊子が置いてあるだけ、という状態だ。

別に鍵もかかっていないので、誰でも勝手に来て勝手に入り、勝手に読んでいい。

あなたはそうやっておれのウェブ上の書き物を読むのだ。

そのとき、あなたがゲスト側で、おれがホスト側だ。

Aくんの場合はどうか。

Aくんはサッカーが好きで、しょっちゅうサッカーにアクセスし、リフティングの練習をしている。

Aくんは、コンビニでレジ打ちをする仕事が好きではないが、仕事なのでしょうがなく、コンビニにアクセスし、レジ打ちの練習をしている。

Aくんは、コンビニのレジ打ちで何かを掴むということはないし、じつは、リフティングの練習で何かを掴むということもない。

ゲストとしてアクセスしているにすぎないからだ。

Aくんは何かに対してホストではない。

Aくんはずっとアクセスしているが、自分の側がアクセスされるといことがない。

Aくんの自宅PCは空っぽのままだ。

Aくんは、自分の真ん中を空っぽにしたまま、すべてについて「永遠のゲスト」であろうとしている。

このことにAくんは気づかないのだ。

(これについては、人は本当にまっったく気づかない)

われわれは、最大の勇気を持つなら、ディエゴ・マラドーナに対して、「ディエゴ！」

と呼びかけることができる。

彼の真ん中に。

ディエゴにはアクセスできるのだ。

一方われわれは、

「Aくん！」

と言って呼びかけることはできない。

なぜかその呼びかけは、空疎で、空回りする感じがする。

なぜか。

Aくんにはアクセスできないからだ。

Aくんは自分を「永遠のゲスト」と設定しており、自分が何かのホストたりうるように設定はしていない。

だからいくら呼び掛けても、Access Denied という表示しか返ってこない。

じつさいウェブブラウザでそういう表示が出るのを一度ぐらいは見たことがあるのではなからうか。

ホスト設定がされていないので、呼びかけられないし、アクセスできないのだ。

Aくんに呼びかける場合、彼の自己愛に呼びかけるしかなく、そのとき「Aくん！」という呼びかけは、わざとらしく気持ち悪いものになる。

Aくんに、

「あなたの『やりたいこと』は何ですか」

と訊いてみる。

すると彼は次のように答える。

「世界中を旅したい、ひとりでのんびりと、海外旅行をしまくりたい」

「ヨーロッパで遺跡を見てまわり、オペラとかバレエとかを鑑賞したい」

「高級ホテルをはしごして、金持ちの世界が見てみたい」

「フランス料理をひととおり食べてみたい、あと本物の高級ワインを飲んでみたい」

「あの十二万円のジャケットが欲しい」

「ああいうおしゃれエリアに住みたい、ああいうところで朝目覚めたい」

「おしゃれな店の常連になりたい、あとフェラーリを乗り回したい」

「癒し系の美女と付き合って、ここを豊かにして暮らしたい」

「景色のいい、海辺や高台のひっそりとした一軒家に住んで、自然と調和するスローライフがしたい」

彼が隠し持っているそうした願望は、聞いているとまるで活発な夢のように聞こえるけれど、そうではない。

彼はすべてのことについて「永遠のゲストでありたい」と告白しているだけだ。

ホスト側に、無尽の豊かさがあるという前提があり、またそれが無制限に供給されるという前提にもなっていて、自分はそれをひたすらゲストとして闊歩し、吸収していく、それによってさらに肥え太っていくというのが、彼の包み隠さぬ「やりたいこと」だ。

彼にはそういう発想しかできないのだ。

よくよく見ると、^^彼の空想において、彼は何一つ「やっている」と

は言えず、他人と環境にすべてをやってもらおうつもりでしかないV.V.の、彼はそのことにまったく気がつかず、それを堂々と自分の「やりたいこと」と言うのだ。

彼は、〇〇大学を卒業し、△△株式会社に勤めることになったが、彼は〇〇大学に対してゲストでしかなかったし、△△株式会社に対してもゲストとしてしか働くつもりしかない。

さまざまなサークル活動や、習い事などにも首を突っ込むが、初めのうちだけ、

「すごくいいと思った」

という調子になるものの、それが数週間もすると、

「うーん、なんか思っていたのと違うんだよね」

と言い出して退会する。

そして次のアテを探す。

彼は、自分が「ゲストみ」を味わっているときだけがこちよく、その新鮮なゲストみが失われると「しつくりこない」と言い出して、よそのアテを探すのだ。

異性と交際するときも、けっきょく相手のことを自分が個人所有できるホステスとしか思っていない。

(ホステスはホストの女性形だ)

ここで彼に、次のように訊いてみるとどうなるか。

「そうした、自分がゲスト側になつての『やりたいこと』ではなくて、自分がホスト側になつての『やりたいこと』は何でしょうか」

そのように問いかけると、彼はまず、

「はーん、そうねえ」

と言う。

斜め上を高く見上げる。

様子が、変わる。

「おれってさあ。じつは子供のころから、ケーキ職人にあこがれがあるんだよね。知らなかったでしょ？」

このとき彼は、奇妙なしゃべり方をする。

奇妙なしゃべり方と、ナゾのわざとらしい微笑みを見せる。

何のしゃべり方か？ それは、まるで新宿ホストクラブのホスト業のしゃべり方だ。

「ホストっぽさ」というのはじつはこのように出現している。

彼は、自分の真ん中が空っぽで、アクセスされては困るため、自分を永遠のゲストに設定しているのだが、それでも無理に真ん中にアクセスされるなら、作り物でも何でもしようがない、無理やりなレスポンスを返さなくてはならない。

そこで出てくるのが、なぜか普遍的に「ホストっぽい」しゃべり方なのだ。

女性の場合でも同じ、なぜか普遍的に「ホステスっぽい」しゃべり方が出てくる。

Aくんはすべてについて永遠のゲストであり、つまり自分の「真ん中」についてずっと現実逃避をつづけている。

そんな彼がふとキャバクラに行くと、そこにいるホステスの誰かが、自分の「真ん中」から逃げずに頑張っている、というふうに見えるのだ。

それで彼は、ホステスの彼女に貢ごうとする。

一方、そのホステスの彼女は、やはりホストクラブに行くと、ホスト業の誰かが自分の「真ん中」から逃げずに頑張っているというふうに見えるので、彼に貢ごうとする。

理由はどうあれ、人は、何にもつながっていない「真ん中」にアクセスされると、レスポンスがホスト業あるいはホステス業になるのだ。

(いちおう理由を説明しておきます。人は「真ん中」を何かに接続できていない場合、デフォルトで「真ん中」は「性的なもの」になっているの

です。よって人の真ん中からのレスポンスは、デフォルトでは性的なホスト・ホステスにしかないということですよ)

(ディエゴ・マラドーナは、「真ん中」がサッカーにつながり、セクシャルティよりもさらに奥までの「真ん中」がサッカーに譲り渡されたので、ホストとしてアクセスされた場合のレスポンスが性的な新宿ホスト業のそれではなくサッカー選手のそれになるということです)

ともあれ、自己愛というのは、そのようにして構造的現実逃避をもたらし、人を「永遠のゲスト」という症状に至らしめていく。

何かを勉強しようとしても、その学問に対するゲストにしかならず、何かを習得しようとしても、その技術に対するゲストにしかならず、何かを創作しようとしても、その芸術に対するゲストにしかならない。

それでは何かがモノになるわけがない。

仕事に対してもゲストにしかならず、友人に対してさえもゲストにしかならない。

それでは何かがモノになるわけがなく、このことは能力の問題ではない。

「真ん中」の問題だ。

人はそこまでして、自分の「真ん中」が空っぽだということをひた隠しにしようとする。

女性の多くは、若いうち、自分の真ん中が空っぽだということにおびやかされ、その不安の中で唐突に、自分がホステス業、性風俗嬢、アイドル業、その他もろもろ、とにかく性的職業に身をやつすということを空想し、その中に「イケている」「本当のわたし」を期待するということがあるはずだ。

人は自己愛によって、「本当のわたし」を空想しながら生きているが、それが空想でしかないということに『追い詰められる』と、唐突にホスト業・ホステス業のわたしというものを露出させる。

どのようなとき、人はその〇が空想でしかないということに『追い詰められる』のだろうか。

それはアクセスされたときだ。

「やってみて、どうぞ」

と言われたときだ。

ホスト側のステージに立たされたときだ。

のつびきならない。

おれの場合で言う、「さあ小説を書いて」「書き話をして」「芸術を展示して」とリクエストされたときだ。

想像力の爆発、その仕掛け、異化と明視、あたらしい世界のモデルとイグジスタンス？

「はあ、では、その実作・実演・実物をいまここにどうぞ」

と言われたときだ。

「あそこのふたり、退屈していてかわいそうだから、お前ちょっと行って、盛り上げて笑わせてきてくれよ」

と言われたときだ。

それを、

「あいよ」

と引き受けられるのかどうか。

ホスト側に立たされ、ゲスト側にリクエストされたとき、これまで空想していた〇はまったく機能しようもなく、何の役にも立たないということに気づかされる。

目の前に原稿用紙とペンが置かれ、

「ほれ」

と言われると、現実逃避のしようがない。

そういうとき、おれはどうしたらいいか。

様子が変わり、唐突に髪をかきあげ、

「つてゆうかさ、ハッ、そういうことじゃなくってさあ」

おれはきゆうにホスト業みたいなしゃべり方をすればいいのか。

馬鹿げている。

ディエゴにサッカーボールを投げたら、ディエゴはそのときになってきゆうにオタオタするのか。

するわけがない。

幸せそうにボールをトラップするに決まっている。

真ん中の真ん中にまでそれが入っているので、そのトラップは0リソースで、0デシベルだ。

いきなり新宿ホスト業みたいなしゃべり方をしだす必要はどこにもない。

自己愛者は、ずっと「本当のオレ〇」「本当のわたし〇」を空想しているのだが、なぜそんな現実逃避が許されているかというと、自己愛者はホスト側に立つことを永遠に避けつづけているからだ。

永遠に、ホスト側には立たないと決めているので、けっきょく自分が本当には「問われる」ことがない、と思っている。

だから「本当のわたし〇」をずっと空想していられる。

このとき当人は、自分が自分をそうした「永遠のゲスト」に設定しているという自覚がまったくない。

このことに限っては、本当に、自覚はまったくのゼロだ。

ホスト側が「ありうる」ということじたい、彼にとっては破滅的な恐怖で、だからこそそれを概念ごと閉ざすしかない、ということなのかもしれない。

自己愛者は、「永遠のゲスト」という状態なら、いちおう安定しているが、その代わり、何一つ本当に「モノにする」ということは得られない。

何かをモノにするということは、その何かに真ん中を譲り渡すという

ことだし、そうして真ん中をオープンにすることとは、それじたいがホスト側に立つということだからだ。

^^何かをモノにするということは、ホスト側に立つてでしか得られないVV。

自分の側を、ホスト側、サーバー側にするというのは、単に設定の問題だから、設定を変更すればそのようにできる。少々、性能を向上しないとパンクしてしまうかもしれないけれども、この本質は性能にあるのではなく設定にある。

令和回路は真ん中への配線がない

現代の若い女の子は、みんな異様というほどにきれいだ。

髪がつつやで、肌が整っていて、化粧が上手で、おしゃれも上手だ。

しぐさもかわいくて、スタイルもいいから、何かしらのトレーニングもしているのかもしれない。

いわゆる「努力」というのをされていて、そのようにきれいになっているのだと思うが、おれは、若い女の子がそこまできれいである必要はない、と、ジジイみたいなことを思う。

現代の若い女の子が異様にきれいなのは、「イメージ」を実現するというところに、旧来とは違うド根性を向けているからだ。

旧来、たとえば昭和のころのアイドルタレントなどは、現代の女の子に比べれば、そこまで露骨に「かわいく」はなかった。

それは、昭和のころには、人々はそこまで「イメージ」を要求していなかったし、そこまで「イメージ」を摂取もしていなかったからだ。

アイドルタレントというのは、どこまでもイメージの産物だとは思いますが、それでも当時は、そこまでイメージ「ばかり」を要求するのではなかったし、そこまでイメージ「ばかり」を摂取するのでもなく、ただ「○○ちゃん」というような誰かを見ようという呑気なことをしていたのだ

と思う。

あくまで、アイドルの「○○ちゃん」に、アイドルらしいイメージが添えられていて、清楚だとか健康的だとか、妖艶だとかミステリアスだとかを、言っていたのだろう。

現代は違う。

現代は、たとえば対象が中高生でも第一に、

「かわいい」

「エロい」

ということを見る。

彼女らの側もまたそれを第一にアピールする。

第一のこととしてそれを見、それが「誰」か、などということは見ない。

Tik-Tok で制服姿のダンスを踊っている女子高生がいて、かわいい、エロい、おっぱいデカイ、ということが言われるだけで、^^それが「誰」ということに触れる発想はないまま、そのままブラウザは閉じられるVV、あるいはファボが押される。

「誰」ではなく「かわいい、エロい」なのだ。

精神の構造・回路が変わった。

じつさい現代では高校生の男子が、同じ学校の女子を指して、

「あいつマジかわいくね？」

「わかる。かわいいし、なんかエロい」

みたいなことを平気で言うところがある。

かわいい、エロい、ということが第一であって、誰、ということではない。

かわいい、エロい、ということが、まず鋭く、強くあり、そのあとに何かがあるかという、その後にはもう何もないのだ。

かわいい、エロいということ、その他はせいぜい、「シチュ」が足され

ると「エモい」ということになるだろう。

それらのすべてを総じて「ヤバイ」「ヤバくね」と言っている。

「かわいいわ、エロいわ。昨日のシチュとか、マジでエモくて、好きになった」

たぶんそれ以上のことは「よくわからない」でいるのだ。

「誰」ということがない。

じっさい、この令和の恋心を語っている高校生男子についても、話を聞いていて、彼自身に「誰」という印象も覚ええない。

「誰」も存在しておらず、イメージだけが力感をもって作用している。

このことは、旧時代とはまったく違う。

たとえば、おれが中学のとき、飛びぬけてモテていた女子生徒のひとりにはNさんという人だったが、Nさんがモテていた理由は、複数の女子生徒が言うところ、

「Nさん、やさしいもんね」

ということだった。

じっさいそのとおりだった。

おれはいちど、Nさんと隣の席になったことがあるが、おれはNさんについて、

「うわ」

と思ったのだった。

何が「うわ」というと、Nさんは、人懐こくて、距離が近くて、こちらの話をすぐく聞いてくれるのだ。

その人懐こさと、無防備さと明るさ、こころを寄せてきてくれるやさしさに、おれはおどろいたし、それ以上に、おれはそんな勇敢でやさしい女性に対し、

「まともに真ん中から応じられない」

ということに直面させられ、その情けない自分について「うわ」と思

ったのだ。

自分がしどろもどろになって内部的にモゾモゾするだけという、ぶざまさと醜さに気づき、われながらウソ偽りない「うわ」が出た。

(完敗です)

Nさんは美人でもあったが、人々の評価は「Nさん、やさしいもんね」だった。たしかにそのあとに「美人だし」というのもついたかもしれない。

あのコ美人だからモテるよね、というような、Nさんを悲しませるような言い方は誰もしなかったし、そんな言い方は誰も許さなかった。

そしておれは、たとえばNさんのバストのサイズがどのくらいだったかというようなことを覚えていない。

女子生徒のすべてに対して、誰のバストが大きいとか、誰の脚がエロいとか、そういうことを中学のときは——あの時代は——認識していなかった。

スケベ心はすべて、一人ひとりの女性(女子)、その「誰」かに向けられていて、体型やセックスイメージには向けられていなかった。当時のことだからもちろん化粧もしていない。

現代では、まずアニメキャラといえば乳が出ていて、アニメキャラといえばエロく、アニメキャラといえば脚や身体の線が強調されているのだから、少年少女らの精神構造は^^そうしたものをモデルにして^^形成されている。

エロいキャラが、「シチュ」にあいまって「エモい」というのが^^価値観のモデル^^だから、同級生に向ける視線だってその価値観の眼差しとして形成されている。

それで、時代が違う以上に、精神の構造、精神の回路が違うのだ。

もし当時、おれがNさんのことについて、

「あいつマジかわいくね? かわいいし、なんかエロい。よく見たらけ

っこう胸あるし」

とでも言おうものなら、学級の空気は一挙に変質し、正義感の強いYくんなどが詰め寄ってきて、

「お前、何キショイこと言ってるの？ しばくぞ」

とおれの襟首を締め上げてきただろう。

そこでおもふざけた態度をとると、Yくんはただちに、相手の腰骨に蹴りをぶちこむという癖があった。

突き飛ばすような蹴りで、突如それを食らうと、相手はけっこう吹っ飛ばされて、後ろにある机にガシャーンとぶつかってしまうのだった。

それについて当時の教師は、

「Y、脚はやめとけ、武器になるから」

と、なかなか微妙なことを言った。

じゃあ、腕で突き飛ばすのはいいのかよ、ということになるが、当時のことだから、じつさいそういうことだったのだろう。

時代が違うのだ。そりゃあ、何十年も前のことだから時代が違うのは当たり前だ。

ただ、時代が違うということによって、精神の構造、精神の回路までが違うということは、これまで明確に言及されてきていない。

精神の回路が違うのでは、もう文化が違うということになるし、ともすればイグジスタンスじたいが違うということにもなりかねない。

精神の回路が書き換えられる。

別の回路に書き換えられたら、電化製品でいえばそれはもう別の商品だ。

そうした時代の潮流にわれわれは抵抗してきただろうか。

その都度に、三日ぐらいいは抵抗してきただろう。

ここまで、このように話してきて、いよいよいいとかようやくというか、ついに「真ん中」のことへ話を進めていく準備が整ったように思

う。

本質におよび、われわれのこの「自己愛」の、トラブルの根幹はどこなのか、何が本当のトラブルなのか。

二〇二四年の大晦日、紅白歌合戦で、残念ながら会場への入場は寒々しく冷え切っていたところ、Bzのふたりがサプライズ出演し、彼らだけが会場を大爆発させたということがあった。

それが衝撃的なシーンで、令和の若い人たちも、そのことをきっかけにあたらしくBzのファンになったということが、けっこうな規模で起こったようだ。

それについて、古参の世代は、Bzのことをよく知っているので、

「さすが、やっぱりBzは『ホンモノ』だからね」

と、留飲を下げるようなところもあったようだ。

けれども本当にそうなのだろうか。

Bzのパフォーマンスが、その声とサウンドが、何かしら「真ん中」から発されて作用していることは明らかだ。

そしてそのことは、現代の、自己愛からのパフォーマンスとは根本的に性質を異にしている。

もしそうではないのであれば、令和の「実力派」と呼ばれる人たちは、Bzの楽曲を借りて、Bzのように演奏すればいいという単純なことになってしまう。

極端な例えだが、たとえば往年のディープ・パープルがBzの楽曲を借りて演奏すれば、テイストの変化はあるにしても、やはり何かしらの会場爆発をもたらすだろう。

けれども、現代でわれわれが「実力派」と呼んでいるところのものは、実力の有無以前に性質が異なるのだ。

平成最後の紅白歌合戦でも、最後に出演したサザンオールスターズだけがすべてをかつさっていつてしまうということが起こったが、令和

の「実力派」がその楽曲を借りて演奏したとしても、同じように「かつさらっていく」ということはできない。

実力の有無ではなく根本の性質が異なるゆえに。

古参の世代は、「彼らは『ホンモノ』だからね」と留飲を下げたのだが、それは果たして、古参の世代の人々が、いまもなおその『ホンモノ』の中にありつづけているということの意味しているだろうか。

留飲を下げた人たちにおいては、精神回路の書き換えは起こっていない、ということだろうか。

これだけ時代が変わった中、回路の「書き換え」などは断固として撥ね飛ばしてきただろうか。

いや、それ以前にそもそも、旧時代においてさえ、果たしてわれわれの全員がそうした『ホンモノ』の中に立つてこられたのだろうか。

そのことは、いつの時代だって、そんなに容易なことではなかったのではなからうか。

われわれが抱え込んでいるトラブルの真相、あるいはそのトラブルの核はここにある。

B♭のふたりが大晦日の舞台に飛び込んできたとして、彼らの声と姿は「真ん中」から発せられていようけれど、その声と姿は、本当にわれわれの「真ん中」へ流入しているだろうか？

仮にわれわれの側の回路がすでに書き換わっているとするとどうなる。旧来、向こうの真ん中からの出力は、われわれの真ん中への入力につながっていくのを主なる回路としていたはずだ。

しかし、いまはすでに回路が書き換えられているのだとしたら、彼らの「真ん中」からの声と姿は、われわれの真ん中「ではない」ところに流し込まれるということになる。

つまり、「ホンモノだよ」と言いつつ留飲を下げながら、じつは彼らの声と姿は自己愛営業所に届けられ、自己愛営業所に献上されてしまうで

はないかということ。

なぜあなたが自己愛を満たすの？ 見当違いのことをしていませんか。

仮にそんなことがあったとして、もちろん誰もそんなことを本意のつもりでやっているのではないし、望んでそのようにしているのではない。わたしがいま言及しているのは、人々の本意などについてではなく、精神の「回路」についてだ。

ちよつとフェアな表記ではないので気が引けるが、わかりやすさのため、書き換えられて現代に成り立った一般的な精神回路を、さしあたり「令和回路」と呼ぶことにしよう。

もちろん令和という元号の時代に限定されるものではない。あくまで便宜上、わかりやすさのためのネーミングだ。

B♭が令和六年末の紅白歌合戦で、他とは違うパフォーマンスと現象をもたらしたのは、彼らのその声とサウンドが、令和回路「ではない」ものから発されたということの意味していよう。

そもそも、その夜の紅白歌合戦が、B♭の登壇以前は残念ながら寒々しく冷え切っていたのは、やはりその「令和回路」がそうしたお祭り騒ぎ・魂のイベントを織り成すことは出来ないということの意味している。

一方、ではB♭やサザンが「平成回路」だったのかと、そういうことでもあるまい。ディープ・パープルが70's回路だったということでもない。彼らもそれぞれの時代ごとの回路はきつと有しているにせよ、彼らにおいてはそれよりも優先される主なる回路があるはずだ。

彼らの場合は、それはとうぜん「ロック回路」ということになる。ロックシンガーなのだから当たり前だ。

^^「ロック」が、彼らの「真ん中」まで通じ、彼らの真ん中からは「ロック」の声が出ているV。

それをとうぜんの「ロック回路」と呼ぶのなら、それを「令和回路」では再現できないというのは当たり前のことだ。

令和回路は、ただの時代のレセプターとなるための回路でしかなく、一方でロック回路は、ロックという「主題」のために形成されていた回路だ。

根本的な性質が違おうし、そもその設計理念じたいが異なる。

令和回路にはもともと、「主題」を「真ん中」に届けるというような配線はない。

いくら「実力派」で、たしかに一般のレベルではとても真似できない技術でいどを持っていたとしても、それが令和回路という基板で発揮される実力なのだとしたら、真ん中からのお祭り騒ぎ・魂へのイベントということには使用できない。

わたしがいま言っていることは単純で、またこれは、じつさいにわたしが目撃してきたものについてのレポートでもあり、さらには、いま現在もわたしが目撃しつづけているじつさいのことについてのレポートでもある。

さらにわかりやすく、かつ的確たりうる例え話として、わたしは次のように述べよう。

わたしは、わたしの真ん中を発電所とし、あなたの街に電力を送るのだ。

「中央」発電所から電力を送る。

あなたの街はどう輝くか。

あなたの真ん中は輝かない。

一瞬だけ、うっすらと、あなたの真ん中にも、明かりがともったように見える。

だがその光はすぐに闇に落ちた。

真ん中は消灯されたままになった。

なぜか。

真ん中への電力供給がシャットダウンされるからだ。

回路にヒューズかブレーカーのようなものが設置されていて、中央へ電力の流入がわずかでもあれば、ただちにブツンと、電力供給はシャットダウンされるようになっていくのだ。

なぜか。

自己愛が輝くためだ。

中央に電力を持っていけたら、周辺の自己愛営業所に回す電力が割を食う。

おれの中央電力は、あなたの中央には受け取られない。

あなたの中央には受け取られず、周辺への電力として消費される。

さまざまな自己愛営業所が輝くためのものとして使用される。

おれが百の中央電力を発すると、一瞬だけ、あなたの中央が一、ぼんやり光った。

けれどもただちにヒューズやブレーカーがはたらき、中央への供給はシャットダウンされる。

中央の電力はゼロになり、ふたたび暗闇になった。

代わりに周辺が百輝く。

おれの中央電力百は、あなたの周辺営業所百の輝きに消費される。

あなたの感情が昂り、あなたは「しっくりくる」と感じる。

おれの中央からの力は、あなたの自己愛営業所に献上されるのだ。

あなたがするようにしたいと望んでいるのではない。

あなたがそのように望んでいるのではなく、あなたがただそのように「する」のだ。

あなたにとって、真ん中に力を供給されることは「しっくりこない」と感じられる。ものすごい違和感がある、とばかり思える。

ただちにブレーカーが落ち、自己愛営業所に全電力が転送されると、そのことをあなたは「すぐくしっくりくる」と感じる。

ただしあなたは、おれのことについては逆だ。

おれがもし、中央からの発電をやめたら、あなたはただちにおれのことを「ニセモノだ」と言っただけで軽蔑するだろう。

おれについては、あくまで中央から発電・電力供給していないと、あなたとしてまるでおれのことを認める気にならない。

ここまでのことが、あなたにとっては「しつくりくる」のだ。

この、理想的・完璧に成り立っている街の輝きは、いつどのようなときに破綻してしまうだろうか。

それは、あなたが自身が発電・電力供給をしようとしたときだ。

あなたは、中央から発電していないものを、ただちに「ニセモノだ」と軽蔑する。

中央から発電・電力供給していないものについては、まるで認める気にならない。

そこで、あなたが自身が一念発起、みずからをもって発電・電力供給の主体にしようと、みずからに号令をかけ、そのトリガーを引いたとき、あなたは自分の出力について、「ニセモノだ」とただちに軽蔑を向けることになる。

大きなデシベルが鳴り響く。

爆発的で、とめどない。

全力の発電だ。

しかし、自己愛営業所が百の発電を行っている。

一方、あなたの真ん中は暗闇のまま、ウンともスンとも言わないでいる。

中央から発電していないこんなものを、あなたはまるで認める気にならない。

こうしてあなたは、自分の「全力」を、ただち深く軽蔑することになり、自分の「真剣」を、まるで認める気にならない、ということになる。

はじめのうちは混乱があり、自分の大デシベルで何もかも聞こえなく

なるから、逆に、自分は何かを出来ているというようにその最中は錯覚することもある。

あるいはそのように思い込もうとする。

けれども三日もすればその錯覚は消えてゆく。

記憶あるいは記録に残されているのは、「ニセモノだ」と軽蔑するよりない自分の実作だ。

あなたはたしかに「全力」でやった。

自分の「真ん中」から、ということは、プリミティブに、感覚的にわかっている。

だから「真ん中」から、「わたしそのもの」としてやった。

でもじつさいに出力されたのは、自己愛のデシベルが大爆発しているだけの代物だった。

ありえない。

耐えられない。

自分は初心者だから、へたくそなのはしょうがないけれど、それでも「それなりのわたし」、それなりの「本当のわたし」、「それなりの」が出力されるはず。

しかしじつさいに現れていたのは、ひどい自己愛のAだった。

独りよがり、感情に振り回されているだけの、本人としてはそのつもりというだけの、イメージに酔っているだけのA。

ニセモノにもほどがある。

あなたはもと、そうしたものを、最大に軽蔑していたのだった。

自分がもともと最大に軽蔑していた、その醜いものを、自分が「全力」でさらけ出すことになるなんて、とても耐えられないし、とても受容できないことだ。

これについて、令和回路の「実力派」たちはどう向き合うだろうか。令和回路の実力派たちは、このことについて馬鹿というわけではない。

彼らはむしろ鋭敏に、ここに示された構図を、みずからの歌にして唄いあげている。

その意味ではやはり彼らは最先端の人たちだと言ってよい。

つまり彼らは、

「真ん中が空っぽ」

「中央は暗闇」

「周辺の自己愛だけがギラギラ輝き、大デシベル」

「激しい感情に振り回される、死にそうなぐらい」

「真ん中が進んでいない、幼児のまま」

「その何がいけないの？ もうそれでいいじゃない」

「たぶんそれが『わたし』なんだよ、そしてお前もな」

「ただ、『かわいい』のはわたしのほうね、それだけは譲らない」

「ぜんぶ無理なんだよ、だから死ねよ、ざまあ」

そういう文脈で唄っている。

人は自分が本当に直面している文脈しか作品にはできないものだ。

われわれがいま直面している自己愛トラブルの核は、われわれの精神回路がおそらくすでに令和回路に書き換えられてしまっている、ということにある。

真ん中から真ん中へ届けられる、という配線じたいがもうない。

真ん中からの声とことばも、自己愛営業所に献上してしまう。

真ん中で受け取らなきゃ、ということは、理屈としても直感としてもわかつている。

けれども、即座にブレーカーが落ちる。

回路がシャットダウンされる。

とんでもない例え話をするが、鎌倉幕府の成立から江戸幕府の滅亡まで、天皇家はどこで何をしていたと思う。

鎌倉幕府、室町幕府、江戸幕府、ずっと幕府が日本を治めていた。

天皇家は何をしていたか。

天皇家は、七百年間、平安京に閉じ込められていた。

外部との接触は禁じられていた。

シャットダウンされていたのだ。

外部から何かを持ち込もうとしても、あるいは外部に向けて何か動きを起こそうとしても、六波羅探題が見張っていて、ただちにシャットアウトされた。

七百年間、天皇家・朝廷は閉ざされつづけ、表舞台には一ミリも交わらせてもらえなかった。

それでも天皇家は残されたのだから、日本の歴史はすごいものだと思うが、それはまた別の話。

あなたの「真ん中」も、何十年間にわたり、閉ざされて明かりのつかないままで。

閉ざされた中、天皇が立ち上がろうとすれば、そのことは幕府からだちに「謀反」とみなされただろう。

平安京という闇に七百年も閉じ込められていた天皇家は、明治維新によつてふたたび中央の存在に返り咲いたのだが、それだけ「維新」というのはとんでもない大騒動で、何もかもが作り変えられる大転換の瞬間だったということになる。

幕府と明治政府は社会構造の「回路」が違う。

幕府は封建制の武家政治で、明治政府は民主制の国民国家を目指すものだから、本当にまったく回路が違う。

あなたは自己愛幕府を倒幕するつもりはあるだろうか。

倒幕と言って、そもそものは、「あなた」が真ん中だったのではなかったか。

徳川家は、最後の最後まで、「日本イコール幕府」と思っていただろう。とつじよのこととして、王政復古の大号令が出されるその瞬間まで、

幕府以外の日本がありうるとは、徳川家は思ってもいなかった。

それでも、聞き慣れない太鼓は打ち鳴らされ、見慣れない旗は掲げられた。

あなたも同じだ。

いまのところ、自己愛以外の「わたし」がありうると思っていない。

何がどうやって始まるかといって、そんなもの、「真ん中」が詔勅（しやうちよく）を発するしかない。

詔勅、なぜそんなものが発されるかといって、そんなものが発されるのに外部的理由などない。

ただ、大御心におわす、としか言えない。

そのときがきて、それが発されるだけだ。

真ん中をぶち上げて出会うもの

自己愛は「あなた」じゃない。

「あなた」はあなたの「真ん中」だ。

ただそれだけの話をしているが、この書き話しも、ひとまずはあなたの「真ん中」には受け取られないだろう。

それはしょうがないのだ。

おれはただ、何がどうであつても、おれ自身としては「真ん中」の出力をつづけるしかない。

そのことはきくと、逆にあなたをイライラさせ、おれはあなたからの憎悪を買ってしまうことになるのだが、それでもおれは、自分の真ん中を否定する気にはなれないし、そもそも人の真ん中ということじたいを否定する気になれない。

人の真ん中と、その真ん中だけが通じている先についてを、おれは否定する気になれない。

どこかの時点から、むしろあなたの側で、おれのことを「ダメだこいつ」「話を通じない」と汚らわしく思えるようになってくる。

そのときは、それまでだ。

その先にそれぞれがどうなっていくのかは、正直なところおれも知らない。

「様子が、変わる」ということが起き、まるで乗っ取られたようになり、

やがて、その乗っ取られた状態のまま、人は進んでいくことになる。

それが誤りなのか、それとも正道なのか、一時的なのか、恒久的なのか、おれは知らないし、誰にもわからない。

おれが出来ることは、おれの知る限りのことをなるべくウソ偽りなくアナウンスすることだし、あとはせいぜい、なるべく多くの人が自分の選択に納得して生きていけるということを願うしかない。

無力なのは事実なのでしょうがない。

こんなことを外部からなんとかできるのは神仏だけだ。

そして内部からなんとかできるのは常人だけだ。

何をどうすればいいのか、おれは何をどうやっているのか。

「真ん中」って、じつさいには何をどうやっているのか。

一般的な意味でいうと、おれは何もやっていない。

しかし真相としては、おれはずいぶんなことをやっている。

このわけのわからないことを説明するために、ここまでで、いちおうキーワードは出揃わせた。

おれが、一般的な意味で何かを「やる」と、そのことは必ずデシベルを発生させてしまう。

こだわりとか、善悪とか、そういうことによってデシベルが発生してしまう。

また、そのこだわりとか善悪とかの仕分け・チェックに向けて、必ず一定のリソースが費やされてしまう。

おれは、0リソース、0デシベルで、何かをしなくてはならないので、一般的には何かを「やる」というわけにいかない。

しかも、0リソース、0デシベルといって、何かを「クセにする」というような安易なことでは、それは0リソースにはなってくれないのだ。

クセというのは、パターンの繰り返しによって感覚が麻痺し、その自覚がなくなるといっただけであって、リソース消費がゼロになっているわ

けではない。

たとえばいわゆる貧乏ゆすりをする人がいたとして、そうしたクセは自分を慰めるために現れているものだが、そのとき自分を慰めるためのリソースはちゃんと割かれているもので、本人がただ麻痺してしまっただけではない。

だから、じつさい0デシベルになるわけもなく、

「あの、その貧乏ゆすり、気に障るのでやめていただけますか」ということになる。

何かをクセづければいいんですよね、というような安易な発想で、大人としてまともなことができるわけがない。

では何をどうしたらいいか。

おれは「真ん中」の話をしている。

おれは「本当のオレ」みたいなものを空想する必要がない。

本当のおれは、ずっとおれの真ん中にいるので、空想に何かをデッチあげる必要はないのだ。

真ん中をどうすればいいか。

おれは何をどうしているかという、おれはその真ん中を「ぶち上げて」いるのだ。

真ん中をぶち上げ、冗談じゃなく、そのぶち上げた先で、何かと出会っている。

出会っているというのは、概念的なことではなく、むしろ肉感的というほどのことだ。

ぶち上げた先で、何かと出会い、何かと交わっている。

(わけのわからない説明を書き足しておくので、読み飛ばすように。真ん中をぶち上げるというのは、気魄を超アンダーに入れ(地面に突っ込むほどにして)、それによって「場所」が形成され、その反作用によって真ん中がぶち上がるということだ)

ぶち上げたものが、ぶち上げた先でどうなっているのか。ぶち上げた先で「何」と出会っているのか。それを観測するということはできない。

観測不能のものだし、観測というのはそれしたいがリソースを食う。

ただ、その観測できないもののところまで、真ん中を「ぶち上げる」ということができる。

それがこころの「真ん中」だけに与えられた特別の機能だ。

特別な機能というより、特別な権利か、あるいは特別な赦しなのかもしれない。

そのぶん真ん中には、観測という機能がないので、ぶち上がった先のことを観測することはできない。

ただ体験だけが得られる。

おれは万事のことについて、おれの真ん中をぶち上げ、ぶち上げた先で何かと出会い、その肉感的かつ爆発的な出会いと「交わり」を保ったまま、営むべきを営んでいるのだ。

断言できるのは、おれがもしその「ぶち上げた先で出会っているもの」から離れるのなら、おれは何でもない、ただのまるきりの凡人でしかないということだ。

あなたと何もかわらない。

本当に、びっくりするぐらいあなたと同じだ。

あるいはあなたよりおれのほうが低性能かもしれない。

さらに正確に言えば、おれが何をしているときであっても、じつはおれは終始、凡人のままなのだということになる。

おれがあなたにもたらしめているものは、じつはおれのスゴさではないのだ。

おれは何もスゴくない。

あなたをなるべく怖がらせないため、まるでおれがスゴいというふうには表面的には言っているけれども、じつはそれは便宜上そう言っている

だけなのだ。

真相としては、困ったことに、おれは凡人で、凡人のまま、すべての現象をもたらしめている。

もしおれが偉人だったなら、こんなややこしいことはせず、ひたすら自分のスゴさだけで、何かがもたらせただろうけれども。

おれはそうではなく、偉人ではないがゆえに、おれのスゴさから何かをもたらすということはできず、だからこそそうではないもののスゴさをもたらすということを見つけていったのだった。

AとRで言うなら、おれはずっとAのままだ、まったくRではない。

ここにいるのは、おれAとあなたAであって、どちらがスゴいとか、どちらがシヨボいとか、そういうことではまったくないのだ。

まだあなたが知らないことがある。

おれがあなたにもたらしめているのは、A*だということ。

A*、この読み方がわからないと読み進めづらいだろうので、こういうのはたいてい「エー・スター」と読むのがふつうだ、と言っておこう。読み方はどうでもいい。

おれは「何もしない」のだが、ただ真ん中をぶち上げはする。

そしてどうやら、ぶち上げた先で何かに出会い、交わっている。

それで、ここにいるのが、

おれA*

あなたA*

になるのだ。

「*」と交わっている。

Aそのものは変わっていない。

空想上のRを「本当のオレ」だなんて引っ張ってくる必要はない。

Rよりはるかに上位のものが直接もたらされるなら、Rになんか何の用事もないのだ。

記号上、おれは「ぶち上げ」によって、ぶち上げた先でその「*」に出会い、交わっているということになる。

おれは、ぶち上げに巻き込んであなたをそこに連れて行くし、巻き込んでついでにあなたに同じものをもたらすので、あなたAにもその「*」が付くのだ。

スゴいのはその「*」であって、おれではない。

「*」は、空想されたRなどよりはるかに上位の事象なので、Rの出番はなくなり、よって「こだわり」というのも無力化する。

宝石よりはるかに輝く鉱石が現れて、無尽に降り注いできたなら、これまでの宝石商のこだわりなど誰も見向きもしなくなるだろう。

ピジョンブラッド・ルビーにこだわりの高額がついたのは昨日のことまでで、きょうはもう赤い飴玉でもかまわないということになる。

おれの声がおれの声だというこだわりはなくなるし、あなたの声があるたの声だというこだわりもなくなる。

どうせ聞こえないから。

聞こえているのは「*」だけでいいし、本当に聞こえているのはけっきよくそれだけだから。

白金の鈴を鳴らさなくていい、アルミの鍋を菜箸で叩けばいい。

どうせ聞こえないから。

0デシベルだから。

おれが言っているのは、もちろん自己愛に反することだから、あなたはこの時点で「うーん」と顔を曇らせるかもしれない。

あなたがあなたの声だというようなこだわりは要らない、という言いようは、まるであなたそのものを否定していることのように、あなたは聞こえるだろう。

あなたは自己愛をあなただと思っているから。

あなたは自分の声を、声Aではなく声Bにしたいと思っている。

あなたはお祭り騒ぎを起こすおれの声を、いい声だと認めてくれるかもしれない。

でもじつは、そのおれの声は、声Bではないのだ、声A*なのだ。

そしてあなたに聞こえているのは「*」のほうなのだ。

一般には解き明かされようもない誤解の仕組みがここにある。

^^「*」は観測不能の事象なので、あなたには「聞こえる」という体験だけが与えられるV。

われわれは観測可能なものしか捉えられないから、あなたはその「聞こえる」という体験を、「AなのかBなのか」という観点で取り扱うしかない。

そこで、あなたは自分に聞こえてくるものを、
「すごくいい声だし、ただの声Aとはとても思えない」と考える。

だからあなたは、おれが声Bを出しているものと判断するのだ。

本当はそうではなく、おれが出しているのは声Aのまま、あなたに「聞こえる」という体験をもたらしているのは「*」なのだ。

なんという、想定外の仕組みだろう。

こんな仕組みがあるのだとすれば、これまで一辺倒に信奉しつつけてきたいつものやり方、「自己愛Bイメージを実現したいんです!」と頑なに唱えて落涙を伴わせるといった稚気めいたやり方にも、いいかげん疑義が湧いてくるというものではなからうか。

「真ん中」と自己愛を決着させよう。

自己愛は、Aを見下し、Bを尊崇している。

自己愛にとって、低級なAは悪であり、ハイクラスなBは善だ。

他人に対しては、そこまで必死にそのことを思うわけではないが、自

分のことについては、そのことに強い情動が湧く。

それを自己愛と呼ぶ。

そのことは、ふだんは隠れているが、ちょっとした本質におよぶと支配的に現れてくる。

様子が、変わる。

要するに、「Aは厭です、Bがいいです」という、慟哭だ。

Aは見下す方向の自己愛だし、Bは見上げる方向の自己愛だ。

そうではないものについて、いまおれは述べている。

「*」は自己愛ではない。

アプローチは単純、真ん中をぶち上げるだけ。

ぶち上げるだけで、0デシベルだ。

0デシベルでないなら、真ん中ではない自己愛営業所が発火している。

真ん中とは何かといえば、ただの真ん中だ。

ただの真ん中にどのようなこだわりを持ちうるというのか。

真ん中はただの真ん中、せいぜい「体の真ん中」としておけばいい。

この真ん中だけ、ぶち上げて何かと出会うという機能がある。

なぜそんな機能があるのか、そしていったい何と出会っているのか、

なぜ交わることまでが許されるのか、それはナゾだ。

そもそもその仕組みを、われわれが作ったわけではないのだから、「知らん」としか言いようがない。

あなたは自分の真ん中が「空っぽ」ということに怯えている。

街の真ん中に、自宅があるのだとしたら、そこはもうずっと空き家で、廃屋で、蔦が絡まり、お化け屋敷みたいになっていると怯えている。

たしかにそうだろう。

あなたの真ん中は空っぽだ。

けれどもそれでいうと、おれの真ん中も空っぽだ。

おれが、おれの真ん中に、どっしりと何かをたくわえているわけでは

ない。

おれには持ち物はないし持ちネタもない。

どうしてそんなものが必要だと思うのか。

^^おれは真ん中でいつも「つながっている」というだけであって、真ん中に何かを所有しているわけではないvv。

おれはぶち上げて「*」と出会う。

ぶち上がった先で「*」と交わる。

そうして「*」を、粗雑に言うと、ここへ持ってくる。

このことにおいて、おれの自前のブツなど必要だろうか。

おれが自前の何かを用意したり、ガメたり、蓄えたりしておく必要はない。仮に蓄えていたとしても、そんなものは使えない。

何を蓄えたつもりでも、何を準備したつもりでも、それは「*」ではないのだから、ただのAのこだわりブツでしかない。

そんな死んでいるものは使えない。

「*」は、保存などできるわけがなくて、いついかなるときも「そのとき」にぶち上げ、「そのとき」に出会い、「そのとき」に交わるしかない。

「いつも」ぶち上げて、「いつも」出会い、「いつも」交わっているしかない。

い。

あなたは誤解しているのだ。

あなたは自分の真ん中が「空っぽ」だと怯えて言うけれど、あなたはしごとやエレベーターについて「空っぽ」と怯えはしない。

エレベーターは基本的に空っぽだ。

空っぽのままエレベーターをぶち上げたら、ぶち上げた先、なぜか庫内に「*」が満ちるのだ。

おれは、あのときもそのようにしたし、いまこのときもそのようにしているし、これから先のいかなるときもそのようにする。

真ん中をぶち上げて、ぶち上げた先で出会うのだ。

何とはわからない、しかし「いつものあれ」に出会い、それいつものように交わる。

それは爆発的で、光り輝いていて、やさしいのかあたたかいのか、力感がないのでわからない。

無理やり言うなら、それは爆発的な、肉感さえ伴っている「栄光」だ。

「栄光」という事象の主体が存在するらしい。

そうしたことが、仮に本当にあったとして、本当に存在したとして、そうしたものは、あなたの自己愛を満たすために存在しているのだろうか。

さすがに、そんなことはない、とあなたも思うだろう。

いかな自己愛フリークであったとしても、ここまでの話となると限度を覚えるはず。

ここでああなたは、おれの書き話しによって、おれの声を聞き、おれに「会っている」ような体験を疑似的にでも得ていると思うが、本当のことを言うと、あなたがここで会っているのはおれではないのだ。

あなたがいつも会っている「この人」は、本質的には「*」なのだ。

あなたはそれに会っているので、会っている最中にはあなたは「あなたA*」になる。

そして、そんなことを言われても、あなたには何のことだかわけがわからないので、混乱し、あなた自身としては、元のAに戻るのだ。

このことには精密な理解が必要だ。

この理解をばやかしていると、あなたはいつまでたっても同じ閉塞から脱け出せない。

二つのユニット、

おれA*

あなたA*

があったとして、あなたが会っているのは本当はおれではなく「＊」のほうだ。

ただし、そのとき「＊」に会っているあなたというのも、じつはあなたではなく「＊」のほうなのだ。

「＊」が「＊」に会っている、というのが真相になる。

これは、わけがわからないのではなく、ただ「観測できない」というだけのことでしかない。

「＊」は、仕手の主体であり、受け手の主体でもあるのだが、観測できないので、われわれはこれについて考えるとき、観測可能な「おれ」「あなた」を捉えて取り扱うしかないのだ。

あなたはヤカンで湯を沸かしたとき、ヤカンから水蒸気が噴き出ているのを観測して、「お湯が沸いたな」と理解するだろう。

でもあなたがそのとき見ているのは本当は水蒸気ではなくて「水のつぶ」なのだ。湯気とは言っても水蒸気とは言えない。

これはただの理科の話だ。

水蒸気は目に見えない気体なのだから、あなたの目に「水蒸気が噴き出している」というのは観測できないのだ。

（何が言われているかよくわからない人は、いま目の前の空気を見てください。目の前の空気にも水蒸気は含まれています、あなたはその水蒸気が「見え」ますか。水蒸気は目に見えない気体です）

噴き出した水蒸気が、空気中で冷やされて、液体・水のつぶにもどっている、その水のつぶは視認できるので、それを「湯気」と観測して、あなたは「お湯が沸いたな」と理解している。

水蒸気は目に見えないのだからしょうがないだろう。

それと同じで、「＊」は観測できないのだから、認識上は「おれ」「あなた」と捉えて取り扱うしかないのだ。

ヤカンから出ている水蒸気は目に見えないように、おれがぶち上げて「＊」と交わっているのなんて目に見えない。

この観測不能の事象を、常識的には「ない、ない」と切り捨てている以上、われわれ凡人には自己愛しなくて当たり前だ。

おれはあなたに、あなたA*を与えるが、あなたはそれを「わたしAの実現かな」と捉えるしかない。

しかし当然、空想で作られたあなたAなんか実現しているわけがないので、あなたは自分の声も姿も「本当のわたし」になんかなくていいということを楽しむ。

そのことは、あなたとしてはとても納得のいかない、フラストレーションの体験になる。

とても納得がいかないので、あなたはたいてい、それを「誰かのせい」にする。

「あれ？ いや、本当はできるはずなんです」

苛立ちが起ころ。

あなたとしては、すでに「本当のわたしA」は実現済みになっているので、そこいらのAどもとは次元が違うはずなのだ。

それが、じつさいにはまさに「そこいら」のAどもと同レベルということにさせられるので、あなたはそのことをとても侮辱的・屈辱的に感じる。

このとき、実現済みの「本当のわたしA」の展示が「なぜか」できないということについて、たいていは「誰かAのせい」「あいつAのせいだと思ふ」「あのコAのせいだわ」と思う。

われわれにとって、「本当のわたし」、イメージの実現は、そのことのためなら様子が変わる・人格が乗っ取られるというほどの悲願なので、それがいまだに本当には実現されていないなどということは、なかなか受け入れられないことなのだ。

おれ自身はいつからか、空想した α の実現という、その発想じたいをなくしてしまっている。

そういうものではない、ということ、どこかで根本的に知ったのだろう。

発想じたいがなくなったので、「本当のおれ」という空想が湧くことじたいがもうない。

その代わり、いつだって真ん中をぶち上げて、栄光の主体と出会い、交わるしかないの、そのことがいつもヒリヒリしていて、正直に言えば空想なんてしているヒマがなくなってしまった。

真ん中をぶち上げるということ。

みずからで自分を A^* にするためには、みずからで真ん中をぶち上げ、ぶち上げた先で何者かと出会うというところまで行かなくてはならない。そのことを、おれはいくらでもあなたの目の前で実演してみせてもいいが、あなたはどうかだろう。

ここに赤の他人を三人集めて、その三人を前に置き、あなたに、

「ほれ、やってみて」

「ぶち上げちゃってよ」

と言ったとして、あなたにはじっさいにはそんなことはできないのではなからうか。

しかしおれのやっていることはそういうことでしかないのだ。

何をどうやっているのか、わかりやすく教えろということなら、これがいちばんわかりやすいだろう。

目の前に誰がいようと、何人いようと、「やれ」ということになったら、真ん中をぶち上げる。

ぶち上げているのに、真ん中だから0デシベルだ。

それ以外にやりようがないし、それ以外のやりように逃げるつもりはおれにはない。

おれはたぶん、ただ本当にそれをするというだけなのだろう。

目の前に $ABCD$ がいたら、どこの誰だか知らないが、おれはそいつらを $A^*B^*C^*D^*$ にする。

おれは、 A がどんな奴かは知らないし、どんな奴かを知っていくつもりもないが、一方で、 A^* のことは知っているのだ。 B^* のことも、 C^* のことも、 D^* のことも、おれは知っている。

「 $*$ 」はもともとからおれの友人だ。

だからおれは赤の他人にも友人として話しかける。

ただしそれは、赤の他人 $*$ にして、その「 $*$ 」に友人として話しかけるということだ。

それがもともとのそいつなのだから。

自己愛なんてそいつじゃないのだから。

そのためには、おれは真ん中をぶち上げていなくてはならない。

何十年も前から、基本的にそうしている。

かつては荒々しかったものが、いまでは型の整ったものになり、かつては説明不能だったものが、いまではこうして学問として捉えられるようになったというだけだ。

自己愛は「あなた」じゃない。

だからおれは、あなたの自己愛と対話しようと思わない。

おれのほうはそうだが、あなたのほうはそうではないのかもしれない。

あなたが自己愛を「わたし」と思っているのなら、あなたはその「わたし」にこそ向き合いなさいと、おれに対話を求めるだろう。

世の中の趨勢、時代の文化というものも、おれはそれなりにわかってはいるつもりだけれど、けっきょくのところ、各種のこだわりやピークを生じるデシベルを相互にじっくり味わいあうというようなことを、おれはあるべき「対話」というふうに思えないのだ。

むしろ、そういうのが好き、という人もいるのだけれども、おれには

どうにもそうしたものについて同好の士となりうる性分がない。

人がそれぞれに自己愛から漏らしているデシベルを確かめ合うのが大好きという人もいるにはいる。

それは、ぶち上げるのをあきらめた人はたいいそうなる、という傾向の実物でもあるだろう。

じつさい、ぶち上げて「＊」がもたらされるとき、多くの人々に起こるのは困惑と拒絶だ。

ぐわあん、と空間が歪む。

どうしようもない、というところがあつて、少なくとも、時間がかかる、時間をかける必要がある、ということなのだろう。

なぜ多くの人に、「ぐわあん」と、空間を巻き込んでまでの拒絶が起こるのか。

それは、単純な話、「認めたくない」からだ。

認めたくないといって、何を認めたくないか。

自分がぶち上げたことがない、ということ認めたくないのだ。

自分はぶち上げたことがないのに、この人はぶち上げている、ということ認めたくない。

人はきつと、このことをア priori に（先験的に）知ってはいて、要するに、本当は自分もぶち上げたいんだろう。

当たり前だ。お互い同じ、人として生きているのだから。

自分だってぶち上げたいに決まっている。

それについて、なぜか自分の場合は、自己愛が発火することにしかない、それが厭だ、と苦しんでいるだけだ。

真ん中のぶち上げには栄光がある。

栄光という事象の主体と交わっているという、どうしようもない栄光がある。

自分こそが、それでありたかった、いやそれでありたいのだという希

求を、おれは否定するつもりはない。

お互い、やれるところまでやりましょうよ、とおれは素直に思っている。

おれから申し上げるのは、おれの栄光について、その栄光の主はじつはおれじゃないよということに尽きる。

栄光の主は別に存在している。

だからこそ、おれにとつては、ぶち上がらないほうがおかしい、ということになる。

真ん中がぶち上がらざるをえない。

うつへっへ……

そういうじつさいのことが、きつといちばんむつかしいだろう。

栄光を自分特有のものにしたいという空想イメージがある場合、あなたは永遠にハズレをやりつづけるだろう。

栄光は「＊」のものだ、おれのものになったことはない。

自己愛はあなたではないし、あなたが抱えている「本当のわたし」というのはただの空想でしかない。

ただ、ここまで来てようやく言えるのは、それでもあなたには本当のあなたというのが存在するということだ。

本当のあなたは、栄光の主が持っている。

あなたが持っているものではないし、あなたが創り出すものでもない。

あなたが、本当のあなたになって、栄光を手にするところまで行く、

ということではないのだのではないのだ。

あなたがあなたのまま、栄光の主のところまで行くのだ。そしてあなたはあなたのまま、栄光の主と出会い、交わる。

そうしているときあなたは、ただ栄光の主の栄光を報せるユニットになる。あなたの栄光ではなく栄光の主の栄光を報せる者だ。

人は観測できるものしか捉えられないから、そのときまるであなた自

身に栄光があるというように捉えるかもしれないけれど、あなたはあなたの栄光について言われても、「えっ？」と首をかしげるのみだ。

そのときあなたは自己愛のことなんかすつかり忘れているし、こだわりを持って言われても、そんなもの持ちようがないとばかり答えるだろう。

そうしてあなたは、自己愛の自分ではなく栄光の主を愛している自分になる。自己愛はあなたじゃないし、栄光の主を愛しているということ
を自己愛とは言わない。

「自己愛は「あなた」じゃない／了」